

いつの間に背後に回られたのか、わからない。

空間を転移した感じも、高速移動の風圧も感じなかった。

ただ事実として、シャルの心臓があるあたりを、少女の爪が貫通している。

唇から血があふれ、全身から力が抜ける。ずりゅつ、と音を立てて腕が引き抜かれると、なす術もなく体は倒れ、開いたままの瞳が光を失った。

「シャル……おとおおお！」

シグムントが激昂する。だが、使い手が斃れた今、稼働レベルはガタ落ちだ。飛びかかる間もなく、獅子のあぎとが仔竜をとらえ、押さえつけた。

「ふふっ、これは幸先がいいの。《魔剣》がこうもたやすく手に入るとは」

魔力絶縁コードを額のように操り、シグムントをからめ取る。となりの魔術師も心得たもので、魔封じの袋を広げ、シグムントを包み込んだ。

少女は血まみれの指をべろりと舐め、満足げに視線を巡らせる。

「次は裏切り者を始末するわえ。ついて参れ、《完全なる獣》」

獅子を連れて、歩き出す。

悲鳴と怒号が飛び交い、空が燃え、校舎が焼ける。一瞬で地獄と化すメインストリートを、少女はやはり悠然と、無人の野を往くがごとく、遠ざかって行った。





Chapter 3 遭遇か、再会か



1

昼休みが始まった頃、ロキは図書館にいた。

優等生のロキには、比較的なじみのある場所だ。が、今日は資料を探しにきたわけでも、自習をしにきたわけでもない。ちらちらと貸し出しカウンターを盗み見していると、

「あ、ロキさん。フレイさんをお探しですか？」

メイド姿のアンリが声をかけてきた。内心ぎくりとしたが、顔には出さない。

「別に探してなどいない」

「フレイさん、もうお昼休みですよ。こっちですー」

「話を聞けー」

男嫌いのアンリも、ロキにはずいぶん慣れたようで、進んで司書室へ案内した。

「う。ロキー」

弟の訪問に驚き、姉はたゆんつと胸を揺すった。アンリと昼食をとる予定だったのか、大きなバスケットがテーブルの上に置かれている。ふさふさの犬が大小十数頭もたむろっ

ていて、足の踏み場がないほどだ。

姉の顔色は悪くない。先日は血行不良に苦しんでいたが、もう快復したらしい。

「ロキ、何か用事……だった？」

「いや、もう済んだ。じゃあな」

「ありがとう。心配して、見にきてくれたんでしよう？」

「違う！ なぜオレが——」

にこにこ、にこにこ。少女二人の笑顔にさらされ、ロキは黙った。最近わかってきたのだが、こういう場合、迂闊に口を開くと、ますます揚げ足を取られるのだ。

「お昼、一緒に食べよう？」

「いや、オレは済ませてきた」

「お姉ちゃんに嘘ついちゃ、めっ！——ぶんっ！」

「……これから済ませるところだ。放っておけ」

懷から林檎を取り出して見せる。簡素だが、ロキらしい昼食だった。

フレイはあきらめず、戸棚から皿とナイフを出し、手を差しのべた。

「貸して。むいてあげる」

「必要ない」

「でも！ 学院の林檎は、虫除け薬がいっぱい！」

「むけばいいんだろう、むけば！」

念動で林檎を浮かせ、人差し指の上に乗せる。実はくるくると回り出し、たちまち皮をはぎ取られ、八等分されて皿に落ちた。

「すごいです……！ すっぱり切れて……これ、念動ですか？」

アンリが羨望の眼差しを向けてくる。ロキはむずがゆくなった。

原理的には念動と言えるが、もはや念動と呼べるレベルではない。念動は浮力に近く、速度や硬度が得にくいものだ。

フレイがバチバチと手を叩き、嬉しそうに笑った。

「すごいね、ロキ。いつの間に……？」

「すごくはない。大げさなんだよ。この程度、実戦の役には立たない」

「でもこれ、魔術——」

突然、強烈なめまいが姉弟を襲った。

フレイが頭を抱える。ロキもよろめき、ラビのしつぽを踏んでしまった。きゃんつ、と鳴いて逃げていくラビに驚き、アンリも腰を浮かせた。

「フレイさん……？ ロキさんも、急にどうしたんですかっ？」

アンリは感じなかったようだ。一方、フレイは耳を押さえ、苦痛に顔をしかめた。

「う……近くで魔術回路が飛んだみたい」

「回路の暴走？ 焼き切れたのか？」

「たぶん……。それも、すごく難しい魔術……だと思う」

よろよろと窓を振り向く。ロキもそちらに目をやり——気付いた。

(マグナス！ ライコネン！)

図書館の裏手、ひと目につかない林の中で、魔術師が密談している。

ライコネンの背後には部下三名、マグナスの背後には乙女が五体——五体？

一体、足りない。不穏な予感が胸にわき上がる。

そもそも、状況がおかしい。ラザフォード排除を目論む監査官と、ラザフォードお気に入りの学生首席が、なぜ人目をばかるように会っている？

結託したと考えるには、状況が中途半端だ。学院長排除の相談なら屋内でやるだろう。

ここで語っているのは、大した内容ではないからか、そうでなければ……。

(時間がなかった？)

ロキは直感した。そう、何かが起きるのだ。今すぐ！

不意に両者がわかれ、別々の方向へ去った。

入れ代わりで別の影が現れる。獅子のたてがみのような金髪に、猫の眼のような金眼。

どす黒い瘴気をまとい、獅子と鷲、二体の自動人形を連れた少女。

マグナスか、ライコネンか、あるいはその両方を探していたらしい。少女は左右を交互

に見やり、やがて追跡をあきらめた様子で、こちらに目を留めた。

ぞくつ、と背筋が震えた。巨大な獣を前にしたような威圧感を覚える。

反射的に、エントランスで駐機中のケルビムを呼び寄せた。だが、ケルビムが到着する

よりはるかに早く、少女の笑顔がすぐ目の前にあった。

「ほう、プロミストチルドレン——いや、まがいものじゃない？」

（空間を跳躍した？ 何者だ、この女……!?）

至近距離から繰り出された爪が、ロキの肩口をざっくりえぐる。

「かわすか。若いの。よい反応じゃ」

「……よく言われる」

かつて、英雄グレンダン將軍にも言われたことがある。そのグレンダン將軍が、これと同じ「転移しての物理攻撃」を得意としていた。

ようやくケルビムが飛んできて、空中で大剣の姿になった。ごうつ、と噴き出る超高熱の気流を見て、少女が興味深そうに目を細める。

「何とも精密な機械人形——機能美じゃ」

「斬り捨てろ！」

「I'm ready」

大剣が炎をまとい、回転しながら少女を斬った。

司書室の窓枠が割れ、壁が砕ける。だが、少女にはかすりもしなかった。

そもそも、既にそこにいない。また空間を跳び越え、林の中に立っている。

そのかたわらに黒コートの魔術師が現れ、言いくそくにささやいた。

「お遊びが過ぎます。このような者を相手に、バハムートの魔術を……」

「固いことを申すな。面白そうな奴がごろごろしとるんじゃないもん♡」

「どうかご辛抱を。すぐに《焼却》の魔王が出てきます」

「……仕方がないの。では、聞かせてやれ、ローレイ。聞き惚れよ、生徒たち」

少女の命を受け、獅子の背で鷺が立ち上がり、畳んでいた翼を広げた。

そのおぞましい姿を見て、アンリが口を押さえ、フレイが「う!？」と叫んだ。

鷺の腹には、美しい女性の上半身が、胸像のように埋め込まれていた。

ぶら下がった、たわわな乳房がおぞましさを加速する。

鷺の腹で女性が唇を開くと、きんつ、と刺さるような音圧が飛んだ。

聞き惚れる? ローレイ? そんな美しいものではない。空気がゆがむほどの圧倒的

な音の奔流が、空間全体を震わせる。

ケルビムが痙攣し、死にかけの昆虫みたいにもがき苦しむ。

(コントロールできない——)

魔術回路が起動しないどころか、立たせることもできない!

「みんな……っ!」

フレイが大たちに命令を飛ばす。大たちはそれに応え、必死に吠えた……が、吠え声は

魔術の砲弾を生まず、きんきんきんとやかましいだけだ。

これとそっくり同じ魔術に、ロキは心当たりがあった。

イオネラ・エリアーアの《絶対王権》。こんな形で、また見ることになるうとは……。

とつさに逃げ道を探す。そのロキの瞳が、別の脅威をとらえた。黒コートの魔術師が、自動人形らしき黒豹を呼び寄せている。黒豹の牙の奥では、紫色のブラズマが燃えていた。

ロキはフレイの腕を引き、アンリを抱えて後ろに跳ぶ。やがて放たれたブラズマが、図書館をあっけなく倒壊させた。

2

「ここが（愚者の聖堂）……で間違いないな？」

あごを伝う汗をぬぐいながら、雷真は白いドームを見上げた。

「邪魔が入ったが、結果オーライだ。これで任務が果たせる。急いで——」

階段に足をかけた途端、背後から鉄拳が飛んできた。

ギリギリかわしたものの、バランスを崩し、階段を転げ落ちる。無様に倒れた雷真を見下ろし、火垂は最後通牒のように言った。

「言ったはずですよ。侵入するつもりなら、おまえを殺します」

「まあ待てよ。とりあえず、中に入ろうぜ」

「だから！ 入るなとっ！」

「外をウロウロして、あの怪物を減らしたくねえんだ。連中は他国の侵入者を食い止めて

くれそうだろ。つか、もう誰かに先を越されてるかもしれない。そうだったら、おまえの仕事にもケチがつくよな？ だから、ちょっと確かめてみようぜ。ほら、少しだけー入り口のところだけ！ 奥には行かないから、な？」

まさに口八丁。悪党が若い娘を誘うような文言だ。

火垂は口をつぐみ、考え込んだ。この建物こそが警備対象——であれば、じきに主も訪れるはずだ。雷真が好き勝手にふるまえるのも、それまでの話だろう。

葛藤の末、しぶしぶ、雷真についてくる。

（世間知らずだな……。悪い男に引つかかるぞ、こいつ）

少し心配になりながら、妹そっくりの人形を連れて、聖堂に入る。

古代の神殿のような造りで、壁一面に魔法円が彫り込まれていた。柱の彫刻は女神だが、頭が犬であったり、鳥であったりする。どことなくエジプトの神話ふうだ。

気温は一定で寒くはない。なのに、ぞっとするような冷気が漂っている。

やはりここには——何かが棲んでいる。

「このあたりで十分でしょう。どこまで入るつもりですか？」

火垂が雷真の上着をつかむ。警告と言うよりは、「怖い場所から帰りたい」妹のような態度だった。しかし雷真は止まらず、火垂を引きずって進んだ。

「もう少し行こうぜ。昼飯を食い損ねてよ、腹が減ってんだ」

「なっ……空腹？ それとこれに、どういふつながりがあるのですー！」

ぐー、と火垂の腹が鳴く。

三秒後、火垂は殺意に満ちた眼を向けた。

「もはやこれまで……!!
おまえを殺して
私も死ぬ!」



「こんな地下迷宮、油や食料の備蓄がないと不便だろ。だから——あった」

ホールを抜けた先に、小部屋の並ぶ区画があった。最奥は金属扉で密閉され、食料庫になつてゐる。思った通り、缶詰などの保存食がストックされてゐた。

正直、急いで奥に行きたい。だが、火垂はそれを許すまい。何とか火垂の気を惹こうと、雷真は本当に腹が減っているふりをして、適当に食料をあさつた。

「豚と豆。コンビーフ。乾パンにコーン。粉末レモン。学院でもこんなもんか」

固形燃料と食器を取り、となりの部屋へ移動する。そちらは休憩室らしく、テーブルや折りたたみの簡易寝台が設置されていた。

四徳ナイフの缶切りを使い、缶詰を開ける。コンビーフのフタを指でぬぐい、汁を味見してみると、案の定、塩気ばかりで甘みがなく、脂臭くて不味かった。

「金持ちのお坊ちゃん連中にはつくねえか、これ？」

「私は貴方が気の毒です。最期の晩餐がそんなものとは」

「最期にするなよ!? とりあえず、これでも食つてろ」

乾パンの缶を開け、中身を押しつける。戸惑う火垂には構わず、空き缶にナイフで穴を開け、固形燃料を放り込んだ。こんなものでも立派なコンロになる。その上にコンビーフの缶を乗せ、腰のハーネスから小瓶を取り出した。

寮の食堂でくすねた調味料だ。甘ったるいソースだが、かえって都合がいい。

脂が溶けて甘い香りが漂いはじめる。味を見ながら調味料を加え、最後に粉末レモンを

ふりかけて、雷真の調理は終わった。

もの珍しげに見ていた火垂に、フォークを差し出す。

意外だったのだろう。火垂はぱちぱちとまばたきした。

「遠慮せず、食えよ」

火垂はふいっとそっぽを向いた。

「敵の施しなど受けません」

「俺じゃなくて学院の施しだ。何の問題もないな？」

火垂は頑固に無視を続けた。だが、戦隊のボディは忠実に人体の機能を再現していて、

脂の香りという刺激に対し、胃の蠕動という反応を返した。

ぐー、と火垂の腹が鳴く。三秒後、火垂は殺意に満ちた眼を向けた。

「もはやこれまで……！ おまえを殺して私も死ぬ！」

「早まるなバカ！ 腹の虫くらいでー」

雷真はとっさにフォークで肉を刺し、火垂の口に突っ込んだ。

火垂は熱がるふうもなく、もきゅもきゅと咀嚼して、のみ込んだ。

——反応がない。だが、大人しく座ったまま、じっと雷真の手元を見つめている。

雷真はもうひとつ突き刺して、その鼻先に差し出した。

ぱくつ、と食いつく。まるで猫の餌付けだ。笑いそうになるのを必死に我慢する。

思い返せば、撫子も変なところで意地っ張りだった。

火垂は本当に、撫子そっくりだ。見た目だけではなく、仕草や態度まで。

地球の反対側で、妹と久しぶりに再会したような、そんな感覚。

（天兄……あんたは一体どういうつもりで、こんな人形を造りやがったんだ？）

胸が締めつけられる。痛みと、感傷と、そして優しい気持ちに揺さぶられながら、雷真はフォーク運び、甲斐甲斐しく火垂の世話を焼いた。

コンビーフ、スパム缶、ビーンズ缶が空いた頃、火垂の腹は満たされたようだ。くれと言わなくなったので、雷真も自分の食事をする。缶詰の汁をパンに吸わせていると、火垂は今さら恥ずかしくなったのか、赤い顔で吐き捨てた。

「……先ほどから卑猥な視線を感じます」

「卑猥じゃねえだろ！ 優しい目だろ！」

「友好的なはずがありません。おまえはマスターの敵のはず」

「口のまわりをタレまみれにして言う台詞か」

「なっ……見ましたね!? おまえを殺して私も死——」

「やめろ！ そして、これで拭け！」

紙ナプキンを押しつける。火垂は口を拭き、それから、思い出したようにひたいに触れた。いつものヴェールがないと落ち着かないのだろう。

そんなところまで、人間的だ。

雷真は砂を噛んだような気分で、火垂の横顔を盗み見た。

「また卑猥な視線——この顔がよほど気になるようですね。何だと言うのです？」
「……あいつから、聞いてないのか？」

意外だ。機械じみた火垂の顔に、一瞬、痛みが透けて見えた。

火垂はすぐに澄まし顔に戻り、機械的に応答した。

「マスターは何も。おまえと違い、マスターのお言葉は常に必要十分です」

その指が、きゅっと握り込まれるのを見て、雷真は火垂の胸中を察した。

雷真が硝子や三姉妹に感じたのと同じ〈壁〉を、火垂もマグナスに感じている。ぐらりと確信が揺らぐ。俺はこいつを……殺せるか？

（何を迷ってる！ やるしかねえだろ！）

戦隊を破壊しなければ、夜々が殺される。あまりに簡単な論理式だ。

即席コンロの中で火が消え、不意の静けさがあたりに満ちた。

「おまえとマスターは、どういう関係なのですか？」

不意打ちのような問い。雷真は言葉に詰まり、とっさに火垂をからかった。

「何だ、俺のことが知りたいのか？」

「誰がおまえなど——っ！」

「すぐ暴力に訴えるな！ その癖直せ！」

わかっている。火垂は雷真ではなく、主のことを知りたいのだ。

……本当のことを伝えれば、火垂はマグナスを嫌悪するだろうか？

そうしたら、少しは有利に戦えるだろうか？

遼巡しやうしゆんの末、雷真らいしんはただひと言、こう答えた。

「俺たちは、雲と泥だ」

「雲……泥？ それはどういう——」

きいん……、と不自然な耳鳴りを感じた。

火垂ひたんも感じたようだ。お互いに顔を見合わせ、天井に目をやる。

「すげえ魔力を感じるぞ……上で何が起こってる……？」

真まっ先に夜々ややの顔が浮かんだ。地上に残してきた、大事な相棒の顔が。

夜々はどうなった？ 近くには硝子しょうすいがいた。回収し、修復してくれたと信じたいが——

それとは別の、予期せぬ脅威を頭上に感じる。

天井だろうが岩盤だろうが、今すぐ破壊して戻りたい。

だが、どうしても、手ぶらで戻るわけにはいかないのだ。

先ほど硝子から感じた、硝煙しょうえんの臭いにおいを思い出す。硝子の周辺にはキナ臭いものが立ち込

めている。硝子が軍ににらまれるような事態は、何としても避けなければ……。

「火垂、頼む！」

雷真はテーブルに手をつき、ひたいを強打する勢いで頭を下げた。

「この通りだ。今回ばかりは、俺の盗掘行為を見逃してくれ！」

「……道理に合わないこと言いますね。芋虫みたいにみつともないです」

「芋虫上等。さつきも言ったが、俺は急いでんだよ。上じゃ何かが起こってる。俺の相棒が、戦國のと真ん中に放り出されてるかもしれないねえんだ」

「相棒？ 誰のことです？ ひょっとして、自動人形のことですか？」
くすつ、と嘲笑を漏らす。取り合ってくれる素振りもない。

「頼んでも駄目なら——俺はおまえを倒してでも行く」
ごっ、とお互いの魔力が燃え上がった。

火垂の周辺で空気が灼熱する。先ほど、魔力を与えすぎたか。怪物との戦いでわかったが、火垂の魔術は〈圧力〉を操作するもの。肉体に適用すれば、夜々に伍する瞬発力を得ることが可能だ。気を抜けば、一撃で殺される。

「愚かな男ですね。人形の安否が知りたい——それだけのために命を懸けますか？ 人形など道具にすぎない。どんな高価な人形も、命には替えられません」

「……そうだな。俺は夜々を復讐の道具にして、いいように利用してる。あいつの生命を俺のために使わせてんだ。ならよ！」

真正面から火垂を見据え、叩きつけるように言う。

「俺にだって、あいつのために生命を張る——義理があるはずだ」

火垂が目をみはる。雷真の言葉は矛盾だ。道具扱いしているから、道具のために命を懸ける——それは結局、道具扱いしていないことになる。

火垂はたるはそつと、自分の腰に触れた。

そこに何があるのだろうか？ スカート越しに、小さな箱が浮き出して見える。雷真らいしんの視線に気付かないのか、火垂はその箱を何度か撫で、緊張をゆるめた。

殺気が消える。ひよつとして、見逃してくれるのか……と期待を持ったそのとき、火垂の背後に音もなく冷気が立ちのぼった。

密ひそかに忍び寄っていた真冬が不意に牙をむいたような、そんな襲撃——
「刃傷にんじやうごろし——氷割ひわり太刀」

鋭利な氷刃が壁を斬り裂き、火垂の顔に真横からぶち当たった。

3

打ち捨てられたシャルの遺体を、日輪ひのわは呆然ぼうぜんと見下ろした。

「シャル……ロツト……さま？」

周囲を学生たちが駆け抜けていく。何人にも肩をぶつけられながら、日輪はその場を動けずにいた。涙が次々にこぼれ落ち、足もとに氷玉模様を作る。

(どうして、こんなことに……っ)

学内で立て続けに火の手が上がり、自動人形オートマトンが次々にコントロールを失った。だから、日輪はシャルを探していた。友達の身に何かあったのではと、心配だったから。

それなのに——こんなひどい対面が待っているとは。

「申し訳ありません……わたくし……わたくしがもつと……っ！」

後悔が押し寄せる。雷真だけでなく、シャルの近くにも式神しきぐみを放っておけば！
がしゃんつ、とガラスが砕ける音がして、シャルの遺体が粉々になった。

破片がさらさらと風に溶け、輝きながら消えていく。その消滅に合わせ、汗びっしよりのシャルが虚空から姿を現した。帽子の上にはシグムントの姿もある。

「まだ付近にいるかも知れん。気を抜くな、シャル」

「わかってる……けどっ」

上手くしゃべれない。シャルは両手を石畳につき、肩で息をしていた。

日輪はばくばくと唇を開け、声にならない声を出した。すぐにも駆け寄りたいと思ったが、ひっきりなしに学生が横切り、もみくちゃにされ、身動きが取れない。

「ロツテ、無事？」

——誰だれの返事もない。シャルの精霊感応力エコーレスセンスが弱まっているのを日輪の第六感セクシスが見抜く。
何があったのかは知らないが、これでは精霊術シンマスクリが使えないだろう。

シグムントが重苦しい声でつぶやいた。

「（鏡面写像）で君の代わりに重傷を負ったな。敵は精霊に接触できた——攻撃できたということだ。皮肉にも、そのおかげで触覚を欺瞞ごまんできたか……」

二人の会話は半分しか理解できなかったが、結論だけは完全に理解できた。

せつかく手にした強大な力を、シャルは遭遇戦で封じられてしまったのだ。
だが、シャルは怯まず、毅然として立ち上がった。

「さっきの子、どこへ向かったのかしら？」

「おそらく、オルガのところだ」

「……どうして言い切れるの？」

「あの魔女は〈金薔薇〉だ。オルガの育ての母であり、実の祖母だよ」

「祖母!? それが本当なら、是非とも美容の秘訣を訊きたいところね……」

「シャルよ、軽口を叩いている場合ではない。結社を抜けるのは叛逆と同じだ。叛逆者は必ず肅清される。魔女は必ず、オルガを抹殺しようとする」

「なら、はやばやしてられないわ。助けに行かなくちゃー」

シャルの口から出た言葉を聞いて、日輪も、シグムントも、啞然とした。

「……本気か? オルガは一度、君から私を奪ったのだぞ?」

「貴方は帰ってきたわ。命をくれたのはトールよ。オルガを見殺しにはできない」
迷いのない言葉。日輪の目尻に、先ほどとは違う涙がにじんだ。

胸が熱くなる。この方はやはり――

（雷真さまと同じ手触りの……強い魂をお持ちです!）

シグムントはシャルの帽子によじ登り、冷静な声で訊いた。

「だが、勝算はあるのか?」

「……大技を使う余裕を与えてくれるなら、仕留めようはあるかもしれない」

「〈ゴライアス〉か、〈マグナム・オーパス〉だな」

「ええ。でも、敵は瞬時に私の背後を取った。撃たせてもらえらるとも、当たってくれらると思えない。オルガの祖母なら、精霊術も使うはず——一対一は絶望的だわ」

どちらも準備時間がかかる。ゴライアスはシグムントを巨大化させる必要がある、マグナム・オーパスは滅元素の体外充填が必要で、精霊の協力が不可欠だ。敵がオルガと同レベルの精霊使いなら、それ未満の火力は精霊でブロックされるだろう。

シャルの言葉を聞いて、シグムントはゆったり首を上下させた。

「的確な分析だ。その上、いやに謙虚だ。気味が悪いほどに」

「私はもともと謙虚な人間よ——とにかく、急いで応援を呼びましょう！」

「応援——雷真か？」

「なっ、こっ、短絡思考よ！ 今の私には、あいつ以外にも友達がいるんだから！」


「あのっ——シャルロットさま！」

やっと声が出る。意外なほどの大声だ。学生たちが驚いて道を開け、日輪はようやく、シャルのもとにたどりつくことができた。

「ヒノワ——無事だったのね！」

それはこちらの台詞だ。日輪はぼろぼろと泣き崩れ、シャルにすがりついた。

「生きていらしたんですね……！ わたくし……わたくし……っ」



「早まるなバカ！ 腹の虫くらいで！」
雷真はとっさにフォークで肉を刺し、
火垂の口に突っ込んだ。
火垂は熱がるふうもなく、
もきゅもきゅと咀嚼して、のみ込んだ。

「泣かないで。いいところにきてくれたわ。ちょうど今、貴女にお願いができたの」
日輪は鼻水をすすり、シャルを見上げた。

「私と一緒に戦って。魔女の手から、学院を護るわ！」

4

二百年の伝統を誇る王立機巧学院は、それ自体が堅固な要塞と言えた。
高い城壁に囲まれ、七隊からなる警備隊に護られている。教官はいずれ劣らぬ機巧魔術
のエキスパート。そもそも学生自身が、各国選りすぐりの俊英たちだ。

まして今年には魔蝕の年——四年に一度の夜会が開催されている。伝説級のアンティーク
から各工房の最新鋭機まで、高性能自動人形がひしめいていた。

そして何よりも、ここは一九世紀最強の魔術師に護られている。

（一体、誰に想像できただろうな。学院がこうも容易く陥落するなど）

ライコネンは酷薄な笑みを頬に刻み、メインストリートを北上していた。

曲がり角から黒豹が飛び出し、ライコネンに攻撃を仕掛けてくる。射出されたプラズマ
を跳躍してかわし、空中で身をひるがえしざま、黒豹に指を突きつけた。

はとばしる火炎が黒豹を直撃、大爆発を引き起こす。

操者の魔術師が退却しようとする。ライコネンは自らを火炎に変え、その進路上に転移

した。まだ対応できていない相手に、容赦なく剣の一撃を浴びせる。

絶対王権の影響を微塵も感じさせない戦いぶりだ。部下たちが感嘆の息を漏らした。

その一人、ディラックが前方を示した。

「閣下。警備が苦戦しております」

言葉通り、警備が量産型自動人形を用い、賊と交戦中だった。

「おい、早く非番の隊に連絡しろ！ カッツバルゲル隊はどうした！」

「到着しました！ 応援部隊です！」

「陣形横陣！ オーバーラップしろ！」

後続部隊が散開し、味方を追い越して敵の後方へ回る。単純だが、効果的な包囲戦術だ。射線が集中し、敵の黒豹を破壊する——かと思われたが。

あいにく、魔術が発動しない。それどころか、ヘイムガーダーは一八〇度向きを変え、警備の側に襲いかかった。

「これは……!?」「制御不能です！」

敵は俊敏だ。警備が動揺した隙に、魔術師自らが接近戦を仕掛け、ダガーを突き立てる。とほつ、と警備から血があふれ、ほんの数秒で死体となった。

それでも、警備の指揮官はまだ冷静だった。

「人形を放棄して撤退する。本隊は解散、そのまま各隊に伝令！ 初夏の一件と同じく、敵は（絶対王権）を使っている可能性あり——行け！」

命令を受け、バラバラに走る。こうなると、数で劣る攻撃側は追撃できない。

（警備はまずまずの練度だな。だが、魔術に頼りすぎている）

人形以外の武装も携行すべきだ。その用意を怠るから、失態を演じる。

逃げ惑う学生も不甲斐ない。抵抗する気概もないようだ。

もつとも、自動人形を奪われていては、それも仕方がない。

自動人形は意志を失い、あるいはよろめき、あるいは倒れる。その背に降りかかるのは

黒豹の融合爆裂。破壊された自動人形の残骸で、あたり一面、死屍累々だ。

その地獄絵図の中——まだ戦っている者がいた。

白銀の剣が宙を自在に舞い、黒豹の頭部をはね飛ばす。

剣は止まらず、さらに魔術師を斬り伏せた。

（この絶対王権の中、あんな機械人形二体を自在に操るとは……）

瞬間的な支配力で言えば、この俺——ライコネンを上回っているだろう。操者は並みの

魔術師ではない。誰の仕業か、容易に知れた。

「とっとと逃げる、愚図め！　ここが戦場なら三度は死んでいるぞ！」

現実とは予想を裏切らない。見覚えのある女が警備を怒鳴り散らしている。

グリゼルダ・ウェストン。《迷宮》の魔王だ。

形勢不利と踏んだのか、黒コートの魔術師たちが林の奥に撤退した。

「追うな！　動ける者は学生を誘導しろ！　おい貴様、学生の避難はどうなって——確認

できてないだとい？ ええい、腰抜けどもめ！」

「そう怒鳴ってばかりでは人は動かないぞ、ミス・ウェストン」

「何だとい？ この私に説教を垂れるとは、どこのどいつ——」

目と目が合った瞬間、グリゼルダの髪が逆立った。

「先生——」

この再会には、彼女の情動に、どんな影響を与えたのだろうか？

長い前髪が浮き上がり、左眼周囲の紋様が浮かび上がる。

一瞬ののち、剣と盾、二体の機械天使がライコネンに襲いかかってきた。

教授が攻撃してくるとは想定していなかったのか、ライコネンの部下は反応できない。

剣と盾の機械天使はたやすく彼らを抜き、ライコネンに肉薄した。

ライコネンは自らを炎に変換し、己の密度を疎にして、別の地点で密に戻った。

いわゆる空間転移。だが、出現位置を感知されている。実体をもったときには、グリゼルダが眼前に迫っていた。剣の人形を引き寄せ、必殺の一撃を叩き込む。

その斬撃を、ライコネンは佩刀で受け止めた。

完全統制振動の前では、鉄の剣など小枝に等しい。砕けて当然の状況だが、高度な念動

——《魔剣》のスキルで硬度を底上げしている。剣の代わりに足もとの石畳が砕けた。

「腕を上げたな、迷宮の魔王。それとも、人形を変えたせいかな？」

逆鱗を刺激され、グリゼルダの全身から怒気がほとばしる。

「これは貴様の手引きか……？ 恥知らずが！」

「恥なら知っている。——敗北だ」

魔術を放つ。グリゼルダの真下から、数十メートルもの火柱が出現した。

言語に絶する火力。神話の世界に登場しそうな、万物を焼き尽くす炎だ。

だが——グリゼルダは健在だった。彼女の周囲だけ、炎が存在しない。

完全統制振動が大気分子運動を妨げ、熱の伝導を遮断している……らしい。

術者に適用するのも困難な魔術を、周囲の空間に適用している。極めて精密な魔力制御。

《迷宮》の魔王ならではのテクニクだった。

ライコネンは炎を引つ込め、素直に賞賛した。

「見事だな。思わず欲しくなる自動人形であり、魔術師だ」

「貴様、どこまで……今すぐ首を落としてやる！」

「どうしても言うのなら、相手をしてやってもいいが」

ゆらり、とライコネン自身の影が揺らめき——燃え尽きた。

既に後ろを取っている。弟子の肩に手を置いて、ライコネンはささやいた。

「俺は新たな学院長で、おまえは教授だ。冷静な判断をしろ」

一方的に言い捨てて、突き飛ばす。

去り際、ライコネンは弟子の服装を一瞥し、皮肉な気分で笑った。

「しばらく見ないうちに、女らしくなったな」

グリゼルダはあわててスカートを引つ張り、ふとももを隠した。羞恥と屈辱で頬が赤い。腹立ちまぎれなのか、吐き捨てるように言う。

「……何が新学院長だ。あの狸が泣き寝入りするはずもない。死ぬぞ！」

「そのラザフォード氏がどうなったか、見物だな？」

「なに？ それはどういう……意味だ？」

「大人しくしている。学院は俺が救ってやる。賊を皆殺しにしてな」

ライコネンは再び戦場に向き直り、己の歩みを再開した。

5

学院長公邸の別邸、そのひとつが、特別な学生のための寮となっている。

少し前まで日輪とその従者が使っていた建物だ。その二階で、両腕をギブス固定された

男子学生——（下から一番目）ヴェイロンが眠っていた。

レースのカーテンから光が差し込み、引き締まった胸板に陰影をつけている。

オルガは恋人の寝姿をつくづく眺め、幸せなため息をついた。

ヴェイロンが身じろぎをする。オルガはその頬を突つき、甘ったるくささやいた。

「傷の具合はどうだ？」

「……どうってことはない。放っておけ」

「つれないな。目覚めたのなら、おはようのキスをくれ」

「面倒な女だ……。いちいち、そんな真似——」

言葉をさえぎり、強引に唇を奪う。刹那、窓ガラスが盛大に砕け散った。

破片がカーテンを引き裂き、雷雨のように降りかかる。

「……度しがないのう、オルガ。白薔薇の小倅と乳繰り合っておるとは」

怒りを殺した声。窓の向こうに浮いている者を見て、オルガは息をのんだ。

「おばあさま……？」

信じられない。いずれ追っ手がかかるものと覚悟はしていたが、よもや、セトの大魔女

——金薔薇が直々に追ってくるとは！

ヴェイロンの判断は速い。ギブスのベルトを引きちぎり、オルガを背中に隠す。と同時に、

ベッド下から甲冑が飛び出してきた。手甲に足甲、胸当てに肩当て。《距離操作》の

魔術を秘めた自動人形スレイブニルだ。

「逃げろ。面倒だが、ここは俺が食い止める」

「馬鹿なことを。一人でおばあさまに立ち向かうつもりか」

「俺のスレイブニルは健在だ。だが、おまえには自動人形がない」

「なめるな。私とて学生総代を務める女——手段はある」

魔力が噴き上がり、一帯の精霊が集まってくる。魔剣闘法を習得しているだけあって、

オルガには精霊術の素養もあるのだ。

オルガは恋人の背中にもたれ、微笑んだ。

「さんさん引き裂かれたのだ。せめて、死ぬときは一緒だ」

「……そいつは無理だ。俺はおまえを死なせない」

視線がからむ。キスをしたいと思ったが、さすがにそんな余裕はない。

「ふふ……そんな見戯でわしに敵するかえ？ つくづく、度しがたい！」

魔女の肩から魔力が飛んだ。——それしか、理解できなかった。

記憶が途切れたのかと思う。気がつくと、魔女はもう二人の背後にいた。

振り向こうとするオルガの背中に、魔女の貫き手が刺さる——

ざんつ、と甲高い金属音が鳴り響き、爪が誰かの胸に当たった。

黒眼鏡をかけた不良執事——アリスの従者シンが、オルガを休でかばっている！

「やれやれ、真つ昼間からお盛んなことだね」

部屋の入りに、仏頂面のアリスが、くさくさした様子で立っていた。

「なぜだろうね、オルガ。君たちを護ってやる気がどんどん減退していくよ。おいシン、

僕のやる気を知らないか。どこかに落としてしまったようなんだが」

「ラザフォード家の執事は優秀ですが、少しばかり粗忽なのが欠点でして——私もどこかに置き忘れてしまったようです」

「ほう、アリスか……」

魔女はすぐに距離を取り、窓の外に手招きをして、獅子型自動人形を呼び寄せた。

「薄情な娘よのう……。一度は味方となつたのに、わしに背向かうか？」

「おあいにくですね、金薔薇さま。僕は貴女を味方と思つたことはありません」

「恩知らずめ。セトの呪いを貸してやつたではないかえ？」

「単に貴女を利用したまで」

冷然と言ひ捨てる。それから、父親譲りの膨大な魔力をみなぎらせた。

「その二人は学院の客人——このアリス・ラザフォードの客人だ」

「笑止……おまえ風情に何ができる！」

アリスに向かつて腕を伸ばす。療氣の塊が飛び出し、アリスを襲つた。

（セトの攻性即呪法——〈恩賜の腐毒〉——）

いや、その簡易版だ。威力は数段弱い、その代わり、人形なしでも発動できる。

アリスはシンを下がらせて、自らの腕で療氣を受けた。

「お嬢さま！」

「騒ぐなよ。こんなもの、僕にはどうってことないさ」

皮膚が崩れる。それは〈虚像〉による擬装にすぎず、義肢は無事だ。本家ロトンプレス

なら腐り落ちていたところだが、簡易版は金属を腐蝕できないようだ。

「セトの呪術は生物にこそ効果てき面——僕には効果半減だ」

「然り……ならば、魔術でやるわえ」

獅子の目が光る。次の瞬間、魔女はアリスの背後にいた。

単純な転移魔術とは違う、前兆なし、タイムラグなしの空間跳躍だ。アリスが反応できたのは奇跡に近い。繰り出された爪は心臓を外し、わき腹をえぐった。

シンは即座に蹴りを放ったが、命中の寸前に魔女は消え、まるで最初から最後までそこにいたように、窓際からこちらを眺めていた。

（あの魔術は……何だ？）

孫のオルガにも正体がつかめない。初めて見る魔術、自動人形だ。

ヴェイロンがスレイブニルを操り、自らの体に装着した。シンと連携し、魔女に挟撃を仕掛ける。途端に、暴風が吹き荒れるような格闘戦が始まった。

完全統制振動と距離操作。その破壊力は凄まじく、堅固な石壁が崩れ、床に大穴があく。だが、魔女は転移でかわすだけ。当たらないのでは倒しようがない――

魔女の一撃がヴェイロンの鎧を砕き、そのまま床に叩きつけた。シンがフォローに回った。――それが敵の読み通り。視界を埋め尽くすほどの療気がシンを阻み、たちまち肉を腐らせた。魔力が自己修復に充当され、シンの息があがる。

このままでは全滅だ。オルガは急いでアリスを助け起こした。

「しつかりしろ。おばあさまの爪を受けたな。無事か？」

「……そんなわけ、ないだろう」

口からあふれた血をぬぐう。生身の部分を引き裂かれている。

「かっこつけ」といって何だけど……状況は絶望的だね。完全に見誤っていたよ……金薔薇が

「――夜々、
おまえと行く」

「は、はい！ 夜々はきつと、
いいお嫁さんにな
ります……！」

「もーっ、姉さまばかり
ずるいよー」

「行きたければ、
私を破壊して行けばいい」



ここまでの魔術師だったとは」

「おばあさまは特別だ。レメゲトンなしでの一対一なら、学院長に比肩する」

「それは言い過ぎだね。ババに敵う魔術師がいるもん……ごほっ！」

血でむせて、咳き込む。オルガはあせった。放置すれば危険だ。

シンもヴェイロンも翻弄されている。ヴェイロンは怪我人ゆえに戦力以前、シンは生身ゆえに腐毒の影響をもろに受ける。あの二人では、祖母には敵わない。

味方が欲しい。切実に——誰か、味方が！

果たして、その思いが通じたのかどうか。

オルガの足もとに、黒い影が広がった。

ただの影ではない。にゅっと少女の腕が飛び出し、大量の呪札を宙に飛ばす。

「千妖万邪ことごとく奔るべし——急々如律令。きたりま征——」

呪札が鴉に変化し、魔女に向かって殺到した。

魔女は瘴気で迎撃したが、鴉はむしろ生き生きとして、その勢いを増す。これには魔女も驚いたようだ。きわどく転移して、やりすごす。再出現したところへ——

「ラスターカノン！」

立ち込める瘴気の渦を貫き、窓の外から、まばゆい光芒が突き刺さった。

だが、当たらない。魔女はやはり転移して、対面の壁際に出現した。

「——今のをかわした!? 本つつつ当に化け物ね！」

馬ほどの竜に乗って、窓から（暴竜）シャルが飛び込んでくる。

床からは別の少女が這い出きて、呪符を手挟み、構えを決めた。

「シャルロットさまたってのご要望により――土門日輪、助太刀いたします！」

オルガは目を疑った。この二人は……私に痛めつけられたのに……！

何が可笑しいのか、オルガの腕の中でアリスが笑い出した。

「まったく……アップルパイにジャムをのせて、蜂蜜をかけたみたいなのだね！」

魔女は新たな敵、とりわけシャルを見て、目を丸くした。

「ほう、確かに殺ったと思うたが。この金薔薇を惑わすとはの……」

腰に吊るした袋を開く。何を封じていたのか、中から光の精霊が出て行った。

自分の獅子を招き寄せ、にんまりと妖しい笑みを浮かべる。

「近う寄れ、子どもたち。この婆が、まとめて遊んでやるわえ！」

魔力が爆発的に膨れ上がり、遠くから雷鳴のような音が響いてきた。

続いて、魔女の全身から瘴気が噴き出す。ロトンプレスにまかれれば命はない。オルガ

は精霊をかき集め、仲間を護ろうとした。

だが、精霊たちはその意志に従わず、散り散りになって逃げてしまった。

精霊の支配権を奪われたのかと思ったが、どうやら……そうではない。

ヴェイロンの体から甲冑が外れ、ごとりと床に転がった。

日輪の式神（しもぎ）ががき苦しみ、ぼんぼんと紙切れに戻っていく。

シンの完全統制振動も効果を失い、靴底が床についてしまった。

（魔術を封じられている——!?）

今さら気付いても、遅い。腐毒がオルガを襲い、肺に潜り込んできた。

たちまち気管がただれ、肺胞が腐る。たまらず血を噴き、真後ろに倒れた。

意識が完全に消える寸前、愛しい恋人に名を呼ばれた——気がした——

6

いろりが放った氷刃は、妹の小紫ですら、震えがくるほど凶悪だった。

堅牢な壁を絹ごし豆腐のように切断し、部屋の外から火垂に当てる。

凄まじい冷気の凝集。人形使いの助けもなしに、これだけのことができる！

（やっばり、いろり姉さまはすごい！）

驚嘆しながら、自分の仕事も忘れない。銀剣に手をかけ、タイミングを待つ。

火垂が飛び出してきたら、ステルス状態から斬りつける手はずだ。だが、火垂は一向に

飛び出してこない。ひょっとして、今の一撃で決まった……？

——違う！ 雷真が妨害している！

室内から収束した魔力の糸が伸び、いろりの首筋に当たっていた。

「ら……雷真殿……！」

棒立ち姿勢のいろりの前に、水蒸気をかきわけて、雷真が現れる。

その後ろには激怒した様子の火垂もいる。顔に水滴がついているが、傷はない。雷真の魔力を受け、氷の刃を止めたらしい。

いろりと火垂はすぐにもぶつかろうとしたが、どちらも糸で呪縛されていた。

「は……放してください……雷真殿！ その者は……危険です！」

「わけあって休戦中だ。火垂も攻撃しないでくれ。あと小紫、おまえもストップな？」

はつきり目を合わせて言う。小紫は驚き、八重霞の隠形を解いた。

「すっごーい、雷真！ どうして私に気付いたの？」

「いろいろあってな。おまえたち二人だけか、捜索隊は？」

質問の形をとっているが、雷真にはもうわかっていようだ。小紫は「ふわあ……」とため息を漏らした。本当に、雷真は会うたびに技量を上げている。

雷真はようやく糸を引っ込め、真剣な面持ちでいろりに訊いた。

「夜々は無事か？」

いろりは火垂を横目でにらみ、震え声でつぶやいた。

「無事とは……申せません。ですが、命に別状は……ありません」

命に別状はない——その言葉を聞いて、雷真はどっと脱力した。軟体動物みたいに、肩から力が抜ける。本当に心の底から夜々を心配していたようだ。

火垂はじりつと後ずさり、魔力を高めて構えを取った。

「そちらの援軍がきた以上、馴れ合いはここまでのようですね」

「いや、まだだ。こつちからはおまえを攻撃しない」

「……なぜです？ おまえの考えは不可解です」

「ここでおまえを破壊したら、マグナスが黙っちゃいないだろう。この二人が現れたってことは、地上との連絡は断たれていない。マグナスが現れるのも可能ってことだ。本気のマグナスとやっけて勝てるかどうか、正直、自信がねえ」

自信がないどころか、完敗したばかりだ。一応の筋は通っているが——いかにも言い訳がましい。雷真の本心は別のところにあるんじゃないかな、と思う。

「だから俺は攻撃しない。おまえも俺たちの探索を止めてくれるな」

「行きたければ、私を破壊して行けばいい。たやすくはやらせませんが——」

「黙れ火垂！ 雷真殿が情けをかけてくださったのに！」

いろりは目尻を吊り上げて怒った。細い眉が切なげにゆがんでいる。

その横顔を見て、小紫は首をひねった。あの表情には見覚えがある。

（あ……夜々姉さまにお小言を言ってるときと、同じ？）

猛り狂っているように見えたが、どうやら単純な憤激や憎悪ではない。今いろりを支配しているのは、何かもつともどかしい、複雑な感情だ。

それを言うなら、火垂の態度も変だ。どこか敵対しきれていないと言うか……。

ひょっとしたらこの二人、今日が初対面ではないのかも？

雷真も怪訝に思った様子で、確かめるように訊いた。

「いろり……は、戦わないことに賛成してくれるんだな？」

「えっ!? あ、いえっ、しかし、この者たちは夜々をあんな目に遭わせました。許すことなど到底できません！ ですから、その——つまり……？」

自分の矛盾に気付き、口ごもる。いろりは咳払いして平静を取り繕い、

「雷真殿がお決めたことなら、妻の私とやかく言うことではありません」

「妻じゃねえ！ でもありがとう！」

それからいろりは火垂をにらみ、まるでするような口ぶりで言った。

「……おまえもそれでよいな、火垂？」

火垂がしぶしぶ、こぶしを下ろす。雷真は安堵した様子で、早速、歩き始めた。

「火垂は後で地上まで送る。だから、今は俺の言う通りにしてくれ」

「厚顔無恥な男ですね。色狂いとは聞いていましたが、そんな破廉恥を要求を」

「どんなの想像したよ！ 色狂いも破廉恥も、場違いな単語だからな！」

「らら雷真殿!? こ、こ、このようところで夫婦の営みを——」

「そのネタはもういい！ どっちも空気読め！ とにかく急ごう。学院がここに何を隠していやがるのか、今日こそ暴かせてもらおう！」

駆け足になる。小紫も小走りに駆け、雷真の横に並んだ。その後ろを、いろりと火垂が牽制し合いながらついてくる。

通路はやがてゆるやかにくだり、長いスロープになった。

少しづつカーブしている。弧の内側、壁の向こうは空洞になっているようだ。

幸い、明かりには不自由しなかった。壁に魔具のランプが備えつけてあり、雷真の魔力に反応して、勝手に点灯する。足もとに不安はないが……。

先に進むほど息苦しくなってくる。霊気、とも言えはいいのか。大量の人間がすぐ側にひしめているような、気味の悪い感覚だった。

雷真が小紫の変化に気付き、そっと肩を寄せてくる。

「どうした？ 怖いのか？」

「うん……外の〈目玉のおぼけ〉と同じ感じ。何て言うのかな……自動人形に似てるの。」

だけど、ほんの少し異質で……それがすごく怖いのだ。

以前、硝子が言っていた。人間に似せて造った人形は、ある水準を越えないと、ひどく不気味に思われ、人間に嫌われるのだと。感覚的にはその現象に近い。

「私たちとそっくりなのに、ギリギリ人形じゃない……感じなの」

何か思い当たることもあるのか、雷真の横顔に緊張感が漂う。

その雷真に「びとつ」と体をくっつけ、小紫は甘えた声で話しかけた。

「ねー、雷真。私たち、一緒に旅行したよね？ 夏休みに」

「ああ、したな」

「雷真、あのときとは別人みたい。さっきも、私の八重霞を見抜いちやうし」

雷真はふつと口元をゆるめ、気負った様子もなく、ごく自然体で言った。

「少しは強くならないと、申し訳が立たないだろ」

「――私たち雪月花に？」

「おまえたちを貸してくれた傭子さんに」

「だと思ったー」

「もちろん、おまえたちにもな」

優しく笑いかけてくれる。こんな気遣いこそが一番の変化だと、小紫は思った。

「ねえ……あのライコネンって人、イブシロンちゃんの仇……だよな？」

一度は乗り越えたはずの気持ちだが、再び鎌首をもたげている。

胸がざわつき、火傷のあとのようにうずく。イブシロンは復讐なんて望まない。彼女が

望むのはたぶん、グリゼルダの幸福だけだ。それはわかっているけど……。

雷真は何も言わず、ただいたわるように、小紫の肩を抱き寄せた。

やがてスロープは途切れ、金属の扉が現れた。

予想に反して、扉は至ってシンブルだ。複雑怪奇な魔術式だとか、暗号じみた魔術名だ

とか、そんなものも描かれていない。

ただひと言「ギユネス」と書かれたプレートが、中央に貼りつけられている。

それが部屋の名を示すのか、装置の名を示すのかもわからない。雷真が取っ手に触れた

だけで、魔力に反応してロックが外れ、簡単に開いた。

「機密を保持する場所……にしちゃ、やけに防犯意識が低いな？」

思い返せば、ここに至るまで、トラップがひとつも発動していない。

存在しないとは考えにくい。思うに、解除されているのだ。誰かの手で――

扉の向こうに、むせ返るような靈気が充滿している。激しい不快感。吐き気を催すほどだ。いろりと火垂も感じていられしく、青い顔でおし黙っている。

雷真の上着をつかんでしまいがら、小紫はそつと扉をくぐった。

聖堂の最深部は、巨大な円筒状の空間だった。

全面が青白い燐光を帯びている。一行がいるのは飛び込み台のような足場の上だ。周囲には正体不明の機巧装置がびっしり並んでいる。

円筒の深さは二十メートルほど、上はその倍もあるだろう。カンテラがいらぬほどに明るい、部分的に光が弱く、真正面の壁は真っ暗だった。

光が弱い――いや、そうじゃない！

何か、途方もなく大きな物が視界をさえぎっている――

小紫の優れた感覚器が、その異形をとらえる。

それが何かを理解する前に、巨大な影が蠢動し、無数の眼がまばたきした。



Chapter 4 囚われし者



1

（まったく、とんだ貧乏くじだよ。自分でまいたタネだけどね……）

アリスは苦笑して、ブラウスの袖で口元の血をぬぐった。

オルガをかくまうと決めた時点で、この日がくるのはわかっていた。

誤算があったとすれば、金薔薇じきじきのお出まじだったということ。

魔女の膨大な魔力が療氣に変換され、またたく間に室内を満たす。

オルガが精霊を盾にしての防御を試み——しかし突破され、療氣にまかれた。

激しくむせ、血を吐いて倒れる。抱き起こそうとしたヴェイロンも、オルガの吐いた血に触れ、たちまち汚染された。見る間に肌が腐っていく！

（あれを吸ったのか……肺が腐る！）

だが、他人の心配をしている場合ではない。療氣はアリスをものみ込もうとする。

「婦守磨つ——きたりま征！」

ずどとどんつ、と音を立てて、壁妖怪が屹立した。四方を囲み、結界となる。

「黙れ火垂！」

雷真殿が情けをかけてくださったのに！」

「近う寄れ、子どもたち。
この婆が、まとめて
遊んでやるわえ！」



途方もない支配力だ。魔術が阻害される環境下で、一度に四体も召喚するとは。

式神が瘴気を吸い上げ、空気を浄化する。魔女はにやりと口角を上げた。

「ほう、瘴気の魔物かえ。同じ瘴気なら——こういうこともできような？」

魔女が手をかざす。それだけで瘴気が吸い取られ、式神が見る見る小さくなった。日輪があわてて魔力を高める。瘴気の支配権を争う、力比べの様相だ。

「ラストーセイバー！」

式神の切れ目から、シグムントが光を吐く。撃てただけでも大したものだ。シャルの腕前が上がったと言うより、シグムントの性能が格段に上がっているらしい。

魔女は瘴気を操って、吸収ついでに防御する。恐るべき魔力と技術——なるほど、この魔女に比べれば、学生レベルの魔術など「見戯」に等しいというわけか。

日輪が片手で刀印を結び、オルガとヴェイロンに斬りつけるような仕草をした。

「藏いたまえ！ 清めたまえ！」

清浄な結界が生じ、二人を包み込む。それで、腐毒の侵食が止まった。

（彼女の魔力は底なしかい？ この状況で、治療魔術まで用いるなんて……）
驚嘆すべき才能だが、快復させるところまではいっていない。オルガも、ヴェイロンも、既に瀕死と言っている。

アリスはきつく唇を噛み、自慢の頭脳を回転させた。

魔女は本物の実力者。それに輪をかけて、あの獅子が危険だ。

ただの転移魔術ではない。時間を切り取ったように、まさに刹那に移動する。

その現象を説明できる大魔術に、アリスは心当たりがあった。

だが、確証がない。本当にあの魔術なら、たった一人で、ああも連発できるものか？

（秘密を暴くには手が足りない。この大事なときに、あの馬鹿野郎はどこをほつき歩いて——いやいや、いつの間にか、ライシンを頼る癖がついてるな……）

「ふふっ、頑張るのう。レメゲトンを持つてくるんじやったかの？」

魔女のひとり言を聞いて、アリスの背筋に悪寒が走った。

レメゲトン——それはラザフォードが所有する究極の魔本。

持つてくる？ 手にしたと言うのか？ ラザフォードから奪って？

（パパが……やられた？）

半機巧のアリスの体を、これまで感じたことがないくらい、冷たい血が流れた。

動揺は一瞬だ。アリスは急いで思考をまとめ、取るべき手段を模索する。

「シン。まだやれそうかい？」

「……お嬢さまのご命令とあらば、たやすいことです」

「嘘をつきなよ。死臭が漂ってくるじゃないか」

「この程度の毒……日頃、お嬢様の腐りきった言動で耐性ができております」

「OK、全部片付いたらヘドロを注射してやるからね。——プリンセス、君は療気を使うみたいだから訊くけど、その腐毒は除去できそう？」

「……洋の東西を問わず、呪には褌と褌が有効……ではないかと思ひます。事実、病魔の進行を遅らせることが……できています」

「なら、その二人は君に頼む。僕の身内が医学部にいるはずだ。彼らと合流後、さらに学院外の隠れ家に飛んでもらいたい。できるかい？」

「できる……と思ひますが……逃げるのですか？」

「敵は一向に退く気配を見せない。この状況は『多勢に無勢』ではなく『二網打尽』——東洋のことわざだよ」

複数人での転移は相当きついはずだが、日輪は強気な笑顔で請け合つた。

「医学部でしたら、好都合です……わたくしの供が入院しておりますゆえ」
昂と六連か。重傷の怪我人なのに、手伝わされるらしい。

「ですが、〈褌〉には時間がかかります……今離脱すれば、わたくしはもう……」
つらそうに顔を歪める。日輪が何を苦しんでいるのか、アリスにも理解できた。

——雷真の役に立てない。彼は必ず、戦いの渦中に飛び込んでくる。そのとき、戦場にいられないのでは、彼を支えることも護ることもできない。

魔女に攻撃を続けながら、シャルは後ろ手で日輪の手を握り、つぶやいた。

「……ごめんなさい。私が巻き込んだせいよね」

「違います！ 日輪は、日輪は……本当は、わたくしの方が謝らなければ……っ」

「でも今はアリスの言う通りにして。その子、性格は最悪だけど、私の三倍賢いの」

綺麗な笑顔を向けて言う。それは日輪の胸を揺さぶったようだが、それ以上に、アリスの胸を揺さぶる言葉だった。

「……本当に頭の悪い女だね。僕と心中するつもりかい？」

「そんなのごめんだわ。私は絶対、生き残るつもりよ」

「そう願いたいね。僕は戦力を浪費するのが嫌いなんだ」

「——意外だわ。貴女がそんなこと言うなんて」

「どこかの馬鹿野郎に、悪影響を受けたかな？」

直感に優れる日輪が、びくつと大きくのけぞった。

「ま、まさか、その方というのは……!?」

アリスとシャルは笑みをかわし、決死の覚悟で魔女に向き直った。

「さあ、プリンセス。バカな恋人たちを病院へ。つける薬はないけどね」

「——わかりました。シャルロットさま、どうかご無事で！」

「貴女も！」

婦守磨の瘴気が抜かれ、小さくなっていく。そちらに回す魔力をカットし、次なる式神

——閻土里の召喚に回しているのだ。

魔女の薄笑いをにらみつつ、アリスはささやいた。

「シャルロット、ちよつと耳を貸して」

そつと、作戦の概要を耳打ちする。シャルは眼を大きく見開いた。

「——本気？ そんな危ない賭けを？」

「勝つためさ。——ブリンセス！」

日輪に合図を送る。日輪は印を結び、闘土里を召喚した。

床に黒い影が広がり、一時的に浄化の結界が破れる。影はオルガとヴェイロン、そして日輪を異空間に引き込もうとした。

「させぬわえ！」

どつと瘴気が吸い上げられる。やはり、魔女は妨害してきた。

だが、日輪は折れなかった。視界が黒く淀むほど、莫大な妖気を噴き上げる。魔力総量には自信のあったアリスだが、これほどの容量、出力は持ち合わせていない。

「シャルロット！」

「ラスターカノン！」

滅元素の大砲——せいぜいピストル——が飛ぶ。魔女は瘴気で防ごうとしたが、シャルが狙ったのは魔女でも獅子でもなく、アリスが投げた、赤い魔石だった。

真つ赤にきらめくガーネット。ラスターカノンが魔石を砕いた途端、石の内部に蓄えられていた、膨大な魔力が解放された。

あふれた魔力で術式が起動し、天井に魔法陣が浮かび上がる。

ここは要人のための住居——あらかじめ、結界のタネを仕込んであったのだ。

結界の起動に反応し、部屋の四隅から赤い肌のデーモンが這い出してきた。

「シャルロット！ 窓から飛び降りて！」

「飛び降りっ？ ここ三階よ！」

「シグムントがいるだろう。ほら！」

アリスはシンに、シャルはシグムントにつかまって、破れた窓からダイブする。

デーモンの風貌から結界の質を把握して、魔女の顔色が変わった。

「これは、煉獄の悪魔——」

四頭のデーモンが雄叫びをあげ、直後、大爆発が起こった。

結界の中で凄まじい火力が暴れている。内部は完全に焼き尽くされただろう。

爆風はないが、魔力の波動が飛んでくる。あおられたシンがアリスを取り落とした。

高度は十分に下がっていたが、アリスは腰を打ち、裂かれた傷から出血した。

尻をさするアリスの前に、魔女の影が立つ。どこからか黒コートの魔術師が集まってき

て、一瞬でアリスを包囲した。……まあ、予想通りの展開だ。

「ようやってくれたのう、アリス。おかげでオルガを取り逃がしたわえ」

にたり、と不気味なほど優しく笑って、魔女はアリスの顔に爪を這わせた。

「おまえは虜囚じゃ。覚悟はできておろうな？」

「……せいぜい、丁重にもてなして欲しいね」

「よからう。丁重にな」

全力で逃げて行くシン、飛び去るシャルを眺め、アリスは失望のため息をつく。

ただし――腹の底では、失望などまったくしてはいなかった。

2

遠ざかるライコネンの背中を、グリゼルダは涙をこらえて見送った。

「……何が迷宮の魔王だ。私はこんなにも……無力じゃないか」

悔しい。手が出せない。出したが最後、英国への叛逆となる。そうなれば、キンバリーの顔をつぶす。故郷や弟子にまで、累が及ぶかもしれない。

「すまん、イブシロン……」

屈辱に震えるグリゼルダを、二体の機巧天使が気の毒そうに見つめる。

ふと、何者かの接近を感じして、その二体が同時に振り向いた。

「――そこにいるのはウェストン教授だな？ 何を突っ立っている？」

嫌みたっぷりの声が飛んでくる。見れば、一人の女が近付いてくるところだった。

（こいつは……英国から派遣されたという、学院長の秘書官か）

アヴリルとかいう女だ。顔つきがどことなくキンバリーに似ているが、キンバリーよりかなり若い。魔王二人が戦調を始めたので、様子を見にきたらしい。

お互いに嫌悪を隠さず、にらみ合う。両者とも男勝りの武闘派で、片やサーベル、片や蜜剣の達人だ。年齢も近く、タイプが似ているだけに、互いの存在が面白くない。

あちらも虫の居所が悪いのか、アヴリルはいら立ちをにじませて言った。

「いい気なもんだな。学生を護るべき教授が、そんなチャラついた服を着て。学院長が賊に囚われ、学院創設以来最大の危機に見舞われてるってのに——」

「ラザフォードが!? それは本当か!?」

敵意など吹っ飛んでしまう。グリゼルダはアヴリルに詰め寄った。

アヴリルはうるさそうにグリゼルダを押し返し、

「嘘をついてどうする。ジジイは連行された。学院長だけじゃない。パーシヴァル教授を

筆頭に、主だった教授は全員が拘禁されている。——見ろ！」

大講堂を示す。多くの校舎が崩れているのに、不思議とそこだけ健在だ。

「魔術師は霊視とやらができるんだろう? じっくり視てみればいいさ！」

言われるまま、魔力を駆使して透視する。

賊の手で魔術合金のバリケードが作られていて、鮮明な画像は得られない。だが、教授

クラスの魔術師は魔力が濃く、かろうじて姿が判別できた。

大講堂の座席、あるいは机上に、大勢の魔術師が座り込んでいる。

「警備主事に、学部長……パーシヴァルやサンジェルマンまでいるじゃないか！」

顔ぶれは無駄に豪華だ。警備隊の隊長たちもいる。そして極めつけは——

「ラザフォード……あいつもか！」

魔術師たちは全員が後ろ手に縛られている。拘束具は二重三重で、魔力絶縁も徹底して

いた。そうそうたるメンツが軒並み捕虜——正直言つて、あり得ない光景だ。

「これは何の冗談だ？　あの怪物連中をそろって生け捕りなど、誰にできる！」

「監査官に決まっているだろう。査問中に襲撃を受けたんだよ！」

側頭部をぶん殴られたような気がした。

信じられないことだ。だが、一方で、ひどく腑に落ちる。

魔術師を査問する場合、不正防止の観点から、魔封じを施すのは当然だ。

その隙を突かれたのなら、ラザフォードでも敗北はあり得る。

事ここに至って、グリゼルダは真の危機がどこにあるのかを知った。

学院が襲撃されたことが〈危機〉なのではない。

この一件が、ライコネンによって解決されることこそ、まずいのだ。

（ライコネンが賊を撃滅すれば、奴は英雄だ。誰も人事に口出しできん！）

学院が救われてしまうと、救われない結果が待っている。

「賊の奮闘に期待するしかないな……」

急ぎ、何とかしなければ。私とバカ弟子、そしてキンバリー女史の手で。

そのためには——

「アヴリル女史。取引をしよう」

「はあ、取引？　突然、何を言い出したんだ？」

「物々交換だ。貴女の服をこちらに寄越せ。代わりにこのドレスをやる」




Raw manga
manga-zone.org

「何だって!? 断る! そもそも教授、おまえと私ではサイズが合わない!」

「黙れ! デイガンマ、ステイグマ、そいつを脱がせ!」

「かしこまりました!」^①命令に従います」

「こらっ! 嫌だって! いやっ……やめろおおおおお!」

問答無用。魔力の糸を彼女の首筋に流し込み、自由を奪って服をはぎ取る。無抵抗の女、しかも強気な女を脱がせるというのは、変な悦び^{うれしみ}に目覚めてしまいそうな行為だったが、グリゼルダはどうにか正気をキープした。

半裸で座り込むアヴリルに、自分のドレスを放り投げる。

「うう……もう嫁の貰い手^{もらい}がない……っ」

「もともとなかったのだ。一方、私には言い寄る男が腐るほどいるがな!」

変なところで見得^{みよ}を張りつつ、アヴリルのスーツを着込む。胸回りがきつい、シャツのボタンが留^{とど}まらないほどではない。久々に男装——厳密には女物だが——に身を包むと、気持ち引き締まるような気がした。

（私はどうかしていたな。あんな衣装でまともな殺し合いができるものか）

まともな定義がおかしいが、グリゼルダは疑問を持たない。

ベルトを締め、上着を引っかけたとき、キンバリーが枝を蹴って飛んできた。

「元氣そうだな、ゼルダ。黒コゲにはなっていないようだが、その格好は——いや、それより今後の話だ。よくないニュースがある」

contents

- Prologue** 妻をめとらば、才たけてp13
- Chapter 1** 姉妹が見る夢p23
- Chapter 2** 胎動p63
- Chapter 3** 遭遇か、再会かp96
- Chapter 4** 囚われし者p133
- Chapter 5** 人間の定義p167
- Chapter 6** そして役者が舞台に上がるp199
- Chapter 7** 夜天に開く^{こんじき}金色の花p243
- Epilogue** 見目麗しく、情けありp279



「こちらも悪いニュースだ。ラザフォードが敵の手に落ちたそうだ」

「——」

キンバリーがこうまではっきり顔色を失くす場面は、初めて見る気がした。グリゼルダはむしろ痛快な気分で、「そちらのニュースは？」と催促した。

「敵の親玉がわかった。結社の（金薔薇）アストリッド・セトだ」

「セトの魔女!? 結社の大幹部が、自ら姿を見せたと言うのか……!?」

今度はグリゼルダが顔色を失くす番だった。

結社の議決権を持つ現職（薔薇）たちの中で、本名が知れているのは彼女と（黒薔薇）くらいのものだ。最有力の幹部と言っている。

金薔薇は享楽主義の目立ちたがりで、各地の紛争でたびたび目撃されている。

彼女自ら動いたとなれば、この学院襲撃は単なる示威行動や、裏切り者の処刑が目的ではない。本気で学院を陥落させるつもりだ。

ライコネンが解決してもまずいが、解決できなくてもまずいことになった……。

キンバリーはむしろさばさばとした表情で言った。

「どうやら正念場らしい。夜会と学院がこの先も変わらずにあり続けられるかどうかの無責任な知識人としては傍観を決め込みたいところだが……君はどうするね?」

「決まっている。侵略者は鉄血をもって饗応すべし——祖父の教えだ」

笑って答える。キンバリーの口元にも笑みが浮かんだ。

「女史よ、バカ弟子の居場所を知らないか？」

「マグナスと一戦やらかしてな。夜々を半壊に追い込まれ、本人は行方不明だ」

「な——バカ弟子め！ 肝心なときに何をやっている！」

「そう言うな。毎度あいつを頼っているは、教授の立場がないだろう？」

「貴女と私の二人だけで、どこから手をつければいい？」

「まずは人質を奪還しよう。そうすれば、こちらの戦力は跳ね上がる」

「それは認められない」

——と冷たい声が響いたのが先か、かすかな気配が立ったのが先か。

グリゼルダとキンバリーの周囲に、黒マントの男たちが出現していた。

結社の魔術師ではなく、正真正銘、灰十字の戦士たちだ。

さすがは協会の実働部隊。バカ弟子の下手な天眼ではとらえきれない動きだろう。

「なっ、何だおまえら！ 見るなっ！ この変態ども！」

半裸のアヴリルが取り乱したが、誰も彼女には注目していなかった。

キンバリーはこめかみに汗を光らせ、上司らしき金色の瞳の男に訊いた。

「山鳩の同胞——『認められない』とは、どういう意味です？」

「魔術師協会はこの件に一切関与しない。これは教父の決定だ」

キンバリーが気色ばむ。彼女のそんな顔も、初めて見たような気がした。

「これは魔術界を揺るがす事件です。黙って見過ごせば、世界秩序が崩壊します」

「だろうな。実は先日、結社の薔薇がまた二人、肅清されたようだね」
キンバリーも、グリゼルダも、一瞬、言葉を失った。

「これで薔薇の空席は七つ。この半年で半減する勢いだ」

「謀殺……？ 誰が、そんな真似を——金薔薇か！」

うめくように言う。それから、キンバリーは勢い込んで言った。

「むしろ好機ではありませんか。ここで金薔薇を討てば、結社は勝手に自壊します」

「それが協会の分を踏み越えていると言うのだ。我らは歴史に介入しない」

「もはや歴史の問題ではないでしょう。見ているだけでは誰も救えない」

「綺麗事だな。私には君が私情で動いているように思える」

「……何のことです？」

男の金色の瞳に、理解を拒むような、冷然とした光が宿った。

「忘れたはずがないだろう。君の起源、トランスヴァールの間、プーアの飛び火を」

「……あれは一五年も前の話だ」

「だが、君は覚えている。そして魔女は、一五年前の姿のままだ」

キンバリーの顔から表情が消えた。底冷えのするような、冷たい憤怒の発露だ。

男はいささかも怯まず、淡々とした口調で告げる。

「この一件、英国が関与している可能性もある。今、同胞たちが確認しているところだ。

そちらの調べが終わるまで、一切の交戦は認められない」

「……傍観主義者め！ うんざりだ！」

キンバリーは唾棄して、彼らに背を向けた。

「勝手にするがいいさ。だが、私は教授だ。学院と学生を護る義務がある——」

ざんざんざんつ、と複数の刺突音が響き渡り、キンバリーの言葉をかき消した。

レイピアの刀身のような細長い金属が降りそそぎ、キンバリーの肉を裂く。金属は互いに交差して、あたかも檻のように、キンバリーの自由を奪った。

ただの金属ではない。存在するだけで魔力を吸い上げる、魔抗銀か何か。離れているのに魔力が奪われ、グリゼルダも体がだるくなってきた。

（魔封鉄棺だと……これはもう制限魔術に近い……そこまでするのか！）

「鴛の同胞よ。我らは決して『行動しない』と言っているのではない」

男は金属棒の一本を引き抜き――

「『行動するな』と言っているのだ」

思い切り振り下ろした。棒がキンバリーの足の甲を貫通し、石畳に突き刺さる。

さすがのキンバリーも苦悶の表情を浮かべた。グリゼルダに懸命な視線を寄越したが、彼女が何か言う前に、男が視線をさえぎり、威圧的に言った。

「迷宮の魔王よ。貴女が連れているその二体、しばしこちらで預ろう」

デイガンマとステイグマを示す。どちらも協会から借りているものだ。

ごく短い時間、グリゼルダは躊躇した。

この者たちを蹴散らして、キンバリーを救出するか？

できなくはない。こちらでも無事では済むまいが、キンバリーの助けがあれば可能だ。しかし、それをやれば、魔術師協会に敵対することになる。

自分だけならば、それもいい。だが、故郷に残してきた者たちが……。

「……自動人形を奪ったところで、魔王の行動を止められはせんぞ？」

「貴女が何をしようと、我らの関知するところではない」

「ふん……行け、ディガンマ、ステイグマ。しばし休暇をくれてやる」

二体の機械天使は立ちすくんだ。だが、どうすることもできない。

主の意を汲み、男の方へと歩き出す。二体とキンバリーが連行されるのを、グリゼルダは自嘲を浮かべて見送った。

連れ去られて初めて、自分が彼女たちをどれだけ頼みにしていたのかを知る。

彼女たちだけではない。学院のことも、いつしか頼みに思っていた。

ひと癖もふた癖もある、油断ならない教授陣――

彼らがいる限り、ここは絶対に安全だと、どこかで思い込んでいた。

グリゼルダの首筋をひどく冷たい風が撫でる。その後ろで、まだセミヌードのアヴリルが「くちゅんっ」と小さくしゃみをした。

シャルはシグムントを降下させ、林の奥に身を潜めた。

「さっきの結果、すごい火力だったわね。やったのかしら？」

「いや。あの程度で倒せれば、苦勞はない。もっと早くエドガーがやっている」

光を放ちながら、シグムントが仔竜の姿に戻る。シャルはあわてた。

「戻っちゃうの？ この先、もう質量が増やせないかも……」

「あの姿では魔力の維持消費が激しすぎる。今回は長丁場になりそうだから……この姿の方がまだしも戦えそうだ」

「仕方ないわね……アリスは大丈夫かしら？」

何気なく飛ばした視線が、それをとらえた。

十メートルと離れていない場所に、女性の上半身が転がっている。

ぶちまけられたはらわたを見て、胃液が逆流した。とっさに口を押さえて我慢する。

「ふむ、人間ではないな。自動人形だ」

シグムントの指摘通り、それは自動人形の死骸だった。

胸から下が切り離され、焦げた中身がのぞいている。融合爆裂を食らったようだ。心臓のあった場所には、がらんとする隙間がある。はらわたは焼けた有機パーツだ。

人形の顔は綺麗なままだ。着せられたドレスの仕立てもよく、髪の手入れも行き届いている。大事にされていたのは、誰に教えられずとも理解できた。

周辺を見渡せば、吹き飛んだ残骸が散乱している。一体、二体の話ではない。通りにも、林にも、庭園の跡地にも、無数の人形が倒れていた。

じんわり涙がにじむ。シャルにとって、自動人形は道具ではない。家族であり、友だ。取り戻すためなら、食費を切り詰めるのも苦ではなかった。

シグムントはシャルの帽子に飛び乗って、教師みたいな口ぶりで言った。

「シャルよ。この状況をどう見る？」

「え……？ ええと……」

「実戦においては正確な状況判断こそが肝要だ。君は敵の親玉と相対した。正確な情報を伝えられれば、仲間たちの役に立つ」

シャルは涙をぬぐい、急いであたりに目を配った。

「……敵はおかしな魔術を使っている。相手の人形を無力化する、あの魔術よ」

「イオネラ・エリアーデ教授の〈絶対王権〉——〈無限連鎖反応〉の応用か」

「そう思うわ。敵の数はざっと二百人……いえ、千人かしら」

「いや。二、三十人だろうな」

一瞬、聞き間違えたのかと思う。「二、三十小隊」かと。

だが、シグムントは表情も変えず、冷静に言葉が続けた。

「結社の部隊運用は五人で一隊が原則だ。近衛が随行している様子はなかったが、金満が
出張している以上、五隊か六隊は連れているだろう」

「そんな少ないはずないわ！ そんな数じゃ、教授にコテンパンにされるわよ！」

「君は連中を甘く見ている。灰十字の戦士と結社の魔術師は、源流が同じだ」

「――」

「それに、教授陣がまともに戦えたとは思えん。魔王ライコネンは何しにきた？」

学院を調べるためだ。当然、査問の前に、教授陣の魔術を封じたはず――

「教授が戦えない……!? じゃあ、あの魔女は、誰が倒せばいいのっ？」

敵は恐るべき魔女だ。一撃も加えられないまま「十三人」のオルガ、ヴェイロン、日輪が脱落。シンもアリスも手が出なかった。シャルもまた、ロツテを失っている。

教授が頼れない今、あんな怪物を倒せる者がいるとすれば――

真つ先に雷真の顔が浮かび、シャルはあわてて妄想をかき消した。

「バカねー 何であいつなのよ！ ほかにもっといるじゃない！」

「いや、妥当だ。雷真ならば、何か奇策を思いつくかも――」

「やめて！ 私の心を読まないで！」

「いや、バカ弟子は戦力にならん」

がさりつ、と針葉樹の葉を揺らし、グリゼルダが下りてきた。

枝葉にまぎれて移動中だったようだ。夜々を『お姫さま抱っこ』している。

「夜々ー どうしたの!? ライシンは!?」

「夜々は大丈夫です。でも……」

夜々がグリゼルダを見上げる。視線を受け、グリゼルダが代わりに応えた。

「バカ弟子は行方不明だそうさ。この夜々も修復中だな、戦える状態ではないと判断した。……ここでおまえに会えたのは僥倖だった。戦力となる者を探している」

「戦力なら、英国が誇る英雄、焼却の魔王ライコネンさまがいらつしやるわ！」

シャルが情熱的に訴えると、グリゼルダはひどく冷めた目をした。

「さま？ おまえはあの男のファンなのか？」

「なっ、そっ……そんなことない……です」

「シャルは幼児期から、氏の写真記事を欠かさずスクラップしていたのだ」

「余計なこと言わないでー お昼のチキンをニボシにするわよ！」

「ならば、酷な話だ。ライコネンは結社のメンバーだ」

シャルは口を覆った。結社はブリュー家の宿敵。一家を離散させ、アンリの生命を脅かし、シャルを脅迫した連中だ。先日は日輪も被害に遭っている。

同じ英国出身の大先輩として、密かにライコネンを尊敬していたのに……。

グリゼルダは口調をやわらげ、慰めるように言った。

「王室の命で学院を訪れている以上、金薔薇に同調まではすまい。現に、結社の魔術師を斬り捨てていた。英国が学院乗っ取りを画策し、結社がそれに異を唱えたのなら、現状ではこちらの味方とも考えられる。だが……」

グリゼルダにはもう敵の狙いが見えているようだ。いつになく歯切れが悪い。

「それじゃ、キンバリー先生は？ キンバリー先生なら！」

「そちらも駄目だ。ついさっき、協会の連中が連れて行った」

シャルは絶句した。シグムントが首をひねり、代わりにたずねる。

「これは魔術世界の秩序を危うくする事件だ。協会の協力は得られないのか？」

「女史もそう言って突っかったんだが……。どうも、そう簡単な話でもないらしい。何か大きな意志が働いているようだ。列強の思惑を左右するような……。何が」

「じゃあ、どうすればいいのよ……。ほかに誰か、戦力はないの!?」

「一人だけ心当たりがある。私自身さ」

どこか投げやりに答える。だが、グリゼルダもいつもの機械天使を連れていない。あの二体は結社の装備、没収されたのは容易に推察できた。

「こんな状況……。どうすればいいの……。!?」

グリゼルダは皮肉げに笑って、面白くもなさそうに言った。

「どうしようもない。手詰まりだ」

ずし、と重たい不安が胃の底に落ちる。夜々もまた、グリゼルダの腕で縮こまった。

シャルは傾きかけた太陽を見上げ、アンリのことを思った。

血をわけた妹は——無事でいるのだろうか？

マシンドール
機巧少女は傷つかない10
Facing "Target Gold"

海冬レイジ

MF文庫 

学院の正門、城門のごとき《ゲート》近くに、警備隊の詰め所がある。

詰め所と言っても、実態は《砦》だ。堅牢なレンガ造りで、銃眼も備えている。外敵にゲートを突破されても、ここで足止めできるようになっている。

その地下、弾薬と食料の貯蔵庫に、学生たちが立てこもっていた。

幸い、学院の敷地は広大で、敵の目はここまで届いていない。

ロキは倉庫の中を見回し、戦力を見積もった。

（ざっと八十——百人近くいるか。自動人形もかなりある。作戦次第では……）

いや、駄目だ。《絶対王權》には歯が立たない。

誰もがそれを理解している。初夏の一件で、自動人形を奪われたままの者もいるのだ。

だから、息を潜めて動かない。そのくせ門外に逃げないのは、学院生の矜持か。

フロアの端に、抜き身の真剣のような、剣呑な気配をまとう少女を見つけた。

（あいつは……知っている顔だな。アスラの同志とやらか）

黒絹の刀を抱えている。目深にしたフードから、ロキと同じ真珠色の髪がのぞいていた。

夜会の舞台で見た顔だが、名前が思い出せない。

ちらりととなり目にやると、姉がガルド犬にブラシをかけていた。順番待ちの犬が列をなし、抜け毛を詰めた紙袋は、既に二つになっている。

姉は気もそぞろで、手が止まりがちだ。やがてフレイはブラシを片付け、立ち上がった。どこかへ行こうとする手をつかみ、ロキは鋭く「だめだ」と言った。

「もう嫌というほど味わっただろう。外は〈絶対王権〉の影響下だ」

あの驚型自動人形が、こちらの魔術を妨害し、果ては支配権すら奪う。崩れ落ちる図書館から脱出する際、姉弟は死ぬような目を見ているのだ。

「ガルの魔術は機能しない。ケルビムは歩かせるのもひと苦勞——実戦稼働は不可能だ。オレたちが出て行けば、最悪、あいつらの足手まといになる」

フレイはしょんぼりとうつぶした。眉尻を下げ、見る見る涙をにじませる。

「でも、ライシンたちが……みんなが戦ってるのに……っ」

ロキは奥歯を噛んだ。そうだ。あいつらはきつと戦いの渦中にいる。

「……それでも、だめだ。体はどうだ？ 何度かコケただろう？」

「う、少し、痛い……。でも、私よりアンリの方が——」

「へ……平気です……。このくらい……っ」

動かないケルビムの横で、アンリが床に横たわっている。

顔面蒼白。骨折した右脛が腫れ上がり、見るからに痛々しい。

図書館の壁を破られた際、瓦礫に当たって折ったのだ。

既に添え木はしてある。引っ張って骨を整えたのはロキだ。かなり痛かったはずだが、アンリは泣き言を言わなかった。元は伯爵家のご令嬢ながら、相当に我慢強い。

ロキは歯噛みした。自分の不注意が許せない。オレがついていながら……。
 どす黒い感情が胸中に閃く。

学院に愛着などないつもりだった。養父に放り込まれた、監獄みたいな場所だと思っていた。だが、図書館を廃墟にされ、校舎裏の林を焼かれ、食堂や、校舎や、庭園が、模型細工のように破壊されるのを見たとき――怒りを感じた。

あの魔女に目にも物を見せたい。思い知らせてやりたい。

(せめて、あのときの金属環があれば……！)

いつでもイオネラが用意した魔具。あれを使えば、絶対王権を無効化できる。

しかし、それは学院に没収された。研究室にデータが残っていたかも知れないが、敵はご丁寧に工学部校舎を破壊した。イオネラの研究室も瓦礫の山だ。

ロキは姉の腕を引き、アンのとなりに座らせた。

「……オレたちにできることはない。あんたの犬が一匹でも欠けたら、あの無鉄砲バカはまた無茶をするぞ。わかったら、大人しく座ってろ」

「あら、思ったより骨がありませんのね。噂の〈剣帝〉もその程度ですの？」

中世の貴婦人めいた変形制服が視界に入る。三体の機械人形を従え、扇で口元を隠した女子学生が、必要以上に胸を反らして、ロキを見下ろしていた。

ロシアからの留学生、〈女帝〉ことソーネチカだ。

挑発的な視線を向けている。露骨すぎて腹も立たず、ロキは静かに応えた。

「オレは過去に一度、絶対王権とやり合っている。その経験を踏まえて忠告してやるが、あんたの人形は戦力にならない。勝算はゼロだ」

ソーネチカの自動人形はどう見ても機械仕掛け。禁忌の生体パーツを内蔵している気配もない。しかも、彼女は同時に三体を操っているのだ。支配力は分散している。

「勝ち目がない——だから、貴方は座して見ているだけですの？」
凛とした言葉。それは鋭利な刀剣のように、ロキの心に突き刺さった。

勝ち目がない。危険がある。そんな理由で戦わないのか？

「(多重なる騒音)の方が立派ですよ。女帝の名を賭けて勝負したくなるほどに」
獲物を見ような視線にさらされ、フレイは震え上がった。ささっとロキの後ろに隠れてしまう。成長したと思ったが、不意を突かれると気が弱い。

「確かに、ただ座っているのは癪に障る」

「では——？」

「だが、勝算のない戦いはしない。オレは魔王を目指している」

姉の安全が第一だ。姉の健康を取り戻すために、ずっと戦ってきたのだ。

議論は平行線。ソーネチカとロキがにらみ合っていると、

「機巧都市の善良なる市民、勤勉なる警官、ならびに前途ある学生諸君に告ぐ」
耳障りな音声、天井の伝声器から飛び出してきた。

ひずんではいるが——あの魔女の声だ！

そして、ジョークにしては悪趣味すぎる、ふざけた放送が始まった。

5

アリスの身柄を抑えると、魔女は倒壊した公邸を見上げた。

(面白いの……。さっきのあれが極東の神秘、イザナギとやらの魔術かえ?)

絶対王権は(イブの心臓)を書き換える魔術だが、精霊や式神にも影響が出る。その影響をものともせず、複数人で長距離転移を行うとは。

(そして煉獄結界……どちらも学生の技ではないの)

アリスが構築した結界は、中東発祥の殲滅魔術だ。成立後は脱出不能、数千度の火力を閉じ込める大技だが、発生までにモタつきがあった。あれでは魔女に当たらない。

黒コートの部下たちが周辺を索敵し、脅威がないことを確認した。

「ご無事で何よりです、アストリッドさま。この娘は？」

「大事な捕虜じゃ。後で使う。拘束しておけ」

「御意に。お探しのオルガさま——脱会者二名は、もう？」

「逃がしたわえ」

「左様で——アストリッドさまの手から逃れましたので？」

思わず、といった調子で確かめる。どの顔にも驚きが満ちていた。

魔女アストリッドはくすりと可憐に笑った。

「なかなかどうして、一筋縄ではいかんの。腐ってもヴァルブルギスの学び舎というわけじゃな。そっちはどうなっておる？」

「制圧を完了しました。レメゲトン、こちらに」

部下の一人が進み出て、うやうやしく強化ガラスの箱を差し出す。

その中に、分厚い魔導書が収められていた。

「おお、レメゲトン……麗しき終末の書、我が現し身イシュタルの住処よ」

「すぐお使いになりますか？」

「まさか。どんな罠が仕掛けてあるか……のう、アリス？」

アリスは答えない。アストリッドは苦笑して、荒れ果てた学院を眺めた。

「もろいのう。学院の警備には卒業生も多いと聞くが、こんなものかえ？」

「卒業生が多いのでしたら、さほど実戦を知らぬでしょう」

その返答には、自分たちは違う、という自負がのぞいていた。

「まずは重畳、ようやくた。市警と軍の動きはどうじゃの？」

「包囲を進めています。ですが、ローレライを恐れ、入ってきません」

「そちらもよし。では、声明を出そう。まずは小僧に挨拶せねばの！」

上機嫌で歩き出す。その後ろに獅子と魔術師たち、十数頭の黒豹が続いた。

悠然とメインストリートを進み、大講堂へ。講堂の正面玄関は堅固な魔術合金で封鎖さ

れ、完全に人の出入りを遮断していた。魔術によるバリケードだ。

正面玄関でアリスの身柄を部下に預け、自らは裏口から中に入る。

講堂の中には、軽く百人を越す人質が囚われていた。

「警備隊は何をやっているー」「これもラザフォードの責任だぞー」

周囲に白眼視されながら、紳士たちが見張りの魔術師に唾を飛ばしていた。

「騒がしいの。あれは何じゃ？」

「学院長更迭を求める市民グループ——だそうです。その広場に集まっておりましたので、とりあえず捕まえておきました」

「何と都合のいい……小僧の仕込みではあるまいな？」

勘のいいラザフォードのこと。市民に見せかけた工作員、という可能性もある。

「では、解放しますか？ それとも、消しますか？」

「待て待て。ラザフォードの仕込みなら、罠を仕込んでおる……やもしれぬ」

「罠——ですか？ 攻撃されると発動する、条件つき遅発魔術とか……？」

「うむ。自爆程度なら可愛いものじゃが、致死性の呪いや、永続性魔封じをかけられでもしたら、わしでも洒落にならぬわえ。それに……」

嬉しそうに笑って、人数を数える。

「あんな連中でも療氣の材料になる。生かしたまま連れ帰れ」

「仰せの通りにいたします」

「ラザフォードはどこじゃ？」

「そちらに」

大講堂の教壇、室内でもっとも低い場所に、魔術師二隊十名に囲まれて、教授と警備が拘束されていた。魔力絶縁コード、魔力を封じる鉄鎖に手錠、足かせ、護符などで、徹底的に魔力を遮断された状態だ。

その最前列に、乱れた髪の偉丈夫——学院長が窮屈そうに座っている。

ラザフォードは皮肉げに口ひげを持ち上げ、かれた笑い声を漏らした。

「お変わりありませんな、アストリッドさま。一五年前と変わらぬ美しさだ」

「うむ、苦しゅうない。もっと誉めよ、称えよ、そして崇めよ」

両手を広げて美貌を誇示する。だが、ラザフォードはそれきり口をつぐんだ。

アストリッドは苦笑いを浮かべ、ラザフォードの膝をヒールで踏みつけた。

「相変わらず不愉快な小僧よ。じゃが、許そう。三十年前はよくも魔本を盗んでくれたな。じゃが、許そう。一五年前は暗黒大陸で邪魔をした。それも許そう。今日のわしは珍しく寛大な気分よ。一九世紀最強と謳われたぬしが、かくも無様に因われ、レメゲトンまで奪われておるとはの」

「まったく嘆かわしいことですな。この大事に新学院長殿は何をしていらっしやるのか。学院始まって以来の一大事であらうに」

「小僧はよう働いたよ。ぬしをこうして縛っておいてくれたじゃろうが」

ラザフォードの眼の奥に、ほんの一瞬、かすかな動揺が走った。

（痛快じゃー！ この男がこんな顔をしよるとは！）

調査であれば拒めただろうが、監査は帝国からの（命令）だ。ラザフォードであっても拒むことはできない。ライコネンを受け入れざるを得なかった。

ただし、たとえライコネンが結社の手の者であろうと、王権が磐石である限り、無茶な行動はできない。それゆえ、一時的な武装解除にも応じたのだろうか――

正しいはずの判断が裏目に出た。ということはつまり、前提が崩れている。

「……にわかには信じられませんか。王室が結社の手に落ちたとでも？」

「結社ではない。我が手駒、狂王子の手に落ちたのよ」

「――！」

「さしものぬしでも見通せなんだか。安全な学院に引きこもり、半人前どもを眺めておれば、錆びるのもやむなし。ましてやあの王子、とんだうつけに思えたものな？」

自嘲交じりに嘲笑う。

「わしも他人のことは言えん。たわけの皇子が、これほど短い時間で帝国を掌握するなど、夢にも思うておらなんだ。目をかけてやった甲斐があるというもの」

「……あの狂犬、いずれ貴女の首をも食いちぎりましようぞ」

「ふふっ！ わしの首を獲るほどの男に、いつか廻り逢うてみたいものよ」

屈託なく笑う。見た目は天使の微笑みだが、中身は魔性の大天魔だ。

「……我らをどうされるのです？ 生かしておけば、後顧の憂いとなりますぞ？」

「愚問よ。ぬしらは値千金の魔術師ども。生きたまま解体すれば、向こう十年、禁忌人形の部品調達に困らぬじやろう。そろって教会に連れ帰るわえ」

「……せいぜい、寝首をかかれぬことだ」

「威勢がよいの。じゃが、これを見ても、そんな口がきけるかの？」

華奢な指を立て、合図を送る。部下もわきまえたもので、ただちにガラスの箱を持ってきた。その内側、紅いクツションの上に、黄金の球体が輝いている。

「学院のお偉い先生たちじゃ。これが何か、わからぬはずはあるまいな？」

完全な球ではなく、下がすぼまり、上には導火線のようなものが伸びている。特徴的なシルエット。何に似ているかと言えは――

「（金の林檎）――融合爆裂の究極形ですな」

ラザフォードの言葉を聞いて、教授陣に動揺が広がった。知識として知ってはいても、実物を見たことがなかったのだろう。

融合爆裂の行き着く先、言ってみれば『真の姿』だ。一般に攻撃用として使われている魔術は、結局のところ、これに至るプロセスにすぎない。

ラザフォードの後ろで、史学部の教授が、理学部の教授にそっとささやいた。

「話には聞きますが……金の林檎とは、つまり何なのです？ 爆弾？」

「融合爆裂の名の通り、融合して爆裂させるものですよ。ただし、融合するのはマクロな



自称「雷真の妻」。花柳奇秘録の
真作(雪月花)の月。



機巧物理学の人形使い。一門の仇を
討つためマグナスの命を狙う。

機巧少女は傷つかない

登場人物紹介



アンリヨット・ブリュー

シャルの妹。現在はキンバリーの
研究室でメイド勤め。働き者。



キンバリー

機巧物理学の教授で雷真の担任。
その正体は(灰十字)の戦士。



シャルロット・ブリュー &
シグムンド

ブリュー伯爵家の元ご令嬢。
父祖伝来の(魔剣)は破壊力抜群。

監視

対

Coming soon

ラザフォード

19世紀最強の魔術師にして
学院長。神性機巧を欲している。



ロキ

(刺客)の異名を取る実力者。
時のために魔王を目指す。



ルイ

ロキの妹姉。いつもガラム犬
13頭に囲まれている。巨乳。



アリス

ラザフォードの娘。父のために
あれこれ暗躍。半身が機巧。



シン

ドイツ製の禁忌人形。アリスに
仕える。忠実なる毒舌執事。

世界中から俊英が集まる、魔術の
最高学府。4年に1度(夜会)を
開催し、「同時代でもっとも優れ
た才能」に魔王の称号を与える。
ラザフォードの就任後、
神性機巧開発を強力に推進中。

王立機巧学院

物質ではない。軽い原子を融合し、重い原子に作り替える」

その結果、莫大なエネルギーが放出される。

「あの実の中に、液化した水素か何かが、みっちり詰まっているのでしょうか。理屈で考えれば、反応は一瞬、膨張圧を閉じ込めておけるはずもないが……」

もしそれが可能なら。解放された瞬間に生じる力は、半径数キロを吹き飛ばす。

原理は恒星の燃焼と同じ——ここに極小の太陽を生み出そうというのだ！

魔女は念動で林檎を取り出し、導火線を下にして、指の上に浮かせた。

「見よ。このへたにわしの腐毒を流してやるとな……」

指先から瘴気を送り込む。その途端、ぐわっと魔力の波が広がった。

魔女の後ろで一般市民の人質が一斉にのけぞる。魔術師でもない彼らが圧倒されるほどの、濃密な「死の気配」だった。

へたの周辺から、徐々に実が赤くなっていく。内部で反応が進行しているらしい。

「ひとたび腐り始めたが最後、誰にも止められはせぬよ。じっくり熟れるのを待つがよい。そうじゃの、一刻くらいで食べ頃じゃ。真つ赤に熟れて、綺麗じゃぞ」

魔女はくすくすと笑い、はしゃいだ声を出した。

「わしを上回る瘴気があれば、完全に腐らせることも可能じゃが……ふふつ、残念じゃのう、ラザフォード。レメゲトンがあればのう！ ははは！」

再び部下に合図を送り、今度は伝声の機巧を用意させる。

マイクに口を近付け、吐息で反応を確かめてから、アストリッドは喋り出した。

「機巧都市の善良なる市民、勤勉なる警官、ならびに前途ある学生諸君に告ぐ——我らは〈金の槍団〉、学院の不正を正す者なり」

架空の名だ。結社の関与に気付く者は気付く。それでいいし、それでこそいい。

「我らは学院を占拠した。信じるも信じないも自由だが、五十名の教職員、ほぼ同じ数の市民と午後の茶会を開催中——無論、主賓はラザフォードなり」

学院の内外に広がる失望と混乱を想像して、アストリッドは身体を震わせた。

気持ちいい！ この上もなく！

「我らの要求はこう——一、王立機巧学院を本日限りで解体すること」

「バカな！ そんな要求を誰がのむ！」

教授の一人が叫び、黒コートの魔術師に殴られて転がった。

物音と悲鳴はマイクが拾ってくれた。なかなかのパフォーマンスだ。アストリッドの興が乗り、望んでもいない要求をもっともらしく並べ立てる。

「一、自動人形エクスポを廃止すること。他国に技術を奪われ、国益を損なう愚行なり。

一、学院が秘匿する禁忌の秘術を全世界に公開すること。国費で勝手を研究を行い、成果を独占するなど言語道断なり。そして——」

たつぷりの溜めをつくって、意地悪く告げる。

「一、夜会を無期限中止にすること。思慮分別のない子どもに魔王ワイスマンなどというお墨付きを

与え、禁忌の実践を許可するなど、到底人類のためにはならない」

予想したどよめきはない。誰もが言葉（言葉）を失っていた。

アストリッドは愉悦の笑みを浮かべ、ラザフォードを見下ろした。

「以上の要求が受け入れられぬ場合、人質に天誅（てんちゆう）をくだすわえ。以上、帝国議会の回答を待つ。期限は一刻——日没までじゃ！」

天誅（てんちゆう）が示す言葉の意味を、ここにいる者だけが知っている。

おし黙る教授たち。どうやら市民たちにも、状況の深刻さは伝わったらしい。先ほどの威勢はどこへやら、顔面蒼白（そうはく）で、もう泣き叫ぶ気力もない。

アストリッドは獅子（しし）のたてがみにしがみつき、笑い転げた。

取り逃がしたオルガのことなど、もうどうでもよくなっていた。

アストリッドの狂態を、ラザフォードはただ黙して見つめていた。その口元には微笑がある。だが、それは普段の余裕の笑みとも、時折り浮かべる自嘲（自嘲）とも違う。

これほどまでにあっさりと、学院史上最大の危機を迎えてしまった——
冗談のようなこの状況を、彼自身、滑稽（こっけい）に思ったのかも知れない。

張り詰めた空気の中、アストリッドの笑い声だけが、いつまでも響いていた。



Chapter 5 人間の定義



1

「今の放送、教授が人質って——学院長も!?」

上ずったシャルの声が、地下水路にこだました。

理学部にほど近い上水道。学院の地下に広がる、迷宮じみた通路だ。

夜々を抱いて運びながら、グリゼルダはそっけなく応えた。

「これでわかっただろう。学院長のみならず、教授ものきなみ敵の手中だ」

「にわかには信じられんな……。学院がこうもたやすく……」

結社の脅威を熟知しているシグムントでさえ、さすがにこの結果は予期していない。

「着いたぞ。キンバリー女史が用意したシエルターだ。ここを拠点にする」

開けた空間に出る。地上に続く階段があり、壁にはワイン樽が並んでいた。

「女史よ、ここはワイン蔵か?」

「密造酒なら可愛^{かわい}げがあったんだがな。公にできないものを貯蔵しているそうだ」

言葉の意味を悟り、シャルが「うっ……」とうめいた。禁忌の部品や呪物が収納されて

いるに違いない。触りたくもないところだが、グリゼルダは容赦なく、

「武装が欲しい。自動人形がないか探すぞ。シャルロット、手伝え」

「は……はい……」

涙目になって、おっかなびっくり、ワイン樽の中身を確認し始める。

夜々はしばらくそれを眺めていたが、ふらりと階段を上がって行った。

——ちょうどいい。シグムントはばさりと羽ばたいて、夜々に続いて地下室を出た。

地上は理学部の……跡地だった。

半壊した校舎は見る影もなく、あたかも太古の遺跡のようだ。ただし、調度や本、実験設備の破片があふれ返っていて、遺跡にしてはゴミゴミしすぎている。

崩れた天井から差し込む夕陽が、夜々の輪郭をはかなげに照らしていた。

シグムントはそちらに飛び、彼女の目の前、折れた柱に降り立った。

「一人きりでいるな。奇襲を受けたら、ひとたまりもない」

「……シグムントこそ。またシャルロットさんが半狂乱になりますよ？」

「いや、そうさせぬためだ。シャルがいては訊けないからな」

夜々はそれだけで内容を察したようだ。気遣わしげな目をして、

「体の調子はどうですか？」

「問題ない。君の創り主、花柳斎殿のおかげだ」

ツールがくれた〈器〉は竜王の肉体の一部、禁忌の生体パーツだ。禁忌人形に戻った今、

三本の魔剣^{グラム}と相まって、シグムントの性能は以前より向上している。

「だが、不安材料もある。この心臓のことだが……」

「大きな力を使わなければ、長持ちします」

「——やはり、寿命があるのだな？」

こつくりとうなずく。それから、急いで言い添えた。

「もちろん、人間くらいの寿命はあります。シグムントはまだまだ長生きできますよ」

「だが、大きな負担をかけるたび、耐用年数が削られていく？」

夜々は視線をそらした。シグムントは鳥のように跳ねて、視線の先に回り込む。

「君は少し前から、体を悪くしているようだな？」

「……心配はいりません。夜々は雷真^{らいしん}の命をわけてもらってますから」

「命を？ そのことを、雷真は知っているのか？」

「はい。女心はちつとも察しなくせに、そういうとこだけ勘が働くんです」

知っていてなお、夜々を側に置いてくれる。使うことをためらわない。

夜々は自分自身を嘲^{あざわら}るような、痛々しい笑みを浮かべた。

「呪いみたいですね……。主^{あるじ}の命をすする、禁忌の人形……」

「自分自身の生命なら、彼にとっては安い代償だろうよ。だが、雷真の生命力を吸収しているのなら、なぜ君が弱って——」

言いかけて、気付く。これまでの雷真の戦い、その戦いぶりはどうだった？

大量の血を使い、傷だらけになり、何度も生命の危機に瀕した。

吸い上げるだけの生命力は、あったのか？

なかったのなら——誰の生命力が充てられる？

「……彼に警告すべきだ。君の口から言いにくいなら、私が」

「だめ！」

夜々はシグムントを抱きかかえ、強く拒んだ。

「そのことを知ってしまったら、雷真は戦うことをためらいます……！」

それでは成長が見込めない。雷真は実戦を経るたび、大きく力を上げてきたのだ。これまでの戦闘、そのどれひとつとして、雷真の無駄になったものはない。

それに——

夜々はほんのりと頬を染め、嬉しそうに言った。

「夜々は今の雷真が好きです。無鉄砲で、お人好しで、相手が誰でも——人形でも、おかまいなしに助けてくれる雷真が。夜々のために力を出し惜しみするような、そんな雷真は見たくありません」

「……だが、マグナスと戦う前に君が倒れては、元も子もない」

「心配しすぎですよ。普段通りの使い方なら全然平気ですし、多少の無茶だって——夜々はまだまだ、十年だってもちこたえて見えますから！」

一五〇年を生きるシグムントには、笑顔の裏に潜む嘘が、ひと目で把握できた。



おそろくはもう——あまり時がない。

そのことを知っていながら、氣丈にふるまっている。

「……君たちには、大きな債務を負ってしまったな」

「お互いさまです。シャルロットさんは何度も雷真の力になってくれました。このあいだだって、雷真の無茶のせいで、シグムントは一度、殺されて——」

「君たちはシャルとアンリを救ってくれた。命ばかりではなく、心をだ。君たちがいなければ、あの姉妹は生涯、己を肯定することができなかつただろう」

「それは雷真です。夜々だって……。いつか、訊きましたよね？ 夜々が一途に、健気に、どこまでも可愛らしく雷真を想うのはなぜかつて」

「うむ。君の想いが「常軌を逸している」と言ったのは覚えてる」

「雷真は言ってくれました。俺の人形じやなく、相棒になってくれ、って」

夜々は胸に両手を重ね、目を閉じて、誇らしげに微笑んだ。

「嬉しかったんです。冷たい水底から引き上げてくれたような気がしました。……雷真の手は熱いんです。差し伸べられたら、つかまずにはいられない。そして雷真は、溺れてる人に、手を差し出さずにはいられない」

「……言い得て妙だ。本当に」

雷真の生き方は危うい。すぐにも淵に引き込まれ、自らも溺死するだろう。だからこそ、彼を死なせたくない。

（君は恩人だな、雷真。あの姉妹にとっても、私にとっても。エレインとその一族に捧げてきた命を、いずれ君のためにも役立てよう——必ずな）

人知れず誓いを立てるシグムントの背後から、半狂乱のシャルが駆けてきた。
「シグムント！ 勝手にいなくならないでっ！」

逃げようとするシグムントを抱き上げ、しがみつく。とつくに半べそ状態だ。夜々があきれたようにつぶやいた。

「……すっかり弱っちくなりましたね、シャルロットさん」

「よ、弱くなんかなっていないわ。強くなっただけよ。そうよね、シグムント？」

「それは難しい問題だ」

「どうしてよ。——そもそも、夜々は何をしてるのよ。一人で出歩くんて」

「それは……見張りです。夜々は戦えないので……少しでもお役に立とうと」

言葉の途中で抱きすくめられ、台詞が宙に浮いた。

「シャル……ロットさん……？」

「バカね！ 貴女に何かあったら、あのバカにはもう、夢も希望もないじゃない！」

「貴女なしで、あいつはこれからどうやって戦うのよ！」

強く抱きしめる。シャルの想いが伝わったのか、夜々の眼にも涙がにじんだ。

乙女二人に挟まれ、窒息しそうになりながら、シグムントは考える。



花柳斎硝子

国内外に名を轟かせる隆代の人形師。雷真に教習の機会を与えた。

雪月花



小紫

夜々の妹。(雪月花)の花。甘え上手で元気いっぱい!



いろり

夜々の妹。(雪月花)の傭。最近密に目覚めてボンゴツ気味。

日本軍



火垂

マグナスが造った熟練人形。雷真の妹(樹子)にそっくり!



生門日輪

名門いざなぎ流の陰陽師。華族の華君にして雷真の許婚。

魔術師協会



グリゼルダ

前回の夜会を制した迷宮の魔王。夏頃、雷真を弟子にした。

監視



マグナス

赤羽一門を滅亡させた男。天才的人形使いにして超一流の人形師。

ネロ皇帝の御世から続く最古の魔術結社。時の権力を裏から操ってきた……とされる。黒太子エドモンド、琥珀の魔王ライコネンも参加している。

薔薇の師団(結社)



アストリッド

大幹部(金薔薇)の魔女。広く名の知れた戦争好き。

敵

◎これまでのおはなし

機巧文明華やかなりし20世紀初頭。ひとりの日本男子が至高の自動人形を引き連れ、王立機巧学院の門をくぐった。滅亡した赤羽一門、何より妹の仇を討つために……。首尾よく夜会の参加資格を得た雷真は、試合を勝ち進む一方、多くの実戦を経て才能を開花させていく。強敵(十三人)も残すところはわずかに数名、もうすぐ仇敵マグナスに手が届く――!

シャルは一度、失くした。だから、理解したのだろう。

自動人形は単なる武器ではない。失くしたとき、魔術師がどうなるのかを。シャルは右手でシグムントを抱き、左手で夜々の手をつかんだ。

「戻りましょう。ここからは、私たちが攻める番よ」

「え——攻める？ でも、どうやって……？」

「貴女が一番会いたい人が、たった今、帰ってきたわ」

視線で廊下の向こうを示す。そこに、精悍な面構えの——彼がいた。

「雷真——」「夜々——」

あちからも気付いて、駆けてくる。

雷真は夜々を頭からつま先まで確認し、そして抱きしめた。

夜々は驚きに目をみはる。そんなことをしてくれるなんて、滅多にない。

「無事でよかった……。大怪我させちゃって、悪かったな」

「あのくらい、夜々は全然平気です！ 雷真こそ——」

違和感に気付き、夜々がそっと身を離す。

「雷真……どうかしたんですか？」

シグムントの目から見ても、様子がおかしい。

瞳は決然として、強い意志を感じさせる。しかし、激しい怒りを隠している。

雷真の後ろから、いろりと小紫がやってくる。夜々に気付いて笑顔を見せるが、そちら

も不自然に表情が硬く、張り詰めた空気をまとっていた。

ひどい決別でも体験したのか。意趣返しに臨む兵士が、よく似た気配をまとう。

「夜々、シャル。落ち着いて聞いてくれ。俺は——」

そして雷真は、ひどく愚かな宣言をした。

2

先刻、〈愚者の聖堂〉最下層で、雷真はあんぐりと大口を開けていた。

目の前には、黒い巨体がうずくまっている。

明滅する無数の瞳に見据えられ、全身から冷や汗が噴き出す。サイズに比して、瞳の数も膨大だ。まばたきするたび、天の川がきらめくような騒ぎになる。

あの怪物だ。だが、こいつは途方もなくでかい！

いろりと小紫が反応し、即座に魔力をみなぎらせた。火垂がそれを制して、
「待ちなさい雪月花。どうやら、攻撃の意志はないようです」

その言葉通り、怪物は座り込んだままだ。

胎児を思わせる姿勢で、じっとこちらを見ているだけ。壁のあちこちから巨大な円柱が飛び出していて、巨体を支えているように見えた。

「……やる気がないなら、好都合だ。今のうちに、おつとめを果たすでしょう」

雷真は冷や汗をぬぐい、怪物に背を向け、機械類の物色を始めた。

ひしめく機械は、大部分が計器のようだった。謎の目盛が単位とともに刻まれている。得体の知れないレバーが多数。無数のジャックが蜂の巣のように並び、大量のコードが挿し込まれている。雷真は慎重にそれらを見極め、

「くそもわからねえ！」

正直な感想を告げた。誰も期待していなかったようで、乙女たちも無反応だった。

「だが、軍の専門家なら、こいつで何かわかるんじゃないかねえかな？」

大量の魔石が埋め込まれた板、いわゆる〈基盤〉を示す。

「魔石ひとつひとつが回路になってる。持って帰れば、言い訳が立つだろ」

「お気をつけください雷真殿。『そうち』が壊れでもしたら、大変なことになります」

ずいぶん遠くから、いろいろの声がかかる。見ると、いろいろは入り口まで後退し、扉の陰からこちらの様子をうかがっていた。

「……何で遠ざかってるんだ？」

「いろいろ姉さまはねー、カラクリが苦手なの」

小紫が邪気のない顔で言う。火垂が意外そうに振り向いた。雷真も驚いて、

「マジか。だって、硝子さんの屋敷に、たくさんあったよな？」

「いろいろ壊すから、触っちゃダメって言われてたの」

雷真が居候を始めたとき、とつくに破壊しまくった後だったということか。

「そ、うち」を侮あなづつてはいけません。怪物が動き出したり、爆発する可能性も……」

「前フリやめろ。そういうの、言霊ことだまが宿るんだぞ」

いろりをたしなめつつ、基盤の霊視を試みる。

天眼てんがんが周囲の把握なら、霊視は対象の解剖だ。魔力の経路も読み取れる。

「——この蒼い石だけ、魔力が通ってねえ。これは外しても大丈夫だろ」

使われていない部品ということだ。回路の流れに変動は生じない……と思う。

固定は甘く、金属のツメがつかんでいるだけなので、取り外すのも難しくない。

火垂は明らかに殺気を出していたが、いろりがある以上、阻止もできない。

四徳ナイフのノコギリで、ツメを切断しようとしたとき、ザザッとノイズ交じりの音声

が聞こえてきた。

「我らは（金の槍団）、学院の不正を正す者なり——」

そこからたった数十秒で、雷真の脈拍は倍以上の速さになった。

「ねえ雷真、今の、ほんとかな？ 学院が占拠されたって——」

小紫の言葉が終わる前に、魔石を素手で引っこ抜いている。

結果的に言えは、いろりの先ほどの言葉は、きっちり前フリになっていた。

次々に真空管が点灯。ギアが噛み合い、蒸気が吐き出され、シリンドラーがピストン運動を始めて、怪物を支えていた巨大なパイプが引っ込んだ。

「……愚かな男です。それは安全装置だったようですね」

ちよっぴり鎔しそうに、火垂が蔑みの言葉を吐く。

「魔力が通っていなかったのではなく、その石で回路を遮断していたのです」

怪物がゆっくりと起き上がり――壁に鉄拳を叩きつけた。

亀裂が走り、壁が崩れる。瓦礫が飛んできて、機械装置をおしつぶした。

小紫がひどく怯え、その場で足踏み始めた。

「ど、どうするのっ？ あんなオバケ……どうしようもないよー」

「落ち着くのだ、小紫。攻撃してくるのであれば、倒すしかあるまい」

いろりが妹をかばい、雷真を見る。雷真はうなずき、魔力を練り上げた。

「頼むぞ、いろり」

「お任せを。辻ごろし――白袖がらみ」

舞のように一回転。放たれた冷気が壁で跳ね返り、氷槍と化して飛び出した。

酷寒の冷気が巨大な氷槍を育てる。いくつもの氷槍が巨人を貫き、凄まじい絶叫が地下

空間を揺さぶった。精神をもっていかれそうになる音量だ。耳のいい小紫が耳を塞いで膝

をつく。雷真もたまらず頭を抱え、耐えがたい騒音に耐えた。

「……………っ！」

いろりが何か叫ぶ。それが警告だと気付く前に、巨人の手が迫っていた。

回避できず、わしづかみにされる。振り回され、強烈な加重で一瞬だけ失神した。

気がつくのと、すぐ眼前に巨人の頭部がある。

無数の眼から涙のような流体があふれていて、悪夢に出そうなおぞましさを喰われるかと思ったが、巨人はそうせず、至近距離から雷真を見つめた。

（お、ま、え、は——）

どこからか声が聞こえてくる。耳を塞いでいるのに！

（だ、れ、だ——？）

「誰……って、てめえこそ何だ！ 何なんだ!?」

不思議と意志は通じたいらしい。巨人はわずかに首を引き、あたりを見回すような動作をした。しゃがみ込んだままの小紫と、いろり、火垂を順に眺める。

（わ、た、し、は……）

しばし沈黙。やがて巨人は雷真に視線を戻し、じっと見据えて心で言った。

（に、ん、げ、ん）

信じがたい言葉を聞き、雷真の全身が震えた。

（ニンゲン……これが、人間だって……!?）

恐怖し、混乱している。これは恐慌というやつだ。これほどの動揺は初めて——いや、遠う。これと同じくらい衝撃を、雷真は過去に一度、体験している。

生まれ育ったあの家で、誰よりも信じていた兄が、妹を解体したとき。

転がる遺体の山が、父母の、叔母の、従兄弟たちのものだと思えたとき。

「神を造るためだ」

という兄の言葉を聞き、迷いのない眼を見たとき——雷真は思ったのだ。これが人間の所業か？ 人間とは、一体、何だ？

雷真の中で〈人間〉の概念が崩壊した、あの瞬間と同じ恐怖。

「雷真、しっかり！ もう逃げよう！」

すぐ近くで小紫の声がした。氷笥を足場にして、ここまで登ってきたらしい。

巨人が敵意をあらわにし、手で叩き落そうとしたが、小紫は素早くとなりの氷笥に飛び移り、身軽にかわした。いい動きだ。目配りもいい。

「小紫……あれをやる！」

「おっけー！ たっぷりちようだい！」

魔力の糸を小紫に送り込む。小紫は身を震わせ、精緻な魔術を発動させた。

巨人が腕を下ろし、怪訝そうにした。瞳がバラバラの方に向き、視線が彷徨う。

明らかに眩惑されている。だが、雷真を握る手はゆるまない。雷真は小紫の魔術を維持

したまま、念をこらし、糸の一本をいりりにも延ばした。

位置は天眼が教えてくれる。糸はいりり到達し、氷面鏡を起動させた。

しゃらん、と鈴のような音が鳴り、長大な氷刃が巨人の腕を断ち切る。

予想を超える大威力。おかげで雷真は巨人の腕ごと奈落へ落下するハメになった。

しかし、問題はない。落下する雷真を、空中で抱き止めてくれる者がいる。

巨人の腕から雷真を救出し、氷笥の上まで運んでくれたのは——

「悪いな火垂、助かった！」

「コンビーフの代金です」

「……安い命だな、俺は」

苦笑してしまう。だが、ありがたい。

それに今、重大なヒントと自信を得た。赤羽一門の傀儡師に当然備わっているべき感覚を、この瞬間、つかんだ気がする。

腕を落とされた巨人が絶叫し、再び暴れ出した。

痛みが眩惑を上回ったらしい。無茶苦茶に暴れ、刺さっていた氷箭を次々に砕く。

「緊急事態だ。火垂、天井をブチ抜くぞ」

「……それしかないようですね」

「やれるか？」

「愚かなことを。私はマスターが造りたまいいし人形——答えはイエスです」
かすかに微笑む。それはひよっとしたら、初めて見る火垂の微笑だった。

「上等。頼むぜ！」

雷真は全身全霊の魔力を練り上げ、火垂に注ぎ込んだ。

足場を粉々にして、火垂が天へと跳躍する。

まさに赤い閃光。天井を貫き、その上の岩盤も貫き、淡い光が差し込んでくる。

巨人が怯み、嫌がって顔を覆う——日光を嫌うのか！

「いろりー！地上まで上げてくれ！」

「心得てございます」

いろりが冷気を高め、足もとに銀盤を生み出した。根元に冷気を継ぎ足すことで、どんな上へと伸びる仕組みだ。それは円筒の外周に沿って大きく湾曲し、途中で雷真、小紫を拾って、少しずつ天井に近付いていった。

例の（にんげん）は穴の底にうずくまり、もうほとんど動かない。

火垂（ひたれ）からかなり遅れて、聖堂を飛び出し、さらに地上へと到達した。

とつくに夕暮れどきで、葉の落ちた木立ち（きだて）がオレンジに染まっている。

この半年ですっかりなじんだ、美しい光景……ではない。

「な……んだ……この状況は……!?」

空中から見る学院の風景は、一変していた。

見渡すばかりに荒れ地が広がり、校舎は崩れ、庭園は焼け野原だ。

いかめしくも美しい、王立機巧学院の姿は、もうどこにもない。

異様な臭気が漂っている。焦げ臭く、血生臭い、雷真の心的外傷（トラウマ）を刺激する臭いが。

「雷真殿！火垂が……！」

いろりが指差す方を見て、鷹（たか）の双眸（めがね）——ライコネンと視線が合った。

火垂の跳躍（うしろどり）は、どういうわけか、ライコネン隊のど真ん中に穴をあけたらしい。

そして、軍人たちの背後、荒れた土の上に——

焼け焦げた火垂が、壊れた人形のように転がされていた。

3

地上に飛び出した火垂を、ライコネンの部隊が待ち受けていた。

飛び出した勢いのまま宙を舞う火垂に、火炎の魔術が飛んでくる。

火垂は落ち着いて魔術回路を起動——できない！

絶対王権というやつだ。あえなく爆炎に撃たれ、大地に叩きつけられる。

（くっ……あの愚図は何をしているのです！）

などと考えてしまつて、自分自身を殴りたくなつた。真っ先に敵を頼るとは！

火垂の前に、焼却の魔王が立った。

問答無用で火炎を溶びせられる。視界が紅蓮に染まり、悲鳴が漏れた。百万貫の荷重に耐え、攻めては軍艦すら砕く火垂のボディが、落ち葉のように燃え尽きていく！

肌が炭化する一歩手前で、ライコネンは攻撃を止めた。

軍人たちが寄つてきて、火垂に拘束具をはめる。火垂はうつ伏せに転がつて、されるがままに捕縛された。魔封じの縄で五体を縛られ、魔術回路を抑圧される。

ほんやり投げた視線の先に、遠ざかっていく雷真が見えた。

負傷したのか、誰かに担がれて、宙を飛んでいく。いろいろも、小紫も一緒だ。

口絵・本文イラスト●るろお

編集●池本昌仁

……逃げたのだ。私を置いて。

焼けた唇で苦笑する。当然だ。当たり前前の判断だ。逆の立場になって考えてみる。私は絶対、彼らを助けたりはしないだろう？

わかってる。わかってるのに――

なぜだろう。背中から刃物を突き立てられたような気がする。

(……連中などどうでもいい。地上に出た今、マスターは私の位置を把握された)

すぐにも救援がくるだろう。そのときこそ、魔王の最期だ。

周辺には軍人たちが待機している。戦力はわずかに二個小隊、自動人形も同じ数だ。軍の量産モデルが多いが、一部は特注品の高級品だった。

(マスターがいらっしゃれば、この程度の連中……造作もない)

「閣下、ディラック大尉が戻ったようです」

部下が報告する。やがて、大講堂の方角から機巧の軍馬が駆けてきた。

禁忌人形なのか、絶対王権の影響下で稼働している。青年将校が馬から飛び降り、火垂を認めて、わずかに頬をゆるめた。

「首尾よく確保されたご様子。幸運でしたね」

「正確な表現ではないな。発見にも確保にも、一切の偶然はない。必然だ」

「あの男が裏切る可能性もありました。閣下は賭けに勝たれましたよ」

「無駄口だ。状況報告」

「イエス、サー。三隊が講堂周辺に展開、三隊が内部で人質を監視しております。出入口付近は魔力感応式の爆破トラップ——いわゆる地雷が埋設されています」

「手堅いな。絶対王権の位置は特定できたか？」

「驚の位置はつかめました。重要機巧保管施設（ロッカー）の屋上と推定されます」
本々の切れ目を指で示す。墓標のような外観の、異質な建造物が見えた。

「……目視では確認できない。判断の根拠は？」

「音の伝導から発生源を推定しました。交差方位法での割り出しです」

「……信頼できる。射線は確保できるか？」

「学院を取り巻く〈城壁〉からなら、狙えないことはありませんが……」

高さは足りるが、遠すぎる。ライコネンは即座に判断をくだした。

「隊を二つにわけろ。一隊はロッカー内部に侵入し、直下から驚を破壊しろ。驚の無力化と同時に、本隊が講堂に突入する。分隊の指揮はディラック、人選も任せる」

「了解いたしました。カイル、セイン、おまえたちだ」

軍人二人がうなずき、ただちに出発の準備を始めた。

それから、ディラックは堀の向こう、燃えるような夕暮れを見上げた。

「日没まで間がありません。交渉人を立てますか？ 刻限を引き延ばせば……」

「交渉の余地はない。ただちに作戦を開始、賊を殲滅する」

「ですが、百名以上の人質がいます。そちらの手当では……どのように？」

「迅速に敵を排除しろ」

救出不要——軍隊であつても苛烈な方針だ。部下たちの表情が強張った。

「速度を最優先。誤射を恐れるな。ライコネンの名のもとに命じる」

「イエス、サー」

責任は自分が取ると言っている。それを聞いて、部下たちの眼に熱が戻った。

一同が車座になって、配置と役割分担を詰める。その最中に、新たな報告が入った。

「中符、監視B班から報告です。その……〈下から二番目〉と名乗る学生が、犯行予告を出した……というんですが……」

意味がわからない。軍人たちに困惑が広がった。

襲撃を受けた側の学生が、犯行？ 予告？

続いて予告の内容が伝えられると、困惑の度合いはますます大きくなった。

「……そうきたか」

ライコネンが冷笑する。

「本隊を含め、すべての指揮をディラックに任せる。二名、ついてこい」

「——指揮権委譲は了解です。が、閣下はどうされるのです？」

「俺はこれよりネズミ狩りに向かう」

返事は聞かない。ライコネンは火垂を担ぎ上げ、素早くその場を離れた。

担がれながら、火垂は屈辱に顔を紅潮させる。

マスター以外の人に触れられることなど、耐え難い。

(今に見ている。この男は……必ず、殺す)

呪詛の言葉を慰めに、火垂は屈辱に耐え、主の到来を待つ。

マグナスが現れる気配は、まだない。

4

地下から飛び出し、火垂がライコネンの手に落ちたと理解した瞬間——
雷真は足場の銀盤を蹴り、軍人たちのただ中に飛び込もうとした。

「だめ！ 雷真！」

小紫が進路に割り込み、強引に妨げる。振り切って跳ぼうとしたが、その一瞬に氷壁が生まれ、ライコネン隊とのあいだに仕切りを築いてしまった。

ただし、氷壁の発現ははつきり不完全だ。すかすかで構造がもろい。ぶつかった部分が、ガラスのように砕けてしまった。

魔術を妨害されている。その事実気付き、雷真は少しでも冷静になった。

「いりり……何すんだよ」

「お控えください！ 監査官殿を襲撃すれば、消されます！」

「だが、火垂が——！」

「そこで、私の出番です」

ぎよつとする。声はライコネンの方ではなく、背後から聞こえた。

林から飛び出してきた男が、そのまま雷真を蹴り飛ばす。背中で爆弾が炸裂したような衝撃だ。氷壁に叩きつけられ、さすがの雷真も意識が朦朧とした。

落ちてくる雷真を肩に担ぎ、その男——シンが姉妹に会釈する。

「申し訳ありません。人語を理解しない方ですので、省略させていただきます」

「独逸の人形——おまえ——雷真殿をケダモノ呼ばわりするとは……っ！」

「姉さま！ 突っ込むのはそこじゃないよ！」

シンは殺気立つ姉妹にてのひらを向け、穏やかに言った。

「話は後ほど。今は味方同士で争っている場合ではございません」

「味方……だと？」

「はい。ゆえに失礼——少々、手荒に参ります」

言うが早いか、いろりと小紫と一緒に抱え、シンはいきなり加速した。

完全統制振動の効果で、シンを構成する全原子のベクトルがそろう。普段よりはるかにぎこちない発進。それでもどうにか飛翔して、ライコネン隊から全速で離脱した。

後方で氷壁が破碎されたときには、かなりの距離を稼いでいる。

シンの肩にへばりついたまま、雷真はかすむ目で背後をにらんだ。

「火垂……くそつたれ……！」

やがて、傾いた日差しが城壁にさえぎられ、夕闇が学院を包んだところで、シンは雷真たちを地面に下ろした。ほとんど墜落のような、乱暴な着地だ。

シンがうやうやしく頭を下げ、今さらながらに謝る。

「申し訳ありません。とんだご無礼をいたしました」

「……いや、助かったぜ」

シンがああしてくれなければ、雷真はライコネンに突っ込んでいただろう。

策もなく魔王に挑めば、確実に返り討ちにされていた。仇の自動人形を助けようとして死んだのでは、撫子に合わせる顔がない。

「さすがはミスター・アカバネ、お心が広い。実は少々、心地よい体験でした」

「やっぱりな！ 私情が入ってると思ったよー」

「ラザフォード家の執事は優秀ですが、欲望に正直すぎるのが欠点です」

「本当にな！ アリスはどうした？ おまえ、どうして一人で動いてる？」

「お嬢さまは旦那さまのもとに向かわれました。私が単独で動いているのは貴方——貴方がたと連携するためです」

「連携……アリスは動くつもりなんだな？」

「三度の食事より騙し合いがお好きという、ゆがんだ精神をお持ちですのぞ」

「……そうだったな。あいつがその気になったなら、少しは希望が見えてくる」

正直、ここまでの苦境は初めてだ。

学院は何者かに占拠され、学院長以下、凄腕の教授陣が人質となっている。

「ライコネンの野郎……火垂を奪って、これからどうするつもりなんだ？」

「戦隊を鹵獲した理由はわかりかねますが、これからどうするというところでしたら、もちろん人質を奪還し、事件を解決に導くでしょう」

「は？ ライコネンは俺たちの味方……ってことか？」

「いえ、敵です。事件を見事解決すれば、閣下は英雄に、旦那様は無能者となります」

——そういうことか。

「お嬢さまの考えでは、英国の目的は学院の支配……だそうです。当然、列強各国の反発を招きます。ドイツやロシアは留学生を引き上げるかも知れません」

「そうなたら、夜会はどうなる？」

「学院に魔王選定権を与えていたのは魔術師協会です。それはこの学院が〈公正〉たればこそ。中立性が維持できなくなれば、もちろん権限を奪うでしょう」

「魔王選定権がなくなる——ってことは、夜会がなくなる!?」

「シンは苦笑した。皮肉っぽく雷真を見下ろし、肩をすくめる。」

「今日は済ませませんね。貴方はかなりの切れ者と、内心評価しておりましたが」

「……悪かったな。俺はもともと学がねーんだよ」

「夜会はなくなりません。なぜなら、英国は独自に魔王を選定するでしょうから」

「——」

「イギリス国教会と同じです。この国には独自にやっていく文化があるのですよ。勝手に魔王を輩出し続けます」

「待てよ！ 英国がそれをやれば、列強各国は……」

「こぞって同じことをやるでしょう。もはやバチカンの意向に従う者はなく、協会の権威は形骸と化す。魔術師は倫理のくびきから解放され——」

——列強各国が、好き勝手に禁忌の研究に手を染める。

帝国主義のはびこる世界大戦前夜。各国が軍備増強に突き進む、この時代。

歯止めなど、かかろうはずがない。

「私は政治の素人ですが、何が起るかは予想がつかます。捕虜を禁忌人形の材料とし、数多の人体実験が行われることでしょう。百年と待たず、猛毒の化学兵器、生態系を破壊する生物兵器、殲滅魔術をはるかに超える超巨大爆弾——人類がまだ手にしたことのない、素晴らしい発明がなされるでしょうね」

聞いているうちに、小紫が震え始めた。それを抱くいろりも、もう血の気がない。

「……あのバカ王子が喜びそうな、愉快な話ばかりだ」

奥歯を噛み、土を握りしめて、雷真は考える。

何かある。まだ打つ手はある。

ライコネンに失態を演じさせ、エドマンドの野望をくじく名案が、きっとある。

最善の方法は、ライコネンより先に学院長を救出し、事件を終結させること。

学院長は政治のプロだ。そうすれば自力で返り咲く……だろう。たぶん。だが、それでは——火垂は、どうなる？

（……迷う必要はない）

非情になれ。目的を忘れるな。あいつは敵だ。

仇の人形。まして、体内に撫子の部品を格納しているのだ。

「……味方を探そう。それに、まずは夜々の無事を確かめたい」

「では、私をご案内しましょう。ミス・ウェストンとミス・ブリューも一緒です」

「そうか。あの二人がいりや、何とかなるかな？」

こんなに白々しい台詞を言ったことが、かつてあっただろうか？

自嘲を顔に貼りつけ、体を引きずるようにして、雷真は歩き出した。

「……いろり姉さま？　どうかしたの？」

小紫の声で我に返る。雷真が振り向くと、いろりは不思議そうにまばたきした。

そのまばたきで、大粒の涙がこぼれ落ちた。

やっと自分の状態に気付いたらしい。いろりはあわてて顔を背け、目元をぬぐった。

「な……何でもありません。どうぞ、おかまいなくっ」

よせばいいのに——雷真は訊いてしまう。

「いろり。おまえはどうしたいんだ？」

いろりは目を伏せ、無表情で応えた。

「別に、どうも。私は人形ですから、雷真殿のご命令に従うのみです」

「けどよ、顔に書いてあるぜ。『火垂を助けたい』ってよ」

「……ご冗談を。戦隊は雷真殿の敵ではありませんか」

「違う。俺の敵は赤羽天全だ。あいつらは敵じゃない」

自分の言葉に、自分で驚く。

だが——普段の俺なら、最初から最後まで、そう言い張ったはずだ。

雷真の目を、そして心を曇らせていたのは、皮肉にも火垂の面相だった。

あまりにも撫子そっくりだったのがゆえに、自分の心を欺いた。とっくに感じていたはず

だ。彼女の葛藤を知ったとき。ともに戦ったとき。缶詰をわけ合ったとき。

火垂は、敵ではないのだと。

やっと本当の覚悟が決まる。この状況で最善の一手は——これしかない。

雷真はいろりを見据え、迷いなく告げた。

「俺は、火垂を助けるぜ」

5

雷真の決意表明を受けて、夜々は耳を疑った。

（戦隊を助けるために、魔王陛下と戦う……!?）



Prologue

妻をめとらば、才たけて



「嬉しいです雷真^{らいしん}。さんざん焦^じられましたけど、やっとひとつになれるんですね♡」

夜々^{やや}はうつとりとして、幸せそうに瞳を潤ませた。

はふはふと熱い息を吐きながら、舌の先で棒状の肉をもてあそぶ。

「からまって、とろける……はあ……熱いです。抜いたり刺したりするたびに、チーズの香りに包まれて……夜々はもう、酔ってしまいそうです♡」

「……まあ、白ワインも入れたしな」

「卑猥^{ひわい}な料理ですね？」

「何でだ！ チーズフォンデュに謝れ！」

雷真はワインナー三本を串刺しにして、チーズの鍋に突っ込んだ。「ああっ、いきなりそんな、激しい……」と変に興奮する夜々を無視して、串にかじりつく。

正面のアンリが目を見張り、ライ麦パンを切る手を止めた。

「ライシンさんったら、普段からそんな荒々しく……夜々さんをめちゃくちゃに!?」

「あんな……もういちいち突っ込まないからな？」

「ええっ!? 突っ込まずに……どうやって……?」

「ちよっと！ そんな話はどうでもいいのよ！」



TVアニメ化決定!

MF文庫 J

機巧少女は傷つかない10

海冬レイジ

TVアニメ化決定

580



ISBN978-4-8401-4959-4
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)
メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない10

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。「夜々の代わりに、私を妻にしてください!」「姉さま、ついに……つ・い・に!」いろいろの爆弾発言に雷真と夜々は驚愕。折しも〈流星群〉騒動の責任を問われ、ラザフォードが失脚、〈焼却の魔王〉ライコネンの学院長就任が発表された。自治権を巡る混乱の中、〈結社〉が学院を襲撃——未曾有の危機が学生たちを襲う! この機に乗じ日本軍は〈愚者の聖堂〉への侵入を決定。だが、聖堂を目指す雷真の前に、仇敵マグナスと戦隊が立ちちはだかる……。シンフォニック学園バトルアクション第10弾!



海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない 1 Facing "Cannibal Candy"
[イラスト：るろお]

機巧少女は傷つかない 2 Facing "Sword Angel"
[イラスト：るろお]

機巧少女は傷つかない 3 Facing "Elf Speeder"
[イラスト：るろお]

機巧少女は傷つかない 4 Facing "Rosen Kavalier"
[イラスト：るろお]

機巧少女は傷つかない 4 Facing "Rosen Kavalier"
CD (Side-A) 付き特装版
[イラスト：るろお]

機巧少女は傷つかない 5 Facing "King's Singer"
[イラスト：るろお]

機巧少女は傷つかない 6 Facing "Crimson Red"
[イラスト：るろお]

機巧少女は傷つかない 7 Facing "Genuin Legends"
[イラスト：るろお]

モバイルアンケートやってます! この本の巻末にある奥付からアンケートページにアクセス!

アンケートに答えて無料待受をGET!!

▶ この本の巻末にある奥付の二次元コードまたはURLに携帯でアクセスしてアンケートページへ飛びます。

▶ 最後まで回答してくださった方には、ステキな待受画像をプレゼント。より良い本作りのため、ご協力をお願いいたします。

さらにメールマガジンに登録すると、最新情報やメルマガ会員限定情報をメールでGETできます。あなたも是非、メールマガジンにご登録ください!

スマートフォンの対応!

夜々は雷真にしがみつ、懇願するように言った。

「考え直してください！ 魔王に挑むなんて、無茶がすぎます！ 無謀です！」

「いつものことだろ？ ライコネンとは前にもやってるしな」

「だからって……姉さまも、小紫も、雷真を止めてください！」

だが、姉も、妹も、何も言ってくれない。ただ決然として夜々を見ている。

夜々は救いを求めてシャルを見たが、シャルもまた、腕組みしているだけだった。

「夜々よ、状況は絶望的だ。誰かが魔王を抑えねばならない」

「シグムントまで……っ」

涙ぐむ夜々の肩に手をかけ、雷真は強引に目と目を合わせた。

「時間がねえから『はい』か『いいえ』で答えろ。手を貸してくれるか？」

「いけません雷真殿！」

それは予定外だったのか、いろりが血相を変え、雷真と夜々を引き離した。

「ならぬぞ、夜々！ おまえは戦ってはならぬ！」

そのいろりの手に、夜々はそっと自分の手を重ねた。

雷真が行くと言うのなら——答えなど、最初から決まっている。

「行かせてください、姉さま。夜々は雷真のお人形、戦いのための道具です。そして道具は、目的があつて初めて生きるもの」

戦わないということは、自分の存在意義を否定するということ。

「体なら大丈夫です。これから雷真にたっぷり癒やしてもらいますから♡」

くしゃ、というりの表情がゆがむ。だが、姉はもう反対しなかった。

「……雷真殿のご判断に従います。今の私は……雷真殿の妻ですから」

「ふふ姉さまったらお茶目——命がいるかいらないか、「はい」か「いいえ」で答えてください——」

「もめるな夜々——時間がねえ——」

雷真は夜々を背後から抱え込み、早速、紅翼陣こうよくじんの糸を繰り出した。

膨大な魔力が流れ込んでくる。全身を優しく撫でられるような感触に、夜々は猫にでもなったような気分で、目を閉じて身をゆだねた。

魔力は見る間に生命力となり、組織がどんどん修復されていく。

シャルはちよつと赤面し、羨ましそうに夜々を見ていたが、やがて「ふふん」と不敵に笑って、肩の上で金髪を跳ね上げた。

「貴方あなたがライコネンさまとやるっていうなら、魔女の方は私の獲物ね」

「魔女？ シンが言ってた……金薔薇ばらってやつか？」

「そうよ。私……あの魔女は許せないの。学院をこんなにされて、あんなに……自動人形オートマトンを殺されて——黙っていられるわけじゃないじゃない——」

「やめておけ」

背後の階段から、グリゼルダの冷やかな声が飛んできた。

劍を三本、左腕に抱えている。発掘できた武装はそれだけらしい。

「まったく……どうして私の弟子になる奴は命知らずのバカばかりなんだ。にわか仕込みの魔劍闘法で伝説の魔女に勝てるつもりか？」

「やるしかないわ！ 戦力はもう、私たちしかいません！」

グリゼルダは取り合わず、雷真の方にも冷淡な視線を投げた。

「貴様もやめろ。先生に殺されるだけだ」

「……決めつけるなよ。俺には世界最高の自動人形が三体もついてんだぜ？」

「それでも、無理だ。よくわかつているだろう。望みの結果を得るには相応の代償がいる。高望みの願望なら、なおのことだ」

「どうせ愚痴を垂れるなら、『やめときゃよかった』って言いたいね」

「実に貴様らしい世迷言だが、今は言うことを聞け。おまえたちを死なせたくない」
不意打ちのように優しい言葉をかけられて、雷真は面食らった顔をした。

少し考え、ごまかしたような、軽い調子で言う。

「大丈夫だ。ひと当て、ふた当てして、後は逃げ回る。ライコネンより先に人質を奪還しちまえば、こっちの勝ちなんだからさ」

「足止め——いや、無理だ。こんな開けた地形で足止めなどできん。貴様を無視して行けばいいだけだ。そもそも、奴を襲撃すれば、貴様は重犯罪人だぞ？」

「ああ。だから犯行予告を出しておいた」

眉をひそめる。一方、いろいろと小紫は視線をかわし、くすつと笑った。

「さつき、シンに頼んだんだよ。兵隊さんに伝えてくれって」

「伝言……何と？」

「（下から二番目）が、これから聖堂をぶっ壊す——ってな」

グリゼルダが目を見開く。シグムントも感心した様子で、うなずいた。

「考えたな。それならば、彼も動かざるを得まい。……釣り出せる」

愚者の聖堂——神性機巧研究の成果を横取りできなければ、学院を掌握したとしても、
 旨みが半減だ。雷真の破壊行為を傍観はできない。

グリゼルダは苦笑して、雷真の肩をこぶしで突いた。

「相変わらずチエスの終盤みたいな奴だ。小ずるい一手で相手の計算を崩す。……丸焼き
 にはされるなよ。そのくらいで死ぬタマでもなからうが」

「魔王さまにそこまで言われて、ご期待を裏切れるほど神経が太くねえ」

「嘘つけ。貴様の神経は牡馬のアレのように太い」

「牡馬の何だよ！ 男爵さまがおかしなこと言うな！」

「ライコネンは任せる。魔女は私がやるとして、一番の問題が残っているな」
 グリゼルダが天を示す。鷺が奏でる不快な歌声——絶対王権だ。

「私と貴様は秘術で影響を小さくできるが、ほかの教授や学生にはきついだらう」

雷真は特に心配していない、という口ぶり、とさりと答えた。

「ああ、これはロキがやるだろ」

「何だと？ 連絡がついたのか？」

「いや。だが、わかつてる」

「ちよつと！ 何を適当なこと言ってるのよー」

シャルが怒って突っかかる。だが、雷真は笑って受け流した。

「口が悪くて無愛想だが、あんな言い方しかできないだけで、本当はさ……」

そう——彼は、彼が操る魔術のように、温度の高い男だ。

だが、雷真はそうは言わず、小馬鹿にしたように言った。

「気に入らないものはぶっ飛ばさないと気がすまない、バカだからな」

「雷真に言われたら、おしまいです」

夜々が混ぜ返すと、雷真をのぞく全員が笑い出した。

夜々も笑ってしまいながら、心の奥で、今日も自分の覚悟を確かめる。

私は、この人の力になる。

武器になり、装甲になる。

これまでも——これから。



Chapter 6

そして役者が舞台に上がる



1

魔女の声明が終わる頃には、姉のフレイは貧血を起こす寸前だった。

かく言うロキも、平静を維持できているのか、自信がない。

アンリに至っては、可哀相に、仔細ずみのように震えている。

タイムリミットは日没——それまでに手を打たなければ、教授が全員、殉職だ。

学生たちに動揺が広がる。ざわつきかけた倉庫に、よく通る声が響いた。

「僕に考えがあるんだが、聞いてもらえないか？」

決して大声ではなかったが、学生たちはおしゃべりをやめ、そちらを振り向いた。

声の主は褐色の肌の青年、《三全世界天子》アスラだ。いつもの仲間たちに囲まれて、

奥のテーブルに腰かけている。

黒い瞳がロキを見据えている。問いかけはロキに向けられているらしい。

「聞こう。言ってみろ」

「ありがとう。絶対王権は特殊な魔力波でイブの心臓に干渉する——と僕は見た」

「ああ。オレも同じ見解だ」

「その波は純粋な魔力、すなわち魔素の伝播だろうか？」

ロキははっとした。アスラの言いたいことがわかってくる。

「音——〈歌声〉を媒介にしている？」

「うん。僕も同じ見解だ」

男子二人の視線がガラム犬に向く。それで、フレイも気付いたようだ。

今のフレイなら、音の伝播を阻害し、かき消すことが可能だ。

「僕らには先入観があった。以前、機巧都市全体が支配されるのを見ているから——敵の魔術は絶対的で、超広範囲に効果を及ぼすものだよね。でも、今回の敵はどうだろう。今このとき、僕らの自動人形は支配されているか？」

学生たちが一斉に自分の人形を見る。——確かに今は、支配を受けていない。

前回よりも効果が弱い。音さえ届かなければ、効果を発揮しない？

「ですが、それはガラム犬も同じことでしてよ」

扇で口元を隠しつつ、ソーネチカが懐疑的な目を向けた。

「敵の絶対王権がある限り、無音の領域は作れませんわ」

「一瞬でも絶対王権を途切れさせることができれば、どうだろう？ 驚が再び叫び出した

とき、その叫び声がどこにも伝わらなければ……」

つまり、フレイの魔術が発動していれば——

フレイは少しビクついたが、ラビの首に手を回し、はつきりと応えた。

「う、できます。単純に音だけの勝負なら、この子たちのハーモニーが勝つ」
ならば、そこが突破口だ！

ソーネチカが扇を畳み、考え込んだ。指でくると髪を巻き、もてあそぶ。

「ですが、どうやって驚を黙らせますの？ 火薬の爆発音……では、敵のみならずガラムの声も消えますし。長射程の攻撃魔術は解除される公算が大……」

「銃で狙撃するのはどうだろう。誰か、できる者はいないか？」

アスラが呼びかける。だが、手を挙げる者はいない。

「無茶ですわよ。精度や射程を魔術で底上げするならともかく……。そもそも威力が足りませんわ。大砲なら、黙らせるくらいはできそうですけれど」

「それでは一回きりの勝負になるな。外したが最後、砲の場所を察知され、融合爆裂が飛んでくる。二発目は撃たせてもらえない」

ソーネチカは自分の背後、三体の機械式ゴーレムを見上げ、凛々しく言った。

「では、わたくしのヨルムンガンドがゲートから跳んで、体当たりしますわ」

学生たちが驚く。この機械人形に、そこまでの移動能力があるのか？

「砲弾と違って、軌道の微調整も効きますわ。見事、当ててご覧に入れましたよ」

「微調整？ ひょっとして君は、乗っていく……つもりか？」

「無論です。直に触れ、手ずから操作すれば、まだしも制御できるはず」

だが、驚を黙らせるほどの衝撃を生むには、かなりの速度が必要だ。

漆黒の瞳を翳らせ、アスラは確かめるように聞いた。

「……危険は承知の上か、ソーネチカ？」

「危険などというものを、生まれてこの方、承知したことはありません。ですが——」

一本挿しの薔薇のように、艶やかに、凛として微笑む。

「常在戦場。危険のない人生など、ありませんわ」

「オレがやろう」

——という台詞が、ロキの口を突いて出た。

フレイがロキの腕をつかむ。アンリも思わず身を起こしかけた。

だが、ロキはそっと姉の手をほどき、迷いのない声で言った。

「（女帝）の人形は速度に不安がある。絶対に回避されない速度がいるだろうか？」

ソーネチカは値踏みするようにロキを見たが、その通りだと思ったのか、何も言わずに

引き下がった。気位の高い面倒な女だと思っていたが、案外、素直な性格らしい。

アスラもうなずき、再度、学生たちを見回した。

「攪乱や索敵、突入の人員がいる。ほかに、力を貸してくれる者はいないか？」

——名乗り出る者はいない。学生たちは視線をそらし、沈黙した。

口には出さないが、なぜそんな危険を冒さなければならぬのか、という気持ちが透け

て見えるようだ。軍も警察も近くまできている。教授陣は凄腕だし、監査官ライコネンも

学院にいる。黙って護られていれば、事件は解決するんじゃないか——？

「学院は今、かつてない窮地に立たされている」

静かな、しかし揺さぶるような声が響き、学生たちが思わず顔を上げた。

「学院の自治は脅かされている。二百年の伝統が今日、断たれるかもしれない」

アスラ得意の弁舌だ。原稿もなしに、とうとうと語る。

「ここで震えていれば、ライコネン氏が解決してくれるだろう。しかし、それが何を意味するのか、僕は知っている。学院生の敗北だ」

その通りだ、と誰かが合いの手を入れた。——アスラの同志だろうか？

「僕は祖国も、思想も、歩む道も違う。だが今は四年間の苦楽とともにする仲間だ。母校の危機を傍観し、今日という日を忘まわしい過去にしていいいのか。生涯己の無力を恥じ、卑怯者の烙印を背負うのか？ 学院卒の魔術師が？」

煽り立てるような言葉に、聴衆の熱が少しずつ高まっていく。

「今日このときを輝かしい記憶とするために、ともに起とう！」

学生たちの表情に、ほんの一瞬、熱い感情が閃くのをロキは見た。

気弱そうな男子学生が立ち上がり、思い切ったように言う。

「あの、僕の人数……実は禁忌人形なんです。ある程度なら、自律行動ができます」

それが口火。倉庫のあちこちで、次々に別の声があがる。

「俺は工学部で探査装置を研究してた。索敵の役に立てると思う」

病衣姿のシャルが不機嫌にテーブルを叩く。弾みで天板が揺れ、シグムントがチーズのかけらを取り落とした。

雷真たちがいるのは医務室のとなり、いつもの病室だ。

時刻は既に夕方。身体検査を終えたシャルと一緒に、早めの夕食をとっている。

「話を戻して。昨日までお父さまが学院にいらしてたって、本当なの？」

全員が黙り込む。シャルは裏切られたような顔をした。

「ひどい……！ 私には隠してたの……っ？」

「そうじゃない。おまえ、ずっといかなかったし、それどころじゃなかっただろ」

「ごめんなさい、お姉さま……。私だけ、お父さまに会って……」

アンリが消え入りそうな声で謝る。チーズつきのウインナーをむしりつつ、シグムント

がなだめるように言った。

「シャルよ。皆、君を氣遣っていたのだ」

「……そうよね。ごめんなさい、責めるようなことを言って」

素直に頭を下げる。おまけに「ごめんなさい」ときた。雷真はもちろん、夜々もアンリ

もびくつとした。シャルは不安げな顔をして、

「な……何よ。怒ったの？」

「いや、誰も怒ってない。ただ、その、何っか……」

言葉を濁す雷真に代わって、シグムントがズバリ言う。

「理学部で魔法防御の研究をしています。お役に立てるかもしれません」

「魔法円構築なら任せて。教授に毎日やらされてるの！」

「タフなゴーレムがあるぞ。突入の盾役は任せろ！」

一人、また一人と立ち上がる者が出て、ついには全員が立ち上がった。

その様子に、ロキも舌を巻いた。アスラは利を説いたのでも、強力な秘密兵器を持ち出したのでもない。口先だけで協調の輪を作ってしまった。

魔術の技量や学業、まして一対一の戦闘では負けないつもりだが――

（将としての器なら、オレは奴の足もとにも及ばないな）

ソーネチカも同じことを思ったか。扇で隠した口元に、自嘲めいた笑みが浮かんでいた。フレイが急におろおろして、ぐっと胸の前でこぶしを握る。

「ロキにはロキの、いいところがあるよ……っ」

「余計な気を回すな、バカ姉貴」

べちっ、とフレイのひたいを指で弾き、ロキは笑った。

「今はアスラに乗ってやろう。学院がつぶれでもしたら、オレたちの目的も叶わない」
嬉しそうにうなずく姉。その周りで、ガラム犬が一斉に尾を振った。

ロキはアスラを振り向き、先ほどの演説を皮肉って言った。

「隊の編成と作戦立案を急げ。出遅れたら、みじめな思い出が残るぞ」

あの（剣帝）が冗談を言うとは思わなかったのだろう。学生たちはそろって目を丸くし

て、一瞬後、どっと笑い出した。

四回生が中心となって、戦力の確認と編成を急ぐ。にわかに活気づく倉庫の中、アンリだけが、ひどく暗い表情でうずくまっていた。

2

廃墟に身を潜める雷真らいしんたちのもとに、すいーっとシグムントが飛んできた。

雷真は手を上げて位置を知らせ、ねぎらいの言葉をかけた。

「おう、お疲れさん。《絶対王権》マウスコンントのいうの位置はつかめたか？」

「いや、私は発見できなかった。だが、学生たちはつかんだようだ」

「学生？ ロキとフレイか？」

「もっと大勢だ。全学的な動きだろう」

かいつまんで、偵察の結果を報告する。学生たちは《ゲート》周辺に身を隠し、何やら組織だった動きを見せているらしい。

「かなりの機械人形を持ち出している——明らかに反撃の構えだ。ということはつまり、絶対王権マルチコンントのいうを無力化する方策があるのだろう」

なるほど、論理的な推論だ。感心する雷真の後ろで、グリゼルダが立ち上がった。

「では、こちらこそそろそろ始めるか。私が突入の先陣を切る」

散歩にでも行くような、気楽な調子だ。三姉妹とシャルが困惑した様子で顔を見合わせた。彼女たちの懸念を代弁して、雷真がたずねる。

「学生が動くのを待った方がいいんじゃないか？」

「私が動くことで彼らが動きやすくなる。学生の狙いは絶対王権だ。魔女は当然——」
「絶対王権を護る……？」

「断言はできないが。人質とどちらを優先するか、どんな備えをしているか、まるでわからん。だから私が派手に暴れて、魔女を講堂に引きつけておく」

敵の選択肢を狭め、こちらの都合に合わせてもらう——チエスの思考だ。

シャルが胸に手を当て、気負った声で宣言した。

「ウエストン先生！ 私も行きます！ 絶対行くんだから！」

「わかった、わかった。おまえだけ休んでいろとは言わない」

「おい待て。シャルは魔術が使えないだろ。それでも連れて行くのか？」

「貴様たちのバカは師匠譲りだ。そうだろう？」

雷真とシャルを交互に見つめ、穏やかな微笑みを見せる。

雷真の胸が熱くなる。だが、グリゼルダはすぐに思い直したようで、

「いや、私のバカがバカ弟子譲りだな。特に一号の方」

「何で俺に責任かぶせてんだ！」

「女史よ、それは言い得て妙だ。シャルの無謀も彼譲りで……」

「シグムントまで何だよ!? 俺のバカは伝染病か!」

自覚があるので深くは突っ込まない。そんなことより、もっと重要な問題がある。

雷真は三姉妹を振り向き、こちらの戦力を確かめた。

雪月花がそろった様子は壮観だ。シャルには当然シグムントがいる。しかし――

「なあ、お師匠さま。やつば雪月花の誰かを連れてった方が……」

「私の身を案ずるなど笑止千万。魔王になつてから言え」

「だが、自動人形なしで人質を無事に救出できるか?」

「私の心配ではないのか……!? そこへ直れ!」

「あんたのことも心配してるよ! 少し大人になれ!」

突きつけられる剣を払いのけ、雷真は疑念の続きを言った。

「講堂の中で戦闘になるよな? 正面から突入すりゃ、人質がやべえ……だろ?」

「私は魔王だ。死ぬ気になれば、不可能はない」

つまり――死ぬ気でやってくれと言っている。

「ありがとう。あんたのそういうところが、俺は好きだ」

「な――貴様、こんなときに求婚はやめろ! その……照れる」

「求婚まではしてねえよな!?」

「雷真~~~~~結婚してやるなんて、また甘い言葉で女心を弄んで~~~~~!」

「夜々、頼む。俺の言葉は額面通りに受け取ってくれ」

「違うと言うなら、夜々にもプロポーズしてください！ そうしたら信じます！」

「おまえも折れないな！ 一ミリも信じる気ねえだろ！」

「もーっ、姉さまばかりずるいよー。雷真、私もぎゅーってして♡」

小紫が身をすり寄せてくる。いろりはあきれた様子で小言を言った。

「よさぬか小紫。これから戦いだというのに、雷真殿を困らせるな」

「あー、いろり姉さまも抱っこして欲しいんだー」

「ご誤解なさらないでください雷真殿。そのようなこと、思っても申しませぬ！」

「姉さま……やっぱり思ってた……っ!?」

びきびきと夜々のひたいに青筋が立つ。三姉妹のやり取りを見て、グリゼルダとシャルが同時に噴き出した。

「じゃあ行こうぜ。盗られたものを、盗り返す！」

仲間たちがうなずき、それぞれに駆け出した。

いよいよ日没だ。夕闇に覆われた学院は、不気味な沈黙に包まれている。冷たい風が頬を襲く中、雷真はいろりと小紫を連れ、夕闇の向こうへひた走った。

途中でグリゼルダ、シャルと別れ、再び地下の入り口へ。

走りながら夜々がちよこちよこ寄ってきて、緊張した面持ちでたずねた。

「無事にライコネン閣下を足止めできるでしょうか……?」

「足止めはしない。俺たちは焼却の魔王を倒す」

夜々はびくつとして、飛び上がった。

「でも！ さっきは足止めが目的だったー！」

「倒すと言えば、絶対に止められる。だが、倒さなければ火垂はたるが教えない」

「どうして、そこまで……それに、魔王ワイスマンを倒したら——最悪、放校になりますー！」

「ならない。あの狸親父なるとおやじは絶対、俺を見捨てない」

「そんなこと、どうして言い切れるんですか!？」

「魔王ワイスマンを倒すような学生だぜ？ 手元に置いておきたいに決まってるだろ」

「——」

実に悪魔的な発想だ。だが、確かにあの男なら……。

それに、ラザフォードの側には、雷真が頼れる仲間もいるのだ。

（おまえが知恵を貸してくれるよな、アリス）

だから、今は火垂のことだけを考える。

雷真は気合を入れ直し、三姉妹を引き連れて、一路、愚者の聖堂を目指した。

3

（耐え難いものだ。己の甘さ、愚かさ、老いを突きつけられるということは）
ラザフォードは自嘲じちやうを浮かべ、痛くなった腰を伸ばした。

となりには腹心のパーシヴァル。後ろには各学部の教授たち。

いずれも嚴重に拘束されている。身じろぎひとつにも苦勞する始末だ。

監視は一人。結社の魔術師が目を光らせている。

そのうちの一人はアストリッドだ。頼みの綱のレメゲトンはいずこかへと運び出され、行方もわからない。つまり、お手上げだ。普通ならば。

こんなときだというのに、笑いが込み上げた。パーシヴァルが見とがめて、

「不謹慎だな。何が可笑しい？」

「いや、なに。魔術界にその人ありと謳われる重鎮たちがな」

「おまえさんもそうであろうよ。……マグナスの姿が見えんな」

「それでいいのだ。《神の御子》を抑えている」

「……まさか、仕込んでおいたのか？」

「虫が知らせた。よもや、こんな喜劇が起こるとは思わなかったがね」

「日本軍は要石を盗ったようだが。くれてやってよかったのかね？」

「若者の勤勞には報いねばならん。そのくらいの褒美は出さねば」

「あの小僧がよほど気に入ったと見える」

パーシヴァルは声を立てて笑った。仙人眉の下で鋭い眼光を閃かせ、

「——ときに、先日の《星》をどう見た？」

「どう、とは？」

「我らは星の雨を阻んだつもりだった。だが、確かに星は降ったのだ。今日のこれはその続き——神性機巧の創世記が始まったのではないかね？」

「ふむ。予見の『玉座』が魔王の比喩ではなく、この国の玉座だとしたら……か」

「されば、狂王の傍らに神性機巧あり、と読み解けるわけだ」

あの狂犬、黒太子エドマンドのかたわらに、神性機巧はあるのだろうか？

「いや、まだだな。まだ神性機巧は現れない。私の勘では」

「おまえさんの勘であれば、文句のつけようがないではないか」

「教父には到底、及ばぬがね。教父の予見は絶対の運命——ゆえに因果律も捻じ曲がる。

これらはすべて必要なこと、真理に届く梯子の一段ということだ」

「我らは自分の尻にも手が届かんがね。この状況で何をどうする？」

「——ダイダロスによる機巧都市襲撃の際、叛逆の王子が言ったそうだよ。悪党というのは生まれつきの悪運に恵まれていて、神が正義の鉄槌を下すと決めたその日まで、どうあっても生き延びるものだ、とね」

「ほう——我らもまた、悪党だな？」

「その通り。そら、早速、悪運が働き始めたぞ」

講堂の扉が開き、銀髪の少女が引き立てられてきた。

魔封じの手錠で後ろ手に縛られている。可哀相に、機械義肢がむき出しだ。

ちらり、とアストリッドの視線がこちらに飛んでくる。楽しくて仕方がない、という顔

だ。ラザフォードは努めて表情を消し、関心がないふうを装った。

「おう、アリス、近う寄れ。この婆とおしやべりでもどうじゃな？」

「恐悦至極です、金薔薇さま。恋バナでもしましょうか？」

「それは次の機会に譲ろう。——シン、と言うたか。あの小僧はどこに行った？」

「まったく、駄目な執事だね、主をほっぽってさ」

アストリッドは微笑み、鋭い爪でアリスの顔を撫でさすった。

「……のう、アリス。この綺麗な顔が惜しかろう？　言うた方が利口じゃぞ？」

「そうかな。僕は黙ってた方が利口だと思うよ」

魔女はにんまりと笑い——アリスを引き倒した。

縛られているのは受け身も取れない。しこたま頬を打ちつけ、アリスは床に転がった。

黒コートの魔術師がダガーを取り出し、アリスの顔に突きつける。

「吐かせますか？」

「……いや、無駄じゃ。いびつたところで吐くまいよ」

すつとアストリッドの瞳から感情が消えた。

さすがに鋭い。魔女の第六感が何かを感じ取ったようだ。

魔女が講堂を見回す。床には魔術師たちの手で呪文が書き込まれ、転移魔術のゲートが

構築されている。林檎が炸裂する前に、人質ごと帰還しようという思惑だ。

魔女は手中の林檎を見つめた。もう三分の二が赤く熟している。

爆裂までは、もうすぐ。魔女の勝ち揺るがない……はずだ。

だが、魔女はくるときびすを返し、講堂の出口に向かった。

「アストリッドさま？ どちらへ？」

「ローレライが気になる。さあこい、《完全なる獣》」

獅子を引き連れ、講堂を出て行く。驚嘆すべき用心深さだが——それが裏目に出る。

笑みを殺すラザフォードの横に、アリスが軋がされてきた。

しばらくのあいだ、父子は無言で膝を並べていた。

ややあつて、ラザフォードは軽く咳払いをして、口を開いた。

「なぜ捕まった。講堂の外にあればよかったものを」

「ご期待に沿えず、悪かったね。ダメな父親のヘマを穴埋めしようと思ったのさ」

返事に驚く。この父と対等の口をきいた！

パーシヴァルも、事情を知らない教授陣も あっけにとられてアリスを見た。

「ドジを踏んだもんだね。そんな嚴重に梱包されてさ、古新聞の束みたいだよ。そうなる

前に対策は打てなかったの？ エドワード・ラザフォードともあろう者がさ」

ラザフォードは苦笑した。なかなか痛いところを突いてくる。

「確かに油断があったな。教授諸君、これはすべて私の責任だ」

素直に非を認める。教授陣が一斉に息をのんだ。

「もっと早く王室の変化に気付くべきだった。星が降ったのは学院への攻撃に過ぎないと、

「君があまりに素直すぎるので、不気味に思ったのだ」

「ど……どういう意味よーっ」

どうもこうも、言葉通りの意味だ。シャルもわかつているらしく、恥ずかしそうに目を伏せた。これが本来の彼女なのか、何とも素直で可憐な仕草だ。

見とれていると、夜々の瞳孔が開いた。雷真はあわてて食事に戻る。

シャルは串をじっと見つめて、弱々しくつぶやいた。

「相手はあの結社なのよね。お父さま、大丈夫かしら……」

「心配しても仕方ねえさ。おまえたちの親父さん、半端なく強えんだろ？　なら、きつと上手くやるよ。何つーか——いい親父さんだな。強えし、男前だし」

「もちろんよー」

シャルとアンリが視線をかわし、嬉しそうに笑い合った。

そんな姉妹を見ているうち、雷真の胸に疼痛が走った。自分が失くしてしまったものの重みを、温かさを、思い出しそうになっている。

見透かしたように、夜々が体を押しつけてくる——その心遣いが嬉しい。雷真は気を取り直し、再びソーセージの串を手を取った。

「あ、そう言えば」

シグムントにカットチーズを差し出しながら、アンリが思い出したように言った。

「ライシンさん、もう聞きました？　夜会が中止になるって」

先入観で即断したのが誤りだ。本当に、すまなかった」

いっそ清々しい気分ですごす。アリスはちよつとあわてて、

「策略するのは気付かれないから意味があるんだ。敵が上手くやった。ババは備えが足りなかった。それだけのことだよ——」

「すまなかったな、アリス」

皮肉に対するお返しだ。アリスは言葉を失くし、ばくばくと口を開け閉めした。

「おまえにはずいぶん、つらい想いをさせた」

アリスの血色が急によくなり、目の下が薄桃色に染まる。

そして、噴き出す。楽しげに、わだかまりが解けたように。

「らしくないね、ババ。最期の台詞のつもりなら、あまりにも冴えない。まさか、こんなところで終わるつもりなのかい？ この程度の連中を相手に？」

「まさか。私の最期はアリシアの墓所で決まっている。墓前に神性機巧を捧げてな、悦に入つて己が功績を語るのだ。年寄りじみた自慢話を延々とね」

「それを聞いて安心したよ。老練したのかと思つたからね」

「ふ……おまえは言うようになった」

「僕はエドワード・ラザフォードの娘だよ。口も達者なら、悪巧みだって得意さ。魔術の才だって十分——残念ながら、学院にはもつと優秀な奴がゴロゴロしてるけどね」
含んだ意味を理解する。やはり、アリスは策があつてここにきたのだ。



父子の策、若者たちの力が合わされば——この状況、「絶体絶命」にはほど違い。

「若さだな、ラザフォード」

バーシヴァルがささやく。落ちくぼんだ眼に、面白がるような光があった。

「年寄りはどうにも計算に頼りすぎる。敵が最後まで最善の手を指すとは限らん」

「そのようだ。現にこうして、彼らはアリスの侵入を許してしまった」

敵も油断している。アリスから魔具を奪っただけで、魔術を封じたと勘違いしている。

この娘の〈虚像〉は体内にあり、魔封じひとつで障害はできない。

バーシヴァルが天井を仰ぎ、難しい顔をした。

「脱出はできそうだな。だが、縄抜けは難しい。武器もない」

「ではまず、自動人形を調達するでしょう」

「なに——？」

「レメゲトンは奪われた。が、持った瞬間に気取られぬ範囲で、伝説をひとつふたつ抜き

出しておくくらいは——できると思わなかね？」

にやり、と笑って見せる。意味を了解して、バーシヴァルも笑い出した。

「食えぬ男よ、昔から！」

ラザフォードはわざと拘束具を腕に食い込ませ、にじんだ血で床に文字を描いた。

召喚の魔法円だ。自動人形が地中を伝い、静かに近付いてくる。

「結社の連中は気がきかなー！ 午後の茶くらい出せないものかなー！」

「まったくですな！ スコーンくらい馳走したまえー」

遠くの教授が気をきかせ、監視の目を引きつける。

パーシヴァルはもうラザフォードを見ず、声だけで訊いた。

「レメゲトン七二章のひとつだな。第八の公爵バルバドスカ」

「（ヒドリアン・レメゲトン）隠れ鬼」が得意な悪魔だ。レメゲトンを探させる」

「取り戻したとして、いつ仕掛ける？」

「学院が誇る無法者たちが、ここを強襲したときだ」

「——くると思うか？」

「必ずくる」

「そう断じる根拠を聞こう」

ラザフォードは口ひげを持ち上げ、娘を横目に見て言った。

「私の勘だよ」

4

大講堂の二百メートル以上手前で、グリゼルダは動きを止めた。

半壊した医学部校舎に潜み、付近を探る。講堂周辺には結社の見張りが巡回している。これ以上の接近は察知されるおそれがあった。

「さあ先生、行きましょう！」

シャルがきりっつとして言う。やる気十分だ。グリゼルダはため息をつき、
「阿呆め。猪突猛進は身を滅ぼすぞ」

「なつ——その通りですけど、先生に言われると何か納得できないっていうか……」

「守護精霊もなく、魔剣はかろうじて撃てるのみ。そんなさまでどう戦う？」

「それは——でも、だったらどうして私を連れてきたんですか！」

「落ち着け。おまえの出番はここではない」

シャルはきよとん、として首を傾げた。少し子どもっぽい、可憐な仕草だ。

「今から言うことをよく聞け。私が突入すれば、おそらく学生たちも動く。先刻も言ったが、彼らが最初に狙うのはあの驚、絶対王権の発生源だ。首尾よくいけば、驚は沈黙し、おまえの魔剣が本来の威力を取り戻す」

シャルの口元が引き締まる。グリゼルダはうなずき、さらに先を言う。

「私の突入が成功し、教授陣が解放されれば、魔女は必ず逃げる」

「逃げる……あの転移を使って？」

「そうだ。あれはそこらの空間転移とは原理が違う。ラザフォードであっても、事前準備なしには出現位置をとらえきれまい。だが、私が思うに、逃亡する魔女は必ず——とある場所、に立ち寄るはずなのだ」

グリゼルダには魔女の考えが読めているらしい。

グリゼルダはその「場所」をシャルに告げ、念を押すように言った。

「正確な位置は学生たちの動きで探れ。気を抜くな。目をみはり、耳を澄ませ。魔女が餌に食いついたそのときこそ、おまえの出番だ。全開の魔剣で魔女を仕留めろ」

シャルはこくんとうなずいたが、シグムントが慎重な声で口を挟んだ。

「私とシャルがそちらに行けば、貴女の手元には本当に自動人形がなくなる。まさかとは思うが、その剣のみで魔女と戦うつもりか？」

「そうだ」

きっぱり、という表現がこれほど似合う返事もない。

シャルはあきれて言葉もなかったが、シグムントはいさめるように言った。

「雷真の言う通り、雪月花を借りるべきだったのではないか？ 貴女は魔女を侮っている。あの数の人質を防御しつつ、あの魔女を倒すなど不可能だ」

深い知性を宿した瞳に、呪わしい過去を思い出すような、暗い表情がにじむ。

「セトの魔女は結社の大幹部——数いる薔薇の中でも、もっとも危険で、もっとも好戦的な人物だ。戦闘経験は突出している」

「秘密結社の幹部のくせに、名前が聞こえてくるほどだからな。踏んだ場数も違いすぎる。彼女に比べれば、私はまだまだ小娘と呼ばれても仕方がない」

「ならば——」

「だがな、竜よ。おまえも侮っているのだ。魔王という存在を」

剣を三本、次々に鞘から抜きながら、グリゼルダは言った。

「世界各地で神童と呼ばれるような者が百人、四年に一度、この学院で覇を競う——それが夜会だ。多くの者にとつて、それは人生たった一度の機会。魔王の玉座をものにできるのは、必ずしも実力に秀でた者ではない」

本来の実力を発揮できず、些細なミスで敗れた者がいる。

ちよとした体調不良や、実家の都合や、国家間のいさかいで消え去った者も。

「魔術師は神には媚びない。だが——神の方は、魔王を愛しているものさ」

気圧されるシャルの眼前で、グリゼルダは魔力を爆発させた。

駆ける。シャルとシグムントの気配が一挙に遠のく。

グリゼルダの背中から赤い煙が飛ぶ。以前から神業の域にあった出力と精度が、かつてない集中力で研ぎ澄まされ、別次元にまで高められていた。

これが本気——魔王の力だ。

わざと地雷を踏み荒らす。炸裂は全然、追いつかない。爆発を背後に聞きながら、どんどん距離を詰める。やがて周辺の見張りが反応し、集まってきた。

(かかったな)

グリゼルダは反転し、黒コートの魔術師に（糸）を放つ。

熟練した魔術師と言えど、あるいはそのゆえに、糸で魔力の循環を乱されれば、無事では済まない。魔術師が窒息し、もがき苦しむ。

仲間の魔術師が黒豹くろひょうをけしかけ、プラズマを放とうとした——が、それもグリゼルダには好都合。爆発的な魔力を念動に変え、黒豹の下あごを閉じてやった。

黒豹の頭部が赤熱し、融合爆裂エクスプロージョンが生じる。巻き込まれて、魔術師が肉片となった。グリゼルダは再び反転。剣の一本を抜き放ち、跳躍ハイドロクして振りかぶる。

それは理学部の試作品——爆破の魔術回路を仕込んだ、使い捨ての武器だ。

講堂を覆う金属のバリケードに叩きつける。刀身が爆発し、外壁を叩き割った。

濃密な念動が壁面を覆い尽くし、見えない壁を形成。壁にボールを叩きつけたように、破片と爆風がこちら側に跳ね返ってきた。

敵の警報結界が作動したようだが、今さら侵入者を報せても、何の意味もない。

グリゼルダはもう大講堂の中にいた。

敵陣に戦慄が走る。この女——自動人形オートマトンも連れずに！

一方のグリゼルダも、冷たい恐怖に襲われている。

（魔女の姿がない……！）

突入前に霊視で気付いたが、実際にこの目で見ると、若干の焦りを禁じ得ない。

魔女はどこに行ったのか。雷真らいしん、シャル、ロキの顔が順番に浮かぶ。

本来なら、好都合とも言える。この機に教授を解放すればいい。

しかし、それはできない。なぜなら——

教授だけでなく、五十人を超す市民が、捕らえられていたからだ。

幸い、教授と違って拘束が甘い。後ろ手に縛られているだけだ。彼らの足は動く。「逃げる！ 壁の穴から走れ！」

大砲のごとく市民を一喝。市民たちが我に返り、我先に逃げ出した。

即応した魔術師、黒豹が攻撃を開始する。

飛んでくるブラズマを跳躍して回避、机の上を駆けて、市民から引き離す。座席の隙間に誘導し、敵が一直線に並ぶのを待って、剣を振り下ろした。

こちらは真正正銘、ただの剣だ。しかし、全力の魔力を込めている。

十数メートルにわたって床が割れ、魔術師数名が一度に両断された。

「ミス！ 後ろだ！」

教授の誰かが警告してくれる。言葉に嘘はなく、背後に魔術師が迫っていた。

直接ダガーで攻撃してくる。グリゼルダは太刀筋を見切り、泳いだ体を蹴り飛ばした。こぼれたダガーを念動でつかみ、相手の眉間に叩きつける。

その間にも、市民が次々に地雷を踏んでいる。だが、一発として炸裂しない。

グリゼルダが地雷に（糸）を飛ばし、起爆装置を魔力で焼き切っているのだ。

嵐のごとく糸が飛ぶ。雷真の紅翼陣に比べれば持続時間の短い糸だが、出力は決して劣らず、精度に至っては数段上だ。無尽蔵の魔力にものを言わせて、湯水のごとく放出する。そうして市民を護りながら、グリゼルダは不思議な感慨に包まれていた。

（なぜ、あんな連中のために……私は必死になっている？）



死角から撃たれたような衝撃を受け、雷真も夜々も愕然とした。

「中止ではない」

冷え切った廊下に、グリゼルダの硬い声が響く。

食後、医務室前の廊下だ。見舞ってくれた師に、アンの言葉をぶつけてみたのだ。

グリゼルダは長椅子に足を組んで座り、淡々と応えた。

「夜会は学院の威信をかけた行事。世界大戦が勃発しても、魔王の選定はなされる」

「じゃあ、何でそんな噂が出回ってんだ？」

ちらり、とグリゼルダが窓の向こうに視線をやる。

威風堂々たる大講堂が見える。その三階、夜会執行部の窓にあかりがともし、見覚えのあるシルエツトが浮かび上がっていた。

「あれは——ライコネン!?」

一瞬、見間違いかと思った。あり得ない光景に思えたから。

だが、漂う威圧感、鷹のごとき双眸は、《焼却》の魔王ライコネンのものだ。

こちらを監視しているようでもある。肌にビリビリと殺気を感じた。

「監査官殿だ。監査が終わるまで、しばらく夜会は中断される」

「監査? 何の?」

「昨日の《流星群》騒動——学院長は来賓を避難させなかっただろう?」

憎んでいたのではなかったか。蔑み、侮っていたのでは？

だが、仕方がない。体が勝手に動いてしまうのだ。

笑ってしまふ。昼間雷真が言った言葉が、魂の奥底に残っていたらしい。

（ふん……これでは、どちらが師かわからんな）

グリゼルダも知っている。父や叔父や従兄弟たちが戦いに赴くのを、戦場で死ぬのを、見送ることしかできなかった——あの気持ちを。

グリゼルダ自身は、父たちの戦いぶりに口を挟む前に、ともに戦えるほど力がついた。だが、力がつく前に『賢しら』ぶることを覚えていたら……。

今もそうだ。もしこれほどの魔力を得ていなかったら。師ライコネンの指導を受けていなければ。この危機に際して何の行動も起こせず、ただラザフォードをなじることに終始していたかもしれない。

（……市民も私も同胞だ。こちらの片想いかも知れんがな）

さらに魔力を振りしほり、グリゼルダは戦い続ける。

豹の牙や爪、ブラズマの砲撃、執拗なダガーをきわどくかわしながら、糸を放って市民を護る。斬撃で床を砕き、魔術師をなで斬りにし、修羅のごとく暴れ回った。

七度目の斬撃を繰り出したとき、衝撃のせいではなく、グリゼルダの魔力に侵食されて、剣がぼきりとへし折れた。

間の悪いことに、市民の最後尾が段差につまずき、魔術師の近くに転がった。

黒コートの魔術師がとっさに彼を抱え込み、盾にする。

思わず、気を取られる。その隙を突いて、黒豹が噛みつきにきた。

グリゼルダの指から魔力の糸が飛ぶ。豹ではなく――前方の魔術師へと。

魔術師が悶絶する。それで市民は救われたが、グリゼルダの首元に、豹の牙が食い込んだ。ただし、驚異的な反射神経で頸動脈は外している。グリゼルダは黒豹の頭部を素手で引きちぎり、巨体を相手に投げつけた。

まさに鬼神。鬼気迫る戦いぶりに、敵が浮き足立つ。

「いい加減……くたばれ！」

一人がダガーで接近戦を仕掛けてきた。刃にピンク色の毒が光っている。グリゼルダは最後の剣を振りかぶり、ダガーごと魔術師を叩き伏せた。

剣の爆薬が炸裂し、数人の魔術師が内臓をぶちまける。

敵はもう十分に動揺していた。今なら、教授陣の拘束を解除できる――

だが、教壇に向き直ったところで――新手の到来に気付いた。

「頑張ったのう、お嬢ちゃんや」

魔女アストリッドが、例の獅子を連れて、教授たちの前に立ちはだかっている。

一瞬で現れた。本当に一瞬で。やはり、ライコネンの転移とは質が違う。

さすがに冷や汗が出る。今さら現れるとは……。

剣を使い切った直後で、次の武装がない。弟子の手前、シグムントにはやれると大口を

叩いたが、この魔女を相手に素手で挑みかかるのは、やはり自殺行為だ。

魔女がこちらにてのひらを向け、大量の腐毒を飛ばしてきた。

当たれば無事では済まない。とっさに魔防で防ごうと思ったが――

結論から言えば、そうする必要すらなかった。

同じく腐毒のようなものが別方向から飛んできて、グリゼルダを護る。

「見事なり、迷宮の魔王」

すぐ後ろから声がかかる。見上げると、上品な口ひげがあった。

ラザフォード――学院長だ！

魔女の向こうにいたはずが、いつの間にか、グリゼルダの背後に立っている。

ラザフォードは目を細め、まぶしそうにグリゼルダを見た。

「ほんの四年前まで、君は才こそあれど、危なっかしい少女に過ぎなかった。だが、今の

貴女は優秀な教授。相変わらず危なっかしい――私の誇りだ」

普段は油断ならない瞳の奥に、木漏れ日のように柔和な光が宿る。

「そこでゆっくり休んでいてくれたまえ。なに、心配はいらんよ。後始末はすべて、この

エドワード・ラザフォードが引き継ごう」

「と、妾がな」

ラザフォードのかたわらで、魔書レメゲトンの筆頭――自動人形アスタロトが微笑む。

学院最強のペアが解き放たれた今、結社の魔術師たちに退路はない。

敵に同情してしまいながら、グリゼルダもまた、再び魔女に向き直った。

5

「〈剣帝〉。配置についでくれ」

アスラの声を受け、ロキは立ち上がった。

姉とアンリが呼吸を止める。そろって、気の毒なくらい緊張していた。

「神さま……どうかロキさんをお守りください……！」

アンリが小声で祈りを捧げる。聞こえていないつもりだろうが、ロキの耳は拾っている。そつとしておこうとも思ったが——思考とは裏腹に、ロキの足が止まった。

怪訝けげんそうな姉とアスラに背を向けて、ロキはアンリの前に立つ。

「心配は無用だ。むしろ害悪だ。その……つまり……オレが飛び込む危険より、おまえの心労の方が相対的にリスクとなる。主に健康上の観点から」

何を言っているのか自分でもわからない。こんなとき、あの色情狂バカなら、歯の浮くような台詞で安心させてやるのだろうが……。

あいにく、そんな器用さは持ち合わせていない。だから、冷淡に告げるだけだ。

「アンリエット。その骨折の責任はオレにある」

「あつ、このくらい平気ですー それにこれは、ロキさんのせいじゃ——」

「だから、今から——オレが落とし前をつけに行く」

それだけ言って、きびすを返す。ロキはケルビムとフレイを従え、アスラの後について、ゲート屋上に続く階段を上った。

先に立って案内しながら、アスラが状況を説明する。

「攻撃の手順は君に任せる。僕としては、一旦学院から離れ、折り返して加速、ゲートを越えたところで慣性飛行に切り替えるのがいいと思うが」

「オレもそのつもりだった。標的の感覚器はどのくらいだ？」

「音にはほとんど反応しない。あれだけ喚いていれば当然だけどね。ただし、視覚は相当に感度がいい。そこで敵の背面、駅側からの侵入を推奨する」

「わかった。外は——かなり暗いな。奴が鳥目ならありがたいんだが」

窓の外はすっかり夕闇に包まれている。間もなく日没だ。銃眼から吹き込む風は冷たく、体温が見る見る奪われてしまう。

屋上に出たところで、〈女帝〉ソーネチカが待っていた。

ソーネチカはちらりとロキを見やり、ケルビムを見やり、気のない調子で言った。

「〈剣帝〉は意外と紳士でしたのね」

「ふざけるな。オレは謙虚で寛大だが、どこかのバカみたいに女びいきじゃない」

誤解されたままでは気分が悪い。ロキはむきになって否定した。

「単純に成功確率の問題だ。あんたの人形、大蛇の断面は円筒形だが、ケルビムは平板に

なる。気流に立ててやれば、進路の微調整がきく」

「風で舵をとる……おつもりですの？」

「オレの故郷に波乗りという遊びがあった」

「フレイを振り向く。姉の脳裏にも浜辺の光景が浮かんだらしい。」

姉弟にとって、太陽も、塩水も、憎むべき敵ではなかった頃——

「よく浮き板で遊んだもんさ。大気の波とて、乗りこなして見せる」

ケルビムを見上げる。ケルビムは普段よりさらにぎこちない動きで、不思議そうに首を

傾げた。ユーモラスな動きを見て、ソーネチカがくすりと笑う。

そのとき、激しく両手を振りながら、アスラの仲間が城壁の上を駆けてきた。

「中止！ 中止だ！ 魔女が講堂から出てきた！」

アスラも、ソーネチカも、さすがにこのときばかりは青ざめた。

「こっちの動きを察したらしい。今行けば、防がれる！」

「……いや、問題ない。絶対に隙は生じる」

自分でも驚くくらい信頼に満ちた声が出る。ロキは苦笑してしまいながら、

「あいづらがいつまでも大人しくしているものか。必ず魔女を引き戻す」

「——準備を続けよう。続行だ」

アスラの指示が飛ぶ。すぐに続行の知らせが行き渡り、準備が再開された。

「う。私も、始める！」

フレイも動揺から立ち直り、一三頭のガラム犬を集め、何やら言い聞かせ始めた。その後ろ姿を眺め、アスラが申し訳なさそうにつぶやく。

「無音領域は城壁の上から構築することになった。もつと近付ければよかったんだが……敵の索敵範囲が想像以上に広がってね。欺瞞の魔術も使えない状況では……」

ガラムの魔術は音速で広がる。距離が近いほど短時間で効果が生じるのだが。

「姉貴、城壁の端から端までは相当遠いぞ。やれるか？」

「大丈夫。私はロキのお姉ちゃんだから」

「……そうか。そうだな」

やがて犬たちは一斉に尾を振って、城壁の上を走り出した。学院の全周は七キロを超す。急がなければ、間に合わない。フレイもラビにまたがり、走り去った。

ややあって、大講堂で爆発が起こった。

夕闇の中、閃光が飛び散る。途方もない魔力。力任せの運用だ。

誰かが突入を始めたのだ。息詰まる十数秒ののち、待望の声が上がった。

「魔女が戻った！ 鷲から離れたぞ！ 今なら行ける！」

ロキはケルビムとともに、城壁から市街側へと飛び降りた。

空中で変形させ、大剣に飛び乗る。扉の外は絶対王権の影響が弱い。大剣となったケルビムは《熱風操作》の推力を得て、一気に学院から遠ざかった。

眼下には警察や軍がいる。彼らはまだ解決の糸口すら見つけられていない。

彼らを足もとに見ながら、ロキは左半身を進行方向に向けた。左足で左右の舵を、右足で上下の舵をコントロールする、立ち乗りの姿勢だ。

ぐるりと学院を迂回して、飛行の感覚を確かめる。大丈夫、カンはずつついていない。

駅まで飛んで、くるりと反転。高度を下げ、飛行ルートを精確にイメージした。

呼吸を整え、精神集中——そして、心のスロットルを開けた。

一気に加速。風圧で息が詰まる。さらに加速。空気が重い。ゲートが迫る。

ここから上昇。ゆるやかな曲線を描き、ロキは城壁すれすれを越えた。

越えた一瞬、姉と視線が合う。

姉の頭をかすめるように学院へ。魔術を切り、慣性飛行に運命を委ねる。

ここからは、飛んできた道と、歩んできた道——過去を信じて飛ぶだけだ。

目が開けていられないほどの風圧で機体がブレる。だが、ロキの計算は間違っていない。

ケルビムが山なりに降下を始めた。

——見えた！

幕標のごとき（ロッカー）の屋上。鷲が翼を広げ、不快な叫びをあげている。

距離は一瞬で詰まる。いける、と思ったとき、鷲がこちらを見ているのに気付いた。

鷲の下肢に力がこもる。飛び立とうとしている！

（させるか！）

四角いシルエットのロッカーは、わずかながら上昇気流を生む。

時間にすればコンマ一秒もない。摩擦が増した一瞬に、ロキは大剣の進路を変えた。やはりコンマ数度もない微調整。反作用でケルビムから放り出され、ロキの体が宙を泳ぐ。ケルビムは驚に驚進し、その胴体をとらえた。

がいんつ、と金属的な音が響き、魔力の盾が驚を護る。

（魔術防壁——!?）

一瞬の交差ゆえ、精確に確認することはできない。だが、おそらく——
驚を護る防壁の魔術が、あらかじめセットされていたらしい。

何者かの狙撃、あるいは遠距離攻撃を、敵はしつかり予測していたのだ。

（それでも——こっちの勝ちだ！）

魔術防壁は驚を包み込んでいる。それは結界と同じで、内外の魔力伝導を阻む。あれを発動させた時点で、驚の叫びは外界への効力を失った。

代わって大気を満たす犬の遠吠え。仲間を呼び、意志を示し、想いを伝えるハーモニー。ガルム犬の（音圧操作）が支配の魔術を押し包み、その圧政を覆す。

作戦は成功した。唯一の問題は、ロキ自身が死ぬ寸前ということだ。

突風にもみくちゃにされ、木の葉のように体が回る。どちらが天で、どちらが地かを見失う——いわゆる空間識失調により、体勢が立て直せない。

何とか急動でブレーキをかけ、必死にケルビムを呼び戻そうとする。その甲斐もなく、砲弾のような速度で、ロキは校舎の壁に突っ込んだ。

ばしんっ、と空気が裂ける音がして、体が壁をすり抜けた。

予期した衝突は起こらない。つぶれたトマトみたいになると思ったが。

ゆっくりと速度が鈍る。気がつけば、誰かがロキの腕をつかみ、持ち上げていた。

ロキの頭上に、激しいスパークをまとう、青白い人影がある。

体の輪郭が判然とせず、バリバリと放電している。いや、むしろ全身が雷電になっていると言わなければならない。そしてロキ自身もまた、同じように雷電と化していた。

人影が空中を蹴る。転移に匹敵する速度で、二人は城壁に移動した。

電流が飛び散り、人影が本来の姿に戻る。それはもちろんアスラで、自動人形インドラもまた、いつもの甲冑姿で実体化した。

察するにこの人形——物質を雷に変換できるらしい。

その場に座り込んでしまいがら、ロキは強がつて皮肉を言った。

「……バカな奴だ。オレを助けるために、魔術の秘密を明かしてしまったな。ずっと隠していたんだらう？ 仲間たちにさえ」

「隠してはいない。教えなかっただけさ」

「なぜ使った？ 博愛主義か？ 同じ学生を見殺しにできなかったのか？」

「僕はそんな高潔な人間じゃない。……だが、君は高潔だった」

「高潔？ オレが？」

アスラはそっと、ロキに手を差し伸べた。

そうだ。観客には知らせず、秘密裏に流星を迎撃したと聞いている。

「あれに議会から物言いがついてな。隕石が直撃していたら、多数の死者を出していた。学院長には避難誘導する義務があったのではないかと」

「だが、観客の怪我人はゼロだろ。学院長の判断は正しかったんじゃないか——」

「それは結果論だ。なに、珍しいことではない。何にでもケチをつける奴はいるし、見ているだけの奴が一番偉そうな口をきくものさ。政治しかり、夜会の勝負しかり」

「じゃあ、学院長の判断が妥当だったかどうかを調べるために……?」

わざわざロンドンから派遣されてきた、というわけか。

「ああ。おかげで学院長は今朝から軟禁状態だ。しかし、あの狸親父のこと、すぐに復帰して、夜会も再開されるだろう。貴様は心配せず、一日も早く傷を癒やせ」

グリゼルダは軽く言ったが、雷真の胸には急速に不安が広がっていた。

ライコネンは軍の中將。学院の監査など、管轄外のはずだ。

……どうしても、黒太子エドマンドの影が脳裏にちらつく。

狂気の王子が、また何か仕掛けてきたのでは……?

ライコネンは情報部のエリート將校で、三期前の夜会を制した魔王だ。今の雷真では、逆立ちしたって倒せない相手だろう。

「……なあ、お師匠さま。《精霊術》っての、俺にもできないかな?」

雷真のつぶやきを聞いて、グリゼルダは笑い出した。

「君自身は認めないだらうけどね。だけど、ソーネチカやシャルロットの妹はそう思っているだろう。僕も彼女たちに賛同する。そして今——君は同志だ」

白い歯を見せて笑う。ロキはしばらくその笑顔を眺めていたが、否定するのもバカらしくなって、アスラの手をつかみ、引き起こしてもらった。

二人並んで、城壁から学院を見下ろす。

鷺はまだ健在だ。(ロツカー)の屋上で翼を広げているが、あいにく、その不愉快な歌はもう届かない。アスラは満足げに首を上下させた。

「(多重なる騒音)がやってくれたようだ。だけど、効果範囲が広すぎる。長引けば負担がかかるだろう。僕はあの鷺を沈黙させて、突入班に合流する」

「——いや、待て」

視界の隅を、ケルビムがよろめきながら飛んでくる。

目立った損傷はない。ロキは相棒を見下ろしながら、続きを言った。

「悪いが、あの鷺はオレに預けてくれ。あれは、この上もない餌になる」

「餌……と言ったのか？ 誰の——いや、何のための？」

「当然、落とし前をつけるためのさ」

ロキは醜薄な笑みを口元にたたえ、再び虚空に身を躍らせた。

私は何をしているのだろう、と火垂^{はたる}は思った。

髪をつかまれ、死体のように引きずられながら、ぼんやり闇を眺めている。

学院の地下空洞。ライコネンとその部下は、聖堂にほど近い地点にまで到達している。

部下は二人だけで、軍の機械犬が二頭、従っていた。

救援は、まだこない。

(……弱気になるな、火垂。マスターはきつときてくださる)

自分自身に言い聞かせる。だが、心はもうそんな言葉で静まらない。

初めは確信があった。けれど、それはいつしか期待になり、疑問になった。

だって、おかしい。地上に出たとき、マスターは私の位置をつかんだはず。

それなのに、なぜ——きてくださらない？

(疑うのか、火垂！ マスターを疑うのか！)

岩にドレスが引つかかり、腰のあたりが裂け、あの懐炉^{ぐあひ}がこぼれ落ちた。

反射的に手を伸ばす。だが、火垂がつかむ前に、懐炉に剣が突き立てられた。

中身を確かめようとしたのか。ライコネンが懐炉を割り、退屈そうに言った。

「……ただのガラクタだな。何の魔力もない」

その瞬間、火垂の中で何かが壊れた。

何かとても大切な、大事にしまっていたものが——壊されたような感覚。

魔力の炉心に火が入る。リミッターが外れ、正真正銘、最後の力がみなぎった。ライコネンの反応、そして判断は速い。とっさに火垂を放り出し、回避する。

火垂の体が灼熱し、拘束具がすべて弾け飛んだ。

「閣下！ 拘束が！」「こいつ、まだこんな力を——」

「下がっている」

部下たちを後退させ、ライコネンは火垂に指を向けた。

速すぎて対応できない。指先から炎の弾丸が飛び、ふとももを貫通した。

収束した火炎だ。それは大腿骨を砕き、血液を蒸発させた。さらに次弾が撃ち込まれる。

わきばらに、肩に、掌に穴をうがたれ、喉から悲鳴がほとばしった。

ゆっくり地面が近付いてくる。火垂はうつ伏せに倒れ、砂を噛んだ。

あまりにも、情けない。

何もできないまま、倒されるなんて……。

「大した耐久性だな。熱によく耐える。機体ごとに特性が違うのか？」

近付いてくるライコネンを、火垂は眼だけでにらんだ。

「おまえは……マスターの……敵……ですか？」

「マスターとは、誰のことだ？」

「――」

「おまえは譲渡されたのだ。おまえの主人は、もう俺だ」

「……くだらないことを！」

「おまえが知る必要などない——が、知った方が扱いやすいか？」

ふところからペンを取り出す。ヘッドに魔石が埋め込まれていて、どうやら魔具の一種らしい。ライコネンが軽く魔力を込めるだけで、音声^{いんごう}が再生された。

「これまで通りの研究を——否、これまで以上の研究を認めよう」

「ならば、異論はありません」

「取引に応じると？」

「ええ。戦隊を一体、差し出しましょう」

溶鉱炉にでも突き落とされたような気がした。

信じられない。だが、まぎれもなくこれは、マグナスの……主^{あるじ}の声だ。

助けがこなかった理由を、今になって悟る。

売られたんだ、私は！

「理解できたか？ おまえの所有権は、もう俺にある」

「物のように……っ！」

ブーツで踏まれる。硬い靴底と岩盤に挟まれ、頭骨が軋^{きし}みをあげた。

「モノでなければ、何だと言うんだ？」

「……………っ」

「兵器に過ぎぬ人形が、愛玩動物^{べんぶつ}くらいの価値はある——とでも思ったか？」

涙がにじむ。嗚咽おんげんすらあふれそうになって、火垂ほたるはますます自分を嫌悪した。

（情けないぞ、火垂……敵の手に落ち、何もできずに泣いているなど……）

これでは本当に、マスターの人形に相応あうかしくない。

研究室にあった、自動人形オートマトンの機巧骨格が思い浮かぶ。

そう——私の代わりなんて、いくらでもある。

こんな無能で、役立たずのガラクタなんて——いらないのだ。

こらえきれず、火垂は泣いた。倒れ伏し、踏まれたまま、しゃくり上げる。

「く……ひっ……う……く……っ」

「泣いているのか？ つくづく、薄気味の悪い人形だ」

背中に剣を突き刺し、乱暴に引き抜く。体内をズタズタにされ、動力系が破損した。

「くはっ……うううんっ！」

心臓の働きが急速に弱まる。火垂は『くたっ』と身を投げ出した。

意識が遠のいていく。今度目覚めるときには、おそらく記憶は初期化され、ライコネン

をマスターと呼んでいることだろう。

マグナスをマスターと呼ぶことは、二度とない。

それはきつと、死と同じことだ。

途切れがちな意識の中、火垂はマグナスに別れを告げる。

（今まで……ありがとうございます。どうか、お元気で……）

ふと、意地の悪い思考が浮かんだ。

私のことなんて——マスターはきつと、思い出してもくだらないな。

鈍い痛みが胸を貫き、ようやく、火垂は理解した。

ずっと抱いていた不満、いらだちの正体を把握する。

そうか……。私は、愛して欲しかったのだ。

あの雪月花のように、側に置いて欲しかった。

(私は……最期まで……浅ましい……な……)

惨めな気分で自嘲する。それが最後の処理タスク。稼働限界を超え、目の前が真っ暗になり、スリープモードに移行する——寸前。

懐かしい魔力が火垂を包み、沈みかけた意識を引き戻した。

熱が火垂の体に満ち、傷ついた皮膚の再生が始まる。

(この感じ……マスター?)

意識が鮮明になり、視界が戻る。そしてようやく、風景の異様に気付いた。

空間が鳴動している。凄まじい魔力が、大空洞を揺さぶっている！

そのくせ、それはあたたかく、火垂には優しいとさえ思えるのだ。

魔力をまき散らしながら、一歩ずつ歩いてくる者がいる。

それが誰かを認識し、火垂は自分の光学センサーが壊れたのだと思った。
こない——くるはずがない。

だって、理由がない。合理的な理由が、何一つ見当たらない。それなのに——

「よう、魔王陛下。夏以来だな」

赤羽雷真が、そこにいた。

顔見知りなのか、ライコネンは皮肉げに唇をゆがめ、気安く答えた。

「あのときの学生か。自由研究は完成したのか？」

「再提出を食らってね。レポート書き足すから、質問に答えてくれないか？」

「言ってみろ」

「あんた——俺の妹に何してくれてんだよ？」

ふっ、と雷真の姿が消えた。

一瞬後、ライコネンの頬に鉄拳がめり込み、ライコネンは炎となつてかわした。

再出現したときには、驚愕の表情になっている。彼や部下たちも驚いただろうが、火垂も驚いていた。目にしたものが信じられない。

空間を転移した？ 雷真が？ 雪月花の魔術にそんな効果はない。しかし、謎はすぐに

解ける。乙女が虚空から飛び出して、銀剣の一撃をライコネンに見舞ったからだ。

雪月花の一体、花の小紫。雷真の転移もどきも、彼女の欺瞞魔術によるものか。

ライコネンが銀剣をかわす。だが、かすった刃が上着を裂いた。



「——撃て！」

部下に号令を飛ばす。軍の機械犬が焼けた鉄杭を吐き出した。射線上には火垂もいる。雷真と小紫がかわせば、今度こそ火垂は破壊される——

が、あいにく、その可能性は塵ひとつほどもない。

火垂の前に黒い影が滑り込んでくる。それは乙女型自動人形、月の夜々。

鉄棒はめり込みもしない。量産品の攻撃魔術で、彼女に傷をつけることはできない。

むきになって連射する機械犬を、氷結した大気が一撃で粉々にした。

誰の仕業かと言えば、もちろん——雪のいろり。

いろりは火垂から目をそらし、そっけなく背を向けて、

「よく、耐えたな」

「——」

「もう泣かなくていい。後は、雷真殿に任せよ」

妹をねぎらうように、そう言ってくれたのだ。

泣かなくていいと言われたのに、涙があふれた。

自分だけ倒れているなど、納得がいかない。

火垂はよろめきながら立ち上がり、彼らと並んで、焼却の魔王と対峙した。



Chapter 7 夜天に開く金色の花

1

「これまで通りの研究を——否、これまで以上の研究を認めよう」

あのとき、ライコネンの甘い誘いに、マグナスは思案する素振りを見せた。だが、決断は速い。仮面越しに紅い瞳を向け、首肯した。

「ならば、異論はありません」

「取引に応じると？」

「ええ。戦隊を一体、差し出しましょう」

存外、あっさり了承する。ライコネンの第六感が違和感を訴えた。簡単すぎる。魔術師はとかく秘密主義、まして自作の自動人形を、こうも簡単に手放すはずがない。

案の定、マグナスは「ただし」と続けた。

「差し出す機体は火垂です。あいにく今は、手元にない」

ライコネンはマグナスの背後を見た。控える乙女たちは五体。確かに一体、足りない。欠けているのは、例の『ピンク髪』——エドマンド所望の一枚か。



「言うと思ったよ。貴様という奴は、魔術と女には貪欲だからな」

「後ろのは違う！」

「精霊は視えるのか？ 生き物の形に視えるか、ということだが」

「いや……式神くらいハッキリしてりや、わかるけど」

「では、無理だ。——らしくないぞ。何を悩む？」

「これでけっこう、悩みは深い方だぜ？」

苦笑を返すのが精一杯だ。グリゼルダは思いのほか優しい声で言った。

「臆するな。相手がどんな魔術を使おうと、私と貴様にはそれを破る術がある」

収束させた魔力の〈糸〉で相手の魔術を乱してやればいいのだ。だが……。

「あれは格下の相手にしか通じねえ。まして、〈戦隊〉には当てられない」

戦隊の一体、鎌切は空間転移の魔術を使う。雷真自身が狙われた場合は別として、混戦の中で位置を精確にとらえるのは不可能だ。

ましてマグナスは、まだすべての手札をさらしてはいない。

「目で見てからやったんじゃ、とても間に合わねえ」

「なら、前もって悟るしかあるまいよ。チェスと同じことだ。敵の動き、その意図、陣容がわかっていれば、初見の奇手にも対応できる」

「簡単に言ってくれるなよ。マグナスは俺の予測も第六感も上回る」

「それは貴様が目を瞑っているからだ」

「その機体はどこにある」

「〈愚者の聖堂〉に。やがて地を砕き、上がってくるものと思います」

「こちらで勝手に鹵獲すればいいのか？」

「可能であれば。ですが、鹵獲後、ある男が奪いにくるでしょう」

「——意味がわかりかねるな。この魔王に挑んでくると？」

マグナスはただ淡々と、感情の感じられない声で言った。

「その男の手から火垂を護り切れるなら、どうぞお持ちください。俺の戦隊を」

「……造作もない。後は勝手にやらせてもらおう」

マグナスの表情に変化はない。ただ、紅い瞳が妖しく輝いていた。

2

魔女アストリッドの胸に、弾けるような愉悦が込み上げた。

（この昂奮、こたえられぬ！　じゃから戦争はやめられぬ！）

敵は見事に形勢を逆転した。魔女の手元には爆裂寸前の〈金の林檎〉がある——ものの、

ラザフォードが自由を取り戻した今、とても有利とはいえない。

魔王グリゼルダの奮闘も見事だったが、拘束を脱したラザフォードも見事。

「……、……………」

二人に賞賛の言葉を与えたつもりだったが、声が出なかった。

——違う。耳が聞こえないのだ。

音が消された不自然な静けさの中、唐突に天井が砕けた。

学生十数名が一気呵成に突入してくる。先陣を切るのは鋼の大蛇。場違いなほど優雅に、女子学生が横座りしている。

大蛇はこちらの魔術師を蹴き捨て、またたく間に戦場の主導権を握った。

彼女に続き、それぞれの自動人形が魔術を起動する。雷撃や烈風、溶解液に酸化液——量産品とはひと味違う、多様な攻撃魔術が飛んできた。

手練ぞろいの黒コートたちも、聴覚を封じられて対応が遅れた。他方、学生はしきりにハンドサインをかわし、統制の取れた動きで魔術師を追い詰めていく。

なぜ学生が魔術を使えるのか。なぜ絶対王権が効かないのか。

聴覚が回復し、戦闘音が戻ってくる頃、魔女にも事態が理解できた。

どうやら、ローレライの魔術が封じられている。支配の歌が聴こえない。

激しい戦闘音の中、不思議と通る声で、ラザフォードが言った。

「貴女の負け、のようですね」

「……まだ人質がおるぞ？」

「人質——はて、どなたのことをおっしゃっているのです？」

芝居がかった仕草で教壇に目をやる。先刻までと同様、そこには教授陣がいた。

だが、拘束はすべて解かれ——代わりに自動人形オートマトンを従えている。全員が戦える状態だ。眩惑グレンクの魔術で擬装し、脱出の準備を整えていたか。

眩惑はアリスの仕業だろうか？　いつの間にか従者シンに抱かれ、不敵に笑っている。失血で動けないようだが、表情は父親同様、ふてぶてしい。

ラザフォードは魔本レメゲトンに触れながら、鷹揚おうように魔女を見た。

「やはり今回も貴女あなたの負けですな。連勝してすみません、アストリッドさま」
「謝っても可愛くないわえ」

「私もいい年の男、可愛い必要はありますまい。さあ、その林檎りんごをこちらに」
魔女はべろつと舌を出し、獅子いしのたてがみを撫なでた。

「出直すわえ。では、ラザフォード。不愉快な小僧よ」

「……やむを得ませんな。薔薇ばらの方々にも、どうぞよろしくお伝えください」

「いや、それには及ばぬよ。薔薇はいずれも立ち枯れる」

ラザフォードの眉が跳ね、教授陣の表情が凍りついた。

異変を感じて、学生たちが次々に攻撃をやめる。

不穏な静けさが満ちた講堂に、魔女の言葉は朗々と響き渡った。

「構造はシンプルなほどよい——ぬしの持論じやったな？」

「……先日、また二輪、薔薇が枯れたそうですね」

「ふふつ、誰だれの仕業かは知らぬが。大輪の薔薇は一輪、二輪でよい。世界大戦の引き金

を引くのはこのわし——金薔薇よ」

はつきりと衝撃が走る。

彼らの動揺が手に取るようにわかり、魔女の心を再び愉悅が満ちた。

結社は有史以来、時の権力を傀儡のように操ってきた。

良くも悪くも、それは影に潜むもの。決して表舞台には現れない。幹部たる薔薇は支援

者の利益を代表する存在であり、それゆえに破滅的な所業はしなかった。当然、無秩序な

世界大戦など妨害する立場だ。——これまでは。

魔女は巽然と微笑み、熟れた林檎に頬擦りした。

「この地上は変革を迫られておるのよ。世界の構造がいかなる姿に変貌するか……楽しみ

じやの。刮目して待つがよい」

ラザフォードが魔力を飛ばし、自動人形アスタロトが大量の瘴気を放った。瘴気は魔女

のそれを上回る威力を秘めた、怨霊のごとき腐毒となる。

だが、当たらない。魔女は獅子の魔術を使い、現れたとき同様、一瞬で消え失せた。

外れた腐毒が床に当たり、どろどろと床板を溶かす。

魔女の鮮やかな消えつぷりを、グリゼルダは茫然自失のていで見送った。

「ラザフォード。爆裂まで、もう一〇分ないぞ」

パーシヴァル教授の警告で、全員が我に返る。

「林檎が炸裂すれば、学院は終わりだ。すべての施設がもたん。……どうする？」
問われたラザフォードのこめかみを汗が伝った。グリゼルダはもちろん、教授陣も学生も、全員が哑然とした。まさか、この男が冷や汗をかくなど！

「……学生諸君は全力で退避したまえ。可能な限り、遠くへ行くのだ。教授陣は」
殷々と響く声で、ラザフォードは叫んだ。

「林檎を見つけ出し、魔女ともども消滅させろ！」

3

時間の流れが停滞した世界を、魔女はゆったりと歩いていた。

魔女と獅子のほか、動く者がいない、静かな世界だ。

対抗魔術が用意されている可能性も考えていたが、ラザフォードの追撃はない。若干の失望を覚えつつ、林檎を大事に抱えて、獅子とともに「ロッカー」へ向かう。

獅子の魔術は便利だが、大魔術だけに長時間の維持ができない。頻繁にオンオフを切り替えながら、魔女は学院の最重要区画、ロッカーの手前までやってきた。

先ほど、このあたりでローレライの歌が止まった。

堅固な自動防衛を仕込んでおいたが、破壊された可能性もある。あれは貴重な自動人形。王立機巧学院でさえ、やすやすと制圧できる機体だ。仮に本体が破壊されたのなら、魔術

回路を回収しなければならない。

驚は翼を断ち切れ、大地に這いつくばっていた。

翼には溶断された痕跡がある。かなりの高熱にさらされたようだ。

（何と……セトの《断空鎧壁》を貫きよるとは……！）

発動のたび、生贄四人ぶんの瘴気を消費する。これを貫くのは容易なことではない。

それだけの一撃を繰り出しながら——なぜ敵はローレライを破壊していない？

魔女の予感が、恐るべき危険の接近を察知した。

まばゆい閃光が飛んでくる。まさに濁流。のみ込まれる！

とっさの判断で瘴気をまく。瘴気と閃光が激突し、さらに強烈な光芒を放った。

光に焼かれて視界がゼロになる。が、魔女の感覚はもう敵の姿をとらえていた。

「ブリューの娘——と、先ほどの小僧じゃな？」

妖精のごとき美貌の少女と、真珠色の髪少年が、魔女を扶んで立っている。

シャルはシグムントを腕にとまらせ、たぎるような怒りをぶつけてきた。

「ウェストン先生の言った通りね。けちんぼの魔女は、必ず宝物を取りにくる——って。

これだけやって、ただで帰れると思ってるの？」

「思っておるわえ」

「なら、その認識を改めなさい！ ラスターフレア！」

散弾のように光が飛ぶ。アストリッドは瘴気で応戦した。

魔劍の散弾は一発一発が大砲のように重い。それでも、魔女の瘴気の方が勝る。

あつさり力負けして、シャルの顔が引きつった。美しい顔を腐毒が包む——前に、高熱の噴射が腐毒の霧を吹き飛ばす。

ロキの機械天使がブレードをふるい、シャルの身を護ったようだ。

「真正面からやるな。恐竜バカが」

「わ、わかつてるわよ！ 上から言わないで！」

言い返してから、ちよつと反省した顔をする。

「今さらだけど、協力してくれて、ありがと。おかげで魔女をぶっ飛ばせるわ」

「……おまえに礼を言われると、悪寒が走るな」

「どうしてよ！ みんなして何なのよ！」

「自業自得だ。そもそも、礼を言われる筋合いはない」

ロキの表情が陰しくなり、憎悪と憤怒が魔力とともに発散された。

「オレが勝手に、あの魔女を殺したいだけだ」

「ふふつ、黙っておれば帰るものを……蛮勇じやのー」

右手を向け、大量の瘴気をまき散らす。霧は渦を巻き、全方位から押し寄せた。

ロキの反応が遅れる。魔術の使用を躊躇したようだ。それもそのはず、先ほどのように熱風を使えば、反対側から瘴気が入る理屈だ。もう逃げ場はない——

いきなりつむじ風が巻き起こり、内側から瘴気を受け止めた。

いつの間にか、風の精霊が集結している。シャルが驚き、誰にともなく叫んだ。

「ロツテ!? 戻ったの?」

……返事はない。だが、魔女の鋭敏な感覚が、シャルの中にもう一人の気配を感じ取った。シャルそっくりの精霊が、歯を食いしばって耐えている。

風が瘴氣を押し返す。切れ目が生まれた瞬間に、シャルは魔力をみなぎらせた。

「ラストーカノン!」

大砲を撃つ。だが、魔女にも獅子にも林檎にも、魔剣の光は当たらなかった。

魔女は時間を停め、静止した世界をとことこ歩き、作業的にシャルの背後に回った。

爪に魔力を蓄え、狙いをつけてから、時間の流れを元に戻す。

仕留めた、と思った瞬間、頭上から光が降ってきた。

魔女は瞠目した。先刻の大砲が次々に角度を変え、上から襲いかかった!

これはかわせない。瘴氣で滅元素を散らし、急いでシャルから距離を取る。

シャルはゆっくり振り返り、十代の少女とは思えない、自信に満ちた眼を向けた。

「なめないで。ブリュウの魔剣使いに、同じ手が何度も通じると思うの?」

ケルビムで瘴氣を吹き飛ばしながら、ロキがあきれ顔でつぶやいた。

「大きく出るようになったな、(暴竜)。精霊術を得た途端に!」

「茶化さないでロキ! 泣くわよ!」

そのロキの後ろにそそっと回り、シャルは早口でささやいた。

「ロキ、私に時間を頂戴」

「——当てられるのか？」

「学院はとくに焼け野原よ。今さら消し飛ばしても、問題ないわよね？」

「——なるほど。わかった」

内緒話のつもりだろうが、魔女にも意図が筒抜けだ。オルガを倒したという、例の特大ラスターカノンをぶっ放すつもりだろう。

よもや仕留められることもなからうが——やらせる必要もない。

「のう、ブリュウの娘。おまえ、わしの養女にならぬかえ？」

シャルの足が止まる。ロキが体を入れ、シャルを追い立てるように言った。

「耳を貸すな。準備にかかれ」

「わしは金薔薇、結社の大幹部じゃ。そしておまえの母は、我が師団の手にある」

「——！」

「母の命が惜しかろう？ おまえがわしの養女となるなら、あのいけ好かない薔薇たちに頭を下げてやつてもよい。おまえの母を返してやれとな」

「聞くな、（テラックス）——シャルロット！」

「わからぬか？ 救ってやる、と言うておるのじゃ」

シャルが立ち尽くす。もうひと押しすれば……。

というところで、機械天使が突っ込んできた。超高圧の熱風を駆使して、地表すれすれ

を飛び、高速でブレードを叩きつけてくる。

「おまえは邪魔じゃ」

時間を停めてかわしざま、ケルビムの腕をつかむ。そのまま時間の流れを戻すと、金属の腕が折れ、ラバー状のシーリングが裂けて、シリンダーがねじ切れた。

ロキは舌打ちして——ケルビムを下がらせた。

力量差を悟ったか。そのまま反転、一瞬で遠ざかる。

人形ともども逃走する。あまりにあつけない退却に、アストリッドは仰天した。

「何と……逃げよったわえー とんだ臆抜けじゃー」

追いかける気もしない。魔女はロキには興味を失い、シャルに向き直った。

「女を置いて行くとは、男の風上にも置けぬ奴じゃのう？ 娘、おまえの方がよほど立派

じゃぞ。じゃから、わしの養女になれ、な？」

シャルはロキを見送り、落胆したようにため息をついた。そして——

「……悪くない話ね」

と言ったのだ。

4

打たれた頬に手を触れ、ライコネンはわずかに口元をゆるめた。

「——え？」

「話の続きは明日にしよう。私は先生——ライコネンの動きを探りたい」
グリゼルダは長椅子から立ち上がり、そっと雷真の肩に手を置いた。

「明日に備えて、少しでも魔力を取り戻しておけ」

フリフリのスカートをひるがえし、去っていく。

気がつけば、ライコネンの姿も見えなくなっていた。

雷真は廊下に立ち尽くし、奥歯を噛んだ。

マグナスの——天全の背中^{てんぜん}は遠い。仇^{かたき}のことだけでも頭が痛いのに、わけのわからない

連中が夜会を妨害しようとしている。

（こんな状態で、俺はたどりつけるのか……あいつに！）

前回痛めた肩をつかみ、ひとり苦悩していると。

「ここは抜かせません！ 日輪^{ひのわ}さんは帰ってください！」

「いいえ参ります！ 土門^{どもん}日輪、まかり通ります！」

廊下の向こうから、少女二人が張り合いながら駆けてきた。

どちらも和装。一人は相棒で、もう一人は許婚^{いふぐん}だった。

「何騒いでんだ、おまえら……。ここは病院だぞ？」

「えっ、雷真!?」

夜々^{やや}が気を取られた隙^{すき}に、日輪は素早く式神を呼び出した。黒い絨毯^{じゅうたん}のような式神——

(……認めざるを得ないな。己が認識の甘さを)

黒太子エドマンドが《神酒》を使つてなお、倒せなかった小僧――

あれは、エドマンドの慢心、戯心ばかりが理由ではなかった。

こうして向き合つていればわかる。雷真の魔力は底知れない。まとう気配は人間よりも精霊に近く、瞳はかすかに紅みを帯びていて、魔性の血統を感じさせた。

右腕に紅く紋様が走り、指先からは収束した魔力の糸が伸びている。糸は彼を取り巻く乙女たち――いろいろ、小紫、そして夜々に莫大な力を供給していた。

(三体を同時に使うつもりか？ それだけの技量が既にあると……?)

馬鹿な、と思いながら、一笑に付すことはできない。マグナスにはそれができるのだし、この小僧はその血縁かもしれないのだ。

「……いかがされますか、閣下？」

とつくに退け腰の部下たちに、ライコネンは冷たく告げる。

「下がれと言つた。射程外に退避しろ。後輩の相手は俺がする」

それを聞いて、雷真が皮肉げに笑つた。

「OBが後輩いびりなんぞ、大人げねえな」

「魔王がじきじきに指導してやろうと言うんだ。――感謝しろ」

フリスヴェルグの魔術を使い、自らの肉体を炎に変換する。

夜々が身を硬くした。その夜々を、意外なほどの余裕を見せて、雷真が励ます。

「心配するな、俺がついてる。合図したら頼むぜ。三、二……後ろだ！」

夜々が真後ろを蹴り上げる。かかとがライコネンをかすり、前髪が数本切れた。

転移後の出現位置を読まれていた——いや、感知されたのか！

驚愕しつつ、斬りつける。火炎の噴射を応用し、加速をつけた一撃だ。夜々は金剛力でブロックしたが、衝撃が爆風を生み、夜々の体勢が乱れた。

「いろり！」

とつくに魔力は渡っている。一帯の水蒸気が瞬時に氷結した。

ライコネンが巨大な氷の棺に閉じ込められる。驚異的な攻撃能力——だが、魔王を倒すには至らない。氷の棺の内側で、灼熱の炎が閃き、氷塊が弾け飛んだ。

「いいぞ、いろり。どんどん行け！」

「はい！」

いろりが袖を振り、矢継ぎ早に冷気を放つ。冷気は空中で短槍となり、次々に向かってきた。ライコネンはかわし、あるいは剣で砕き、炎をぶつけて破壊する。

蒸気が立ち込め、視界が悪くなった——その一瞬に。

予期もせず、察しもしない、不意の斬撃がきた。

夏に戦ったときと同じ、完全幻覚を使った奇襲だ。気配もへったくれない。虚空から現れた銀剣が、ライコネンの背中を裂く。

「変移抜刀、かすみ斬り——なんちて！」

銀剣を携えた乙女が、茶目つ気たつぷりに舌を出す。おどけてはいるが、瞳には決死の覚悟が見て取れた。仇に向けるような、烈しい眼差しをぶつけてくる。

ライコネンは後方へ転移し、鉄の臭いに顔をしかめた。

（背中を斬られた——俺が？）

この焼却の魔王に、反応速度で勝ったというのか？

——いや、違う。速度で勝ったのではなく、こちらの速度を鈍らせた。

「あの瞬間……俺の動きを妨げたな？」

雷真は荒い息をつきながら、自分の右腕をつかんで答えた。

「ご名答。手品のタネはこいつ——あんたの弟子、俺の師匠が施してくれた」

あの一瞬、魔力の糸をライコネンにぶつけ、魔力循環系を乱したらしい。

（皮肉だな。俺たちが血眼になって求めたものが、小僧に力を与えたとは）

今の攻防だけでわかる。雷真がどれほど力をつけたのか。

先刻、小紫が斬りつけるのに合わせて、雷真はライコネンに糸を放った。その小紫は、天眼すら効かない完全な隠形で身を潜まっていた。

その前に夜々の脚力を見せている。こちらが接近戦を嫌う状況をつくった上で、いろいろの魔術を連発、小紫の問合いへと追い立てた。

複数の魔術を使い、詰め将棋のようにこちらを追い詰める。かつての雷真ならば、ここまで複雑な魔術運用はできなかったはずだ。



禁忌人形の自律性に丸投げしているのとは違う、完全な集団戦闘。三体の正確な位置、動きをつかんで、適切な魔力を送り込んでいる。

火垂も呆然と雷真を見つめていた。戦隊と同じ運用法だと気付いたようだ。

「正直、驚嘆している」

背中の傷に触れながら、ライコネンは率直な感想を述べた。

「夏とは別人——別の怪物だ。この短期間に、階梯を二段も三段も跳び越えた」

「俺は無知で無学で無才だが、師匠や教師、相棒たちが優秀でね」

（無才なものか。この小僧、ずば抜けた素質を秘めている。あるいは俺やゼルダ以上に才能が開花すれば、間違いなく……陛下の覇道を阻む！）

銀剣を逆手に構えた小紫、抜け目なく冷気を蓄えるいろり、主のとなりで不動の構えを見せる夜々——三体に視線をすべらせ、ライコネンは戦況を分析した。

この状況、やや不利か。何と言っても、数で負けている。

（どうする……？）

ライコネンが結論を出す前に、雷真が魔力を高めた。

いろりの銀髪が扇のように広がり、ダイヤモンドダストの輝きが散る。

「閑ころし——風花」

吐く息が白くなる。刹那、そこは酷寒の地獄となった。

きらきらと光の花を咲かせながら、圧倒的な冷気が押し寄せてくる。

ライコネンはもう転移せず、こちらも爆炎で対抗した。

炎と氷が激しくせめぎ合う。両者の激突で砂が砕け、魔鉱の地面が熱膨張で亀裂を刻む。雷真は必死に歯を食いしばり、魔力の糸を夜々に伸ばした。

（——くる！）

思った通り、夜々が距離を詰めてきた。そして、その姿が——唐突に消える。

八重霞か。《魔活性不協和の原理》により、金剛力との併用はできない。一時的に金剛力は効果を失っている……はずだ。

だが、手は抜かない。結論から言えば、その判断は正しかった。

夜々はまったく減速せず、強烈な蹴りを繰り出した。姿は見えないままだが、衝撃波で炎が割れ、位置が知れる。

念動の盾が間に合う。盾ごと蹴飛ばされ、ライコネンは宙に舞った。

夜々が追いつがってくる。小紫も追撃を準備しているはずだ。連中を接近させてはいけない——ライコネンは魔力を練り上げ、全方位に火炎を叩きつけた。

夜々と小紫、二人の隠形が解け、地面に叩きつけられる。

がくん、と雷真の魔力が減り、冷気がゆるんだ。

ライコネンは内心で笑う。あの出力で三体を操れば、魔力が尽きて当然だ。

やはり年季が違う。持久戦に持ち込めば、封殺できる！

ここが好機と見て、ライコネンは魔力を全開にした。

空中に陣取ったまま、両手を雷真らいしんに向け、火炎を送り込む。いつしか火炎は魔神フリスヴェルグとなり、術者とそっくり同じ姿勢で、紅蓮くろくろの炎を眼下に叩きつけていた。

しかし——この期に及んでなお、ライコネンに油断はなかった。

このまま倒させてくれるほど、この敵は甘くない。

必ず何か仕掛けてくる。それができるのは——小紫こむらさきだ。

思考力を加速させ、八重霞の本質を探る。

あの魔術には眩惑げんかく効果がある。それは夏に、シェフィールド近郊で体験している。

(魔王マウジンの感覚を欺くなど、普通ではあり得ない)

魔活性不協和の原理は人間にも適用される。たとえ眩惑をかけられても、ライコネンが

自らに炎の魔術を使えば、眩惑は効果を失うはずだ。が、現実にはそうはならなかった。

眩惑された状態でライコネンは転移を使っている。

そもそも、八重霞は誰にかける魔術なのだろう？

単純に姿を隠したいときは、自分たちにかけていたようだ。

相手が受け入れていれば、ほかの対象物——敵にも——かかるだろう。

だが、今はそのどちらでもない。自分たちではなく、敵でもない。

(そうか——これは——イカロスの空間歪曲と同じ——)

キンバリーも、グリゼルダも、ラザフォードさえも、完全には見抜いていない八重霞の

本質を、ライコネンは戦いの中で掌握した。

存在しないものを見せられていたのではない。八重霞の眩惑を受けたとき、音が本来とは別の方向から聞こえ、姿が本来とは違う場所に見えていたのだ。気配はあり得ないほど遠くに。味覚や嗅覚には血の風味が混ざり、触覚は激しい異物感に侵されて激痛となり、あるいは触れた感じがしなくなった。

あれはすべて、ありもしない幻覚などではなく――

「賢気様――」
「遅え！」

声と同時に衝撃がきた。いつの間にか頭上に雷真が出現している。振り下ろされた蹴りは予想外に重い。ライコネンは大人しく蹴り落とされ、空中で炎化した。

炎にまぎれて脚から着地。そのときにはもう、夜々が迫っていた。

稲妻のような蹴りが、男の頭部を弾き飛ばす。

ほとんど墜落するような勢いで、雷真が歪んだ魔鉞に降り立った。

「……お気の毒だぜ、魔王さま。もう一秒早く、気付いてりゃよかったな」

炎が消え、冷気が失せ、蒸気の霧が晴れる。

小紫が虚空から飛び出してきて、雷真に飛びついた。夜々がヤキモチを焼き、いろりが火垂に手を貸した――まさにそのとき。

「そうだな」

と、雷真の耳元でライコネンがささやいた。

いろいろも、小紫も、夜々も、誰も反応できない。

既にライコネンの人差し指が、雷真の肩に第一関節までめり込んでいる。

「もう一秒早く気付いていればよかった。俺に見抜かれたことに」

瞬間、燃焼。自らを炎と化して、一部を雷真の体内に流し込む。

雷真を燃やしながら、ライコネンは夜々の背後、倒れた男に視線を向けた。

先ほど頭を蹴飛ばされたのは、何の役にも立たなかった部下だ。着地の前に転移でさらに、身代わりとして置いた疑似餌にすぎない。

（おまえの武功だ。感謝するぞ——名は聞きそびれたな）

感慨はない。チェスの名手でもあるライコネンは、駒の捨てどころを間違えない。

もがく雷真に向き直り、さらに火力を引き上げた。

5

悪くない話ね、というシャルの返事を聞いて、魔女は気色を浮かべた。

「じゃろ？ おまえの父母も喜ぶわえ——」

「そんな話に、たとえ一瞬でも心が動いた自分を恥じるわ」

「……父母の命はいらんのか？」

「おあいにく。私は女王陛下から一角獣の紋章を賜った、プリュー伯爵家のシャルロット

——信じてくれる友達を裏切りはしないわ！」

「その口ぶり、イライザを思い出しておぞ気がするわえ……。じゃが、気骨に感じぬわけでもない。オルガよりよほど使い度がありそうじゃ」

魔女の顔に嫌悪がにじんだ。紅い林檎りんごを握りしめ、いまいましげに言う。

「あれの母親がまた使えぬ女での……。まあ、オルガを生んだことでよしとしたが。ふむ、終わってみれば、裏切り者のオルガより役に立ったな」

ぞく、と悪寒が走る。その先を聞きたくないと思ったのに——訊いてしまう。

「オルガのお母さまは……どうしたの？」

「そこに転がっておるわえ」

示す先には、半壊して身動きも取れない、鷲型自動人形わしオートマトンの姿があった。

翼を断ち切られ、胴体を割られた鷲。その腹部にあるのは、女性の上半身——意味を理解した瞬間、シャルの脳裏が真っ白になった。

えっ……子どもを？ 自分の子どもを？

そんなふうに使って……生んで——捨てた？

シャルの体の奥底から、勝手に魔力が噴き出してきた。

勝手にあふれ出した魔力が、勝手に精霊を引き寄せて、勝手にかまいたちを生む。

勝手に起動した精霊術精霊魔法は、シャルの魔力を根こそぎ奪った。強烈な睡魔が襲ってくる。

飛びそうになる意識を必死に引き戻し、シャルは魔術の負荷に耐えた。

「閻土里」に潜り、一瞬後、雷真の足もとから飛び出してくる。

高等魔術の空間転移だ。日輪は雷真の前で、にこっと麗しく微笑んだ。

「お加減はいかがですか、雷真さま」

「まあまあだ。何か用か？」

「用がなくて……雷真さまに会いにきてはいけないのですか……っ？」

大きな瞳がたちまち潤む。

「あつ、すまん、泣くな！」

「いけないです。雷真は休まなくちゃならないんです。日輪さんは迷惑です！」

「やめろ夜々。せつかく見舞いにきてくれたんだ」

「雷真~~~~~っ、女狐には甘い顔を~~~~~っ」

「首を絞めるな！ 俺は休まなくちゃならないんだろ!?」

夜々ときやあぎやあ言い合っていると、日輪が言いにくそうに切り出した。

「用件は……ございます。実は……暇乞いに参りました」

「暇乞い？ 日本に帰るのか？」

「えっ!? そうではありません！ ただ、品と六連の看病をしたくて……」

日輪はうつむき、神妙な声でつぶやいた。

「二人は先の戦いで深手を負い、いまだ入院中……なるべく側にいて、看病したいのです。

もちろん、わたくしなど、さして役には立たないのですけど」

竜巻が荒れ狂い、焼けた樹木を文字通り木っ端微塵にする。

完全に魔女をとらえていたはずだが、竜巻はかすりもしなかった。

獅子と一緒に、まったく違う場所に現れる。……本当にデタラメな魔術だ。あらかじめ

射線を読んでかわしたのではなく、確実に命中する局面から回避した。

悔しい。無力感で震えるシャルの腕で、シグムントが口を開いた。

「その獅子、〈万物流転〉だな」

一瞬、魔女の顔色が変わったように見えた。

気のせいかな。魔女はそれまでと同様、楽しげに笑った。

「相変わらず頓狂な竜よ。あれはセトの秘法、儀式もなしに使えるものか」

「貴女ほどの魔術師ならば、使えてもおかしくはない。魔術は限定要因が多いほど性能を増す——発動条件を厳しくすれば、高度な術も低負荷で運用できる」

機能の一部のみを使い、ハードな条件を課しているのなら、あるいは……？

「何より、わざわざ否定したのがその証拠だ」

魔女は応えない。シャルは急いで発動条件を探った。条件さえ崩せば、勝機はある！

万物流転が噂通りのものなら、時間制御魔術だ。ならば、魔女は時間の流れを遅滞させ、こちらの死角に回った……と考えられる。

なぜ、死角にこだわるのか。当然、こちらの対応を遅らせるためだろう。

なぜ、時間を停めたまま攻撃しない？ そうすれば、反撃も回避も不可能なのに。

そもそも、時間が停まった世界とは、どんな世界だろう？

空気は動くのか？ 呼吸はできるのか？ 光速度は——不変か？

疑問ばかりで思考がまとまらない。その隙に、獅子が飛びかかってきた。

雷真やロキと違い、シャルの運動能力は人並みだ。かわしきれない！

食い殺されると思ったが、誰かがシャルを突き飛ばし、助けてくれた。

「ロツテ——!?」

自分そっくりの少女が像を結んでいる。その機を逃す魔女ではない。またしても時間を停めたのか、魔女は一瞬でロツテに迫り、その胸を爪で破った。

ロツテの体が、砕けた鏡のように砕け散る。

「ふふ……これで精霊術は使えぬ。振り出しに戻ったの？」

いやみったらしく微笑み、アストリッドはシャルをのぞき込んだ。

「今一度、問おうな。わしの養女にならぬかえ？」

万事休す。もう魔力もない。シャルは顔を伏せ、弱々しくたずねた。

「ひとつ……教えて」

「言うてみよ」

「ライコネンさまは、貴女たちの仲間なのよね？ どうして……敵対したの？」

「仲間ではない。あれと王子はわしの養子よ」

「——！」

「部下に襲わせたのはなぜかな？　それはもっと簡単なことじゃ」

大勢の部下を失ったのに、口調には嘆きも怒りもない。

魔女はにっこり微笑んで、シャルが思った通りのことを言った。

「こちらの損害が皆無では、いかにも嘘っぱい。養子の暗れ舞台じゃぞ？」

あの魔術師たちは、英雄ライコネンのために用意された——（悪役）だ！

真正正銘、本当の捨て駒。この魔女は、部下を騙して戦死させたのだ……。

シャルは魔女から視線を外し、抑揚の消えた声で言った。

「貴女の養女だなんてごめんだわ。……貴女とは、同じ空気を吸いたくないから」

「そうか。ではの」

どつと瘴気が押し寄せてくる。シャルは目を閉じ、死の訪れを待った。

「……………」

何も起こらない。怪訝に思っ振り向くと、ハカマ姿の乙女がシャルを護っていた。

「シャルロットさまは……わたくしたちが護ります！」

「ヒノワ——」

ずらりと並ぶ壁妖怪。シャルと魔女を中心に、一帯を隙間なく取り囲んでいる。

アリスが仕掛けた結界とは違い、ほぼ一瞬で出現した。シャルも中にいたために、魔女

も閉じ込められるとは思わなかったか。

のみならず、魔女の左腕が腐り落ち、謎めいた林檎が消えている。誰かが横槍を入れた

らしい。その激痛が、魔女の判断を鈍らせたようだ。

「いい時間稼いだっただぞ、シャルロット」

頭上から声が降ってくる。壁妖怪の高さは十メートルほどもあり、上に行くほど幅が狭い。あいているのは頭上の一点だけで、そこにロキの顔がのぞいていた。

式神の上に立ち、大剣をこちらに向けている。

切っ先を短剣が取り囲み、猛烈な熱を溜め込んでいた。薔薇の花のようなシルエット。金色に輝く大輪の花は、熱で描いたイリュージョンだ。

「時間を停める魔術だつてな。魔女よ、せいせい——停めてみる！」

皮肉げな笑みをひとつ。ロキが魔術の引き金をひく。

日輪が式神（間土里）を使い、シャルを外へと運び出す。刹那、万物を灰燼に帰すような、凄まじい熱量が解放された。超高熱を収束させ、前方に撃ち出したらしい。軍が研究中の熱線兵器と理屈が同じで、シャルの特ダスターカノンにも似ている。

（あんな技、いつの間に……！）

ざらつく熱線が式神のドームを満たす。あれでは、時間を停めても逃げ場がない！

ぶくぶくつと式神が風船のように膨らみ、そして破裂した。

爆風が全方位に飛び、堅牢なロッカーの外壁を揺さぶる。シャルと日輪は地面に伏せ、ロキでさえ風にあおられ、なぎ倒された。

やがて煙が晴れたとき、そこにはもう、誰の姿もなかった。

魔女は跡形もなく消えた。獅子も、鷲も、見当たらない。

「今度こそ……やったのかしら？」

ロキは警戒を解かず、あたりに視線を走らせた。

「……やれていなければ、倒す手段がない。(魔姫)、おまえの感覚で追えないか？」

「いえ……気配はありません。どこにも！」

嬉しそうに告げる。それを聞いて、シャルの肩から力が抜けた。

思い出したように睡魔が押し寄せてくる。もう魔力がからっぽなのだ。

目を回すシャルに、ロキが近付いてきた。珍しく心配してくれたのか、

「無事のような。やられたのは守護精霊だけか？」

「……逃げたんじゃなかったの？」

「逃げるまでもない相手だ。それに——」

言いにくそうに、そっぽを向いて言う。

「信じてくれる奴を見捨てるのは、寝覚めが悪い」

シャルは笑い出した。おかしい。そして、嬉しい。

「本当は……ヒノワに諭されて、戻ってきたんじゃない……？」

「ふざけるな。オレは謙虚で寛大だが、他人の善意を疑う奴は好かない」

「さっきのあれって私の真似よね……？ マグナム・オーパスの……」

「自意識過剰バカめ。オルガを倒すために仕込んでいた技だ」

「あの、あのつ……シャルロットさまー」

言い合う二人をさえぎって、日輪がしがみついていた。
やけに必死だ。見れば、涙まで浮かんでいる。

最悪の想像が脳裏をよぎり、一時的に睡魔が飛んだ。

「オルガに……何かあったの？」

「えっ!? いえ、オルガさまは一命を取り留めました」

「そう！ よかった……貴女のおかげ——」

「わたくし、シャルロットさまに……あ、あ、謝りたかったんです！」

ぼろぼろ涙をこぼしながら、日輪は溜め込んでいたものを吐き出した。

「シグムントさんが亡くなったのも、わたくしが戦えなくなったからで……この前だって、今日だって、肝心なところでお役に立てず……足を引っ張ってばかりで……っ」

そんなことを言えずにいたのか。

シャルが精霊術の修行に旅立つ前、日輪が言えなかったのはこれ——

「貴女って本当に……情けないくらい泣き虫ね！」

はつきり言われて、ひぐつ、と日輪がしゃくり上げた。

シャルは日輪にもたれかかり、心から信頼して、全体重をあずけた。

以前のような照れはない。不思議なくらい素直に、気持ち言葉になる。

「助けにきてくれてありがとう。貴女が友達になってくれて、私——本当に幸せよ」

日輪のしゃっくりがひどくなる。やがて、ぎゅーっとシャルを抱きしめた。シャルは日輪の腕に抱かれ、幸せな気持ちで目を閉じる。

薄れゆく意識の中、ロツテがほったにキスをしたような気がした。

「我らの出る幕はありませんでしたな」

ため息をひとつ。体の緊張を解いて、ラザフォードは泰然と言った。

そのかたわらには、女王のときアスタロトと、大型の梟バルバドスがいる。林檎をもてあそびながら、アスタロトはとがめるように言った。

「怠慢じゃぞ、エド。眺めてないで、助けてやればよかったではないか」

「こなせる課題を取り上げては、生徒のためになりますまい？」

「ふん……こんなときだけ教育者ぶる」

「ぶりますとも。優れた魔術師が数多く輩出されれば、それだけ――」

彫りの深い顔に落ちる影が、ふっと濃くなった。

「私の野心も満たされる」

アスタロトはくすりと笑い、熟れた林檎を握りしめた。

あふれた腐毒が林檎を押し包み、この世から消滅させる。

この瞬間、学院を襲った脅威は、ひとまず解消されたのだ。

内側から焼かれる雷真を、火垂はただ眺めていることしかできなかった。

眼前にはフリスヴェルグの巨体があり、ライコネンは炎化している。夜々が必死に引きはがそうとするが、腕力で炎のボディをとらえることはできない。

無論、小紫にもどうにもできない。いりりは火焰から姉妹を護るため、魔神を冷気で押し返している状態だ。雷真を救出するところまで、手が回らない。

雷真は苦痛に喘いでいる。金剛力は使えているのだろうか？ 彼の苦悶を見ているだけで、火垂のドライブシステムに力が沸き上がるような気がした。

——いや！ 実際に魔力が入ってくる！

雷真の視線が火垂に向いている。言葉はなくとも、彼の思考は理解できた。

（愚かな……誰がおまえなど助けるものか！）

そう心で叫んだときには、三姉妹を飛び越えて、逆巻く劫火に飛び込んでいた。

全身全霊の力でぶん殴る。圧縮された空気が、見事フリスヴェルグを吹き飛ばした。

ライコネンはやはり転移を使ったが、衝撃波は食らったらしい。軍服が裂け、手足に傷が走る。理屈はわからないが、ダメージを与えた！

「……ありがとよ、火垂。……助かったぜ」

火垂の後ろで雷真が立ち上がる。どうやら、まだ息があるらしい。

火垂は驚いたが、三姉妹に驚きはない。敵に向き直り、次の命令を待っている。彼らと雷真の関係性は、我ら戦隊とはずいぶん違う。

だけど、同じように——使い手を信じている。

さすがのライコネンも脅威を覚えたらしい。わずかに強張った声で訊いた。

「怪物だな。それほどの傷を負って……なぜ、立っていられる？」

「あんたがこいつにしたことを——」

爆発的な魔力の高まり。紅い双眸を見開き、雷真が魔力を燃え上がらせた。

「俺もあんたにしてえからだよ！」

胸一杯に思いがあふれ、火垂はとっさに口を押さえた。熱い。胸が。火のように！

再びいりり魔力が渡り、氷面鏡が猛威を奮う。冷気がこじ開けた劫火の道を、八重霞に

まざれ、夜々が駆け抜けた。

小紫の銀剣が死角から閃き、ライコネンの足を止める。そこに夜々が襲いかかり、敵は

上空に逃れた。またも炎の魔神を顕現させて、焦熱地獄を生み出そうとする。

その瞬間を、雷真が待っていた。

転移後の位置を精確に悟り、収束した魔力を放つ。

糸はライコネンの五体をとらえ、自由を奪った。

雷真が右手を引くと、物理的な糸のように、魔王の体が引き寄せられる。

ライコネンの表情が凍る。雷真はこぶしを引き——

いと畏き魔王の顔面に、鉄拳を叩き込んだ。

残念ながら、命中の寸前、夜々から力が抜け、金剛力が効果を失った。だが、手ごたえは確かだ。がんつ、と鈍い音がして、ライコネンが吹っ飛んだ。

思わず手を叩きそうになって、火垂はあわてて自重した。

だが、今——胸を吹き抜けた爽快な風を、火垂は生涯、忘れないだろう。

ひとりの愚か者と、彼を慕う乙女たちが、火垂のためにしてくれたことを。

裂けた頬をぬぐいながら、ライコネンが立ち上がった。

その眼光は少しも衰えていない。一方の雷真は呼吸も浅く、今にも倒れそうだ。

雷真だけではない。三姉妹が三人とも、肩で息をしている。

「そろそろ魔力も尽きただろうな？」

火垂は慄然とした。魔王の狙いは最初から、雷真と三姉妹の魔力切れだ！

「では、追試といこう。今こそ、消し炭に——」

「閣下！」

地面が盛り上がり、機械の軍馬が飛び出してきた。

軍の自動人形だ。軍馬の背にはディラックが乗っている。

地上の状況に変化が生じたらしい。ライコネンは冷ややかな声で訊いた。

「制圧が終わったのか？」

「賊は壊滅しました。こちらが動く前に、ラザフォード氏が……事態を收拾しまして」

「そんなことはない。あいつらにとっちゃ、一番の薬になると思うぜ」

「申し訳ありません。わたくし、雷真さまのお役に立つどころか……」

「謝るな。昨日も一昨日もさんざん世話になった。感謝してもしきれない」

「雷真さま、お優しい——♡」きゅーんっ！

「この女狐っ……また夜々の前で雷真にときめいて……っ」

殺気立つ夜々にはかまわず、日輪は涙をぬぐって、名残惜しそうに言った。

「ですので、明日からしばらく、雷真さまの病室には八時間しかうかがえません」

「専属ナースか！ どこが暇乞いだ！」

「もう抹殺しましょう雷真。このふてぶてしい女狐を今すぐ！ らいとなく！」

「よさぬか、夜々。日輪さまに無礼だぞ」

鋭い声とともに、凜として冷たい、氷のような気配が吹き込んできた。

戸締まりの甘い窓を開け、銀髪の乙女が廊下に飛び込んでくる。その姿は冬の月のよう

に、あるいは凍った花のように、冴え冴えとして美しかった。

夜々の姉いりろだ。いりろは雷真に向き直り、深々と頭を下げた。

「療養中でいらっしやるのに、こんな夜更けにすみません」

「気にするな。そんなの気にしない奴ばかりだしな」

今さら恥じ入る夜々と日輪。いりろは二人を気遣うような素振りを見せたが、それどこ

ろではないらしく、思い詰めた様子で言った。

「——人質はどうなった？」

「職員に負傷者が出ています。ですが、市民に死者は……いない模様」

静寂が満ちる。ややあって、ライコネンは魔力を収めた。

冷たい流し目を雷真にくれ、感情を抑圧した声で言う。

「命拾いしたな」

「……それはあんただ」

「ライシン・アカバネ——覚えておくぞ。その名、その顔、その熱を」

「光栄だぜ。天下の魔王陛下が顔見知りになってくださるとは」

「おまえは陛下の覇道を阻む者だ。いずれ俺が消す——灰も残さず」

眼光が閃く。自分が見られたわけでもないのに、火垂の足に震えがきた。

ライコネンは生き残った部下を連れ、立ち去った。

彼らの背中が見えなくなると、雷真はその場にくずれ落ちた。

「雷真——しっかりしてください——」

真つ先に夜々が駆け寄ってくる。雷真は仰向けになり、脱力した。

「確かに、命拾いだっただな……もう完全に……バテバテだ」

「またこんな無茶して……雷真は馬鹿です！ 馬鹿の王さまです！」

夜々が泣きながら怒る。雷真は苦笑いを浮かべ、小紫に目をやった。

「ごめんな、小紫。イブシロンの仇討ちは……おあずけだ」

「ううん……ううんっ」

こちらに泣いてすがりつく。その頭を、雷真はくしゃくしゃと撫でてやった。その瞬間、何かを思い出しそうになり、火垂は立ちすくんだ。

——つかみかけたものはすぐに消え、火垂の意識から抜け落ちてしまう。

ふと気がつくと、全員の視線がこちらに向いていた。どの眼も優しい。思わずそちらに歩き出しそうになり、火垂はあわてて顔を背けた。

「……実に浅ましい思考ですね。私に恩を売っておけば、マスターとの戦闘の際、迷いが生じるかもしれない——そこまで見越してのことでしょうか？」

悪罵同然の憎まれ口を聞いて、いろりの顔が苦しげにゆがんだ。

「火垂！ おまえ、まだそんなことを——」

「ああ、そうだ。そうじゃなきゃ、俺がおまえなんか助けるかよ」

いろりの言葉にかぶせて、雷真が投げつけるように答える。

——嘘だ。人形に過ぎないこの身にも、それくらいの機微はわかる。

火垂の重荷にならないよう、そんな言い方をしてくれた。

（ありがとう……だが、私はやはり戦隊だ）

自らを奮い立たせ、三人から距離を取る。そして、再び身構えた。

「マスターの敵ならば、私は貴方を始末します。何なら、今すぐ始めましょうか？」

「上等——と言いたいところだが、あいにく時間切れだ」

にやっと笑い、火垂はたるの後ろを視線で示す。一拍置いて、そこに鎌切かまきりが出現した。鎌切だけではない。玉虫たまむしに蜻蛉せみ、姫蜘蛛ひめこ、蜜蜂みつばち、そして――

「マスター」

銀の仮面の魔術師が、乙女たちの中心に立っている。

涙がこぼれそうになったが、姉妹の手前、我慢した。

「親玉が現れたんじゃ、分が悪い。おまけに俺は魔力がカラだ」

雷真はゆっくり身を起こし、座したままマグナスを睨め上げた。

「ずっと見てやがったよな？ 見物の感想はどうだ、マグナスさんよ」

マグナスは仮面越しに雷真を見据え、普段通りの淡々とした声で言った。

「礼を言っておこう。俺の人形を保護してくれたようだ」

「……そいつはおまえの人形じゃねえ」

瞬間的に高まる殺気。怒気をはらんだ静かな声で、雷真は意志を口にした。

「覚えておけ、マグナス。俺は必ずおまえを殺すぜ」

「覚えておこう」

きびすを返す。火垂の目には一瞬、主の横顔がゆるんだようにも見えた。

鎌切が魔力をたくわえ、転移の準備をする。空間の接続が終わるまでのごく短い時間に、火垂といろりの視線が合った。

いろりはただ切なそうに、じっと火垂を見つめていた。

火垂は目を伏せる。うずくような痛みを、胸の奥にしまい込んで――

転移を終えてみると、地上にはすっかり夜のとぼりが降りていた。

だが、静けさはない。明かりがともり、音楽が鳴り響き、祝祭日のように賑やかだ。

少しは火垂の身を案じていたのか、姉妹たちがまわりついてくる。

主の前だというのに、自覚が足りない。小言を言いたいのを我慢して、火垂は主の様子をうかがった。主は常の如く冷淡に、ただ背中を向けているだけだ。

――訊きたい。なぜ、助けにきてくださらなかったのですか、と。

それに……私は売られたのでは……？

ふと、鎌切が重々しく口を開いた。

「報告があります、マスター。あの男はこちらの出現位置をとらえています」

「天眼を得たのだ」

マグナスは空を仰いだ。心なしか、その口ぶりは満足げにも思える。

「あいつは間もなく紅翼陣（三門）――十厘門に達する。一層、気を引き締めろ。おまえたちと言えど、今後は討ち取られる危険がある」

「お言葉ですが、我ら戦隊がおくれを取るなど――」

姉妹たちに反発が広がる。それを視線で制し、マグナスはいつになく感情のにじむ声で、言い聞かせるように言った。

「心せよ。おまえたちは、誰ひとりとして、欠けることが許されない」

主の言葉は、荒れ地を濡らす朝露のように、火垂の心を潤した。
いや、火垂だけではない。たぶん、姉妹たち全員の心を。

「イエス、マスター。御心のままに！」

全員の声が重なる。言うだけ言うと、マグナスはまた無言で歩き始めた。

その後に、やはり無言で姉妹たちがつき従う。

主の後ろを歩いているうちに、火垂の胸に雷真の声が甦った。

「俺の妹に何してくれてんだよ？」

一体、あの男とマスターの過去には、何があったというのだろうか？

（私はあの男を知っている……ような気がする）

あの男はどこか、マスターに似ている――

再び雷真とマグナスが相見えたとき。

血で血を洗う殺し合いを始めたとき。

（私は、あの男を殺せるだろうか……？）

主は何も言ってくれない。ただ先へ先へと歩いて行くだけだ。

息を吹き返した学生たちが、学院のあちこちで歓声をあげている。その楽しげな狂騒の

中、火垂は生まれて初めて、大きな迷いにつかっていた。



Epilogue

見目麗しく、情けあり



壁の向こうから、勝ち鬨^どが響いてくる。

その騒々しさを遠くに聞きながら、グリゼルダはソファで休んでいた。

法学部の三階。ここは被害を受けなかったので、壁にも床にも穴がなく、何より暖かい。各講義室にはベッドが大量に並べられ、臨時の宿舎になっていた。

そこそこきわどかったが、グリゼルダは命をつないだ。

それは不思議と、必然的な結末に思えた。たとえ学院長が間に合わなかったとしても、ロキが、フレイが、あるいはほかの誰^{だれ}かが、私を救ったのではないか？

望みの結果を得るには、相応の代償が必要だ。だが――

(あいつはとくに、先払いしている)

雷真がこれまでに積み上げてきたもの。救ってきた生命^{いのち}と想い。

その蓄積が、いつも不可能を可能にする。

そして今日ここで拾った命を、グリゼルダはまた雷真のために使うだろう。

「先生、お茶をどうぞ」

夜々^{やや}が紅茶を持ってくる。グリゼルダは素直に礼を言い、カップを受け取った。

夜々はうつむき、もじもじとためらってから、思い切ったように言った。

「すみません先生……雷真のせいで、お怪我を」

グリゼルダの首に目をやる。黒豹に噛まれた傷だ。パーシヴァル教授がじきじきに処置してくれたため、経過は心配してないものの、一般的には重傷と言えた。

「あいつのせいではない。……ふっ、おかしい奴だ。なぜおまえが謝るんだ？」

「だって、夜々は雷真の妻でし♡」もじもじ。

「ほう。それはまた……ずいぶん愉快なことを言い出したな？」

和やかだった空気が、一瞬にして緊迫する。

「やめろ夜々。お師匠さまに喧嘩を売るな」

「雷真っ!? 夜々ばかり……悪者にして……っ」

いつの間にか、ドアのところに雷真が立っていた。

足を引きずるように入ってきて、仏頂面の夜々を抱き寄せる。それだけで、夜々はたちまち機嫌を直し、にこにこ笑顔を垂れ流した。

（こいつ……扱いが上手くなったな）

弟子の将来が不安になる。女たらしの悪漢にでもなったら——まあ斬るだけだ。

雷真は自分の右腕をつかみ、ためらいがちにつぶやいた。

「あのよ、頼みがあるんだ……。こいつを……壊してくれないか？」

「——自信があるんだな？」

「ああ」

嘘だ。目が泳ぐほどではないが、目元が強張っている。

だが、やらなければならぬと本人が感じ、決断したことなら——
「わかった。夜会が再開される前に、解いてやる」

「ありがとう。頼む」

頭を下げ、きびすを返す。重苦しい気配を察し、夜々が追いつがった。

「雷真？ どこへ行くんですか？」

「ちよっと……夜風に当たってくる。お師匠さまを頼むぜ」

「えっ？ 風邪を引きますよ——雷真！」

夜々を部屋に残し、雷真は廊下に出た。

温度差で火傷がうずく。不快な痛みだったが、無視して一階に降りる。

エントランスの入り口で、真珠色の髪が揺れていた。

ハーフマントに顔をうずめ、座り込んでいる者がいる。かたわらに立てかけられた大剣は、片側の刃が欠落していて、半壊と言っている状態だ。

雷真はそちらに近付き、となりに腰を下ろした。

「よう、空飛ぶバカ。しけた顔して、悩み事か？」

「ご挨拶だな、地中潜行バカ。貴様こそ、全身ズタボロじゃないか」

「選音速バカ、こんなのいつものことだろ」

「ああ、いつものことだな、融点突破バカが」

「おまえは何ともないんだな？ フレイは？」

「貴様に心配される筋合いはない」

と口ではそつけない言いながら、あごをしゃくって背後を示す。

講義室のいくつかにストープが持ち込まれ、仮設の診療所になっている。医療班を手伝う学生たちの中に、忙しく立ち働くフレイの姿もあった。

雷真は姉弟の手首に注目し、安堵した。二人の手首に切り傷はない。今夜のところは、例の無茶をしないで乗り切ってくれたようだ。

「その……ありがとよ。シャルと日輪、護ってくれたんだろ」

「……逆だ。オレが救われた」

ロキがそんなことを言うのは意外な気がした。よほどの相手だったのか。

「貴様、ライコネンを撃退したそうだな？」

「……撃退なんて大層なもんじゃない。世界最高の自動人形が三体もついてて、時間稼ぎが精一杯だ。そう言うおまえは、敵の親玉を倒したんだって？」

「……《暴竜》と《魔姫》がお膳立てを整えてくれた。一対一なら殺されている」

再び、沈黙。お互い、次の言葉が出てこない。

窓の外には荒れた風景が広がっている。メインストリートの石畳は砕け、庭園は踏み荒らされ、植え込みは丸裸、校舎はほとんどが瓦礫の山だ。

「……改めて見ると、ひでえやられっぷりだな。まるで戦場だ」

「世間知らずバカめ。この程度で戦場を語るな」

「見たことあるのかよ？」

「——と、キンバリーが言っていた」

「聞いた話で説教するな！ 請け売りバカ！」

怒鳴りながら、笑ってしまふ。ロキもまた、笑っていた。

ひとしきり笑ってから、ロキは再び闇をにらんだ。

「魔女と魔王を相手にしたんだ。命があるだけ儲けものだろう」

「……だな。こんなことが、またあると思うか？」

考えているのか、ロキは返事をしなかった。

たぶん、こいつは俺と同じ気持ちを抱えている。

結果だけを見れば大金星。ともに金的を射貫いたと言っている。だが——

このままでは駄目だ。強くなりたい。もっと強く。誰も追いつけないくらい。

「大丈夫ですよ」

思い詰める二人の背後から、ふわっと乙女の声がかかった。

振り向くと、夜々が両手を組み合わせ、聖母のように微笑んでいた。

「雷真の面倒は、最後まで夜々が見ますから」

「——そうか。ありがとう」

「実は、雷真殿に折り入ってお願いがございます」

「改まって、水くさいな。俺にできることなら力になる。何でも言ってくれ」

「ありがとうございます。では——わわわっ、わ、わ、わたたっ」

「……俺からもお願いがある。とりあえず、落ち着いてくれ」

「おおお落ち着いております。わたた私がここ、この程度でろろ狼狽なとっ」

「もう突っ込まないからな？ お願いつてのは何だよ？」

何かを察し、急速に夜々の瞳孔が開いていく。夜々の変化など、いろりは全然気が回らない様子で、とにかく必死に、勢い込んで言った。

「夜々の代わりに、私を妻にしてください！」

「……は？」

雷真を見上げるいろりの頬が、今さらながらに赤く染まる。

呆氣に取られる雷真の首筋に、ふたつの殺意が突き刺さった。

探查魔術なんて使うまでもなく、背後の様子が手に取るようにわかる。

二体の危険極まりない獣が、雷真の背後に出現しようとしていた。

「それじゃ、早速パンツを脱いでください♡」

「どこの面倒を見る気だ！　せつかく和んだのに！」

もみ合う二人を見て、ロキがせせら笑った。

「ふん、つくづく進歩のない奴らだ。いつまでそんなことを——」

がばつと誰かが抱きついてきて、ロキの言葉が宙ぶらりんになる。

むによむによと不自然な感触が背中当たる。フレイが必死にしがみついていた。

「ロキには、お姉ちゃんがついてるからねっ」

「やめろバカ！　何の病気が伝染ったんだ！」

姉を無理やり引きはがす。フレイは珍しく頑強に抵抗しながら、

「う……でも私、ライシンの面倒も見たい……」

指をくわえて、物欲しげに雷真を見た。雷真は「え？」という顔で振り向いたが、反射的に、揺れる膨らみを凝視してしまった。……単に、動くものを目で追っただけだ。それだけの話だ。そのはずなのだが、夜々とロキの顔から感情が消えた。

「ちょ……待てよ？　今夜の俺は本気で瀕死だからな？　おまえらみたいな怪物、二人も

相手にはできない——やめろおおおおお！」

断末魔のごとき絶叫がフロア中に響き渡る。

どっと笑い声上がる。かすかに揺れる窓の外を、雪がひとひら降りてきた。

運河沿い。初雪がちらほら舞う道を、踏みしめるようにライコネンは歩く。

「どうだい、魔王くん。^{ワイズマン}《神酒》^{アストライフ}を持って行けばよかっただろ？」

先ほど電話越しに聞いた、エドマンドの声を思い出す。

「今後は俺の助言も聞いてくれよな。まだ君を失いたくないんでね」

「……わかった」

「それと、なるべく早く戻ってきてくれ。婆さまが大層ご立腹でね……。年寄りのご機嫌取りなんざ、正直、俺には荷が重すぎる——」

苦いものが胸に広がる。ライコネンは嘆息し、腫れた頬をさすった。

最後の一撃を思い返すと、暗い淵を覗き込んだような気分になる。

あのとき——あとほんの一秒、雷真の魔力切れが遅れていたら？

（必要なものは手に入った。作戦は十分に成功と言っている）

だというのに、この敗北感は何だ？

背後を振り返る。ついてくる部下は一名、ディラックだけだ。

過酷なミッションだったはずだが、まだ忠実に任務を遂行している。この男には見所がある。ロンドンに戻ったら然るべきポストを用意しよう、情報部のどこか——

などと、後事のことに思考を飛ばしているとき。

「あ、もしー あなた、学院長さんじゃありませんか？」

と、日本語で呼び止められた。

煌々とともる街灯の下、腰に刀を差した、キモノ姿の東洋人が立っている。なめらかな長髪で、休つきもしなやか。一瞬、女性に見間違えたが、どうやら男だ。

日本人か。一応の同盟国ゆえ、基礎知識がある。言葉は半分もわからなかったが、ディラックが警戒して前に出る。それを控えさせ、ライコネン自ら誰何した。

「何者だ？」

「ありや、人違いでしたかね？ 新しい学院長さんと聞いたんですが……ほら、この写真を少将——知人に渡されました。あなたにそっくりなんですよ」

要領の得ないことを言いながら、袖口から紙切れを取り出す。

手配書のような仕様だ。貼られた顔写真は確かに、ライコネンのものだった。

「確かに、俺がライコネンだが——」

その瞬間、我が身に何が起こったのか、ライコネンにはわからなかった。

警戒は怠らなかった。なのに、見えなかった。予感すらしていない！

ずどんつ、と衝撃音が響く。およそ剣戟の響きではないが、確かに刀から生じた音だ。

男の刀はライコネンを袈裟がけに両断し、ディラックの馬型自動人形を術者ごと引き裂き、

背後の倉庫に五メートルを超す亀裂を生んだ。

真つ二つにされたライコネンが、ぼつと炎上して消え失せる。

血塗れのディラックが魔術を起動し、土に沈む。男は鋭く一瞥したが、まだライコネン

に対する残心を解いていない。深追いはせず、ディラックの逃亡を見逃した。

やがて、あたりに静けさが戻ってきた。

男は刀を街灯に照らす。波紋に沿ってライコネンの血が光っていた。

「……ありや、今の間合いで討ち漏らしましたか。さすがは魔王さまですね」

その場で血振りして、鞘に収める。ちん、と涼しげに鐔が鳴った。

「さて、雷真は人を斬れるようになりましたかね？」

うきうきとした足取りで、機巧都市の街に消えて行く。男が去ったあとには、蘭の芳香に交じり、血の臭気が漂っていた。

その夜、ロビーでうとうとしていると、甘い香りが鼻先で薫った。

「雷真殿。少し……よろしいですか？」

いろりが雷真を揺り動かしている。雷真はうなずき、そっと身を起こした。

いつの間にか、夜々と小紫に挟まれていた。起こしてしまおうかと思ったが、二人は目覚

めず、雷真が抜けた穴を埋めるように、互にくっついて眠ってしまった。

猫の姉妹みだ。雷真は小さく微笑み、いろりに続いてロビーを出た。

廊下は寮を焼け出された学生たちで満杯だ。いろりは廊下の突き当たりまで歩き、ひと気のない窓際で、ようやく足を止めた。

視線がさまよい、定まらない。何かを言おうと雷真を見つめ、息を吸い込むところまでいったのに、口をつぐみ、うつむいてしまう。

話にくいのか。水を向ける意味も込めて、雷真はこちらから口を開いた。

「今日は悪かったな。『倒すぜ』なんて啖呵切って、負け戦に付き合わせちゃった」

「負け戦ではありません。敵はこちらを一人も倒せず、逃げ帰りました。それに、雷真殿は火垂を救ってくださったではありませんか」

「……いや、違う。おまえが救ってくれたんだ」

いろりが不思議そうに顔を上げる。さりとて銀髪が揺れ、月光を弾いた。

「俺は復讐の覚悟を決めて渡英した。顔が妹に似てようが、関係ねえ。戦隊は全員残らず破壊する。当然、火垂も殺す——つもりだった」

いろりの瞳に月が映り込む。その輝きを見ながら、雷真は言った。

「でも、おまえが止めてくれた」

湖面にさざなみが立つように、瞳の中で月が揺れる。

「あやうく外道になっちまうところだったよ。妹を殺すような兄貴にな」

「……ですが、天全殿は凄腕です。戦隊の数を減らさねば、とても勝てません」

「いや、勝てる」

言葉なんてものがあるのなら、今こそ宿れと念じながら、雷真は断言した。

「おまえたち姉妹が三人、力を貸してくれるなら——天全だけをきつと倒せる」

硬かったいろりの顔が、春の水がゆるむように、ふっとやわらいだ。

「欲張りですね。天下の雪月花を一度に侍らせようなどと」

「あいつとやるときだけでいい。力を貸してくれるか？」

「もっちゃん、だよー！」

いろいろの返事ではない。背後に忍び寄っていた小紫が、雷真の腰に飛びついてきた。その後ろには、通夜帰りのような表情の夜々もいる。

不貞の証拠を抑えられたように、いろいろはあうあうと取り乱した。

「ちちち違うぞ夜々、小紫！　だだ大事な話をしていたのだ！」

「姉さまばっかりずるいよー。いっつも私を仲間外れにしてさー」

「そうです雷真……夜々に何の断りもなしに、姉妹井契約なんて……っ」めそり。

「おまえは間違ってるからな夜々？　全然見当違いの方向に行ってるからな？」

「おかしいと思って泳がせてみれば……っ。浮気現場に遭遇だなんて……！」

「いろいろ、さっきの話だな。やっぱ俺、しばらく一人で戦うことにする」

「いけません雷真殿！　わわ私はもうそのつもりで……はなく、とうに心の準備ができて

……でもなくっ」

「姉さま……またわざとらしく本音を漏らして……っ！」

戯れ合う姉妹の言い争いは結局、近くの学生から苦情が出るまで続いた。

——こよひ今宵、夜会は開かれず、若き魔術師たちには別の試練が与えられた。

だが、そう遠くない未来、再び幕が上がるだろう。

最後の夜は、一歩ずつ、着実に近付いている。
たとえば今——このときも。

ばき……、と何かが割れるような音が聞こえて、雷真は振り向いた。

「——夜々？」

夜々はひどく青ざめて、胸元を押さえている。

肌の下で何かがきしみ、めきめきと不穏な悲鳴をあげる。

直後、鋭利な刃物で切断したように、いきなり夜々の胸が割れた。

鮮血が雷真の顔を染める。夜々の胸、心臓のある場所から、きらめく宝石のかげら——

魔術回路の破片が、流星のように飛び散った。

夜々の体が傾き、床に倒れ込むのを、雷真は呆然と、阿呆のように眺める。

「夜々……おい——夜々！ 夜々っ！」

相棒はもう答えない。

糸の切れた人形のように、冷たい血だまりに沈むのみ——



あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

ついに……きました……10巻！ 二桁！ 大台です！

当方、シリーズが10巻までできたのは初めてです。10まできたのに、まだまだ書く内容が残っていて、続きを書かせてもらえる状況にある——僕は何たる幸せ者かつ。

キリがいいので、第二部シメっぽいお話にするぞう、と意気込んで書き始めましたが、終わってみると第三部突入っぽいお話に……作者グダグダだな！ 慣れたけど！

お話をご覧になった方は、もう察していらっしゃるかもしれませんが——

今回ね、プロット段階では存在したのに、初稿で消えた娘さんがいます。

ヒントは彼女の研究です（それ答えだろ！）。その不遇な子は次回、顔を見せてくれると思います。もう一人、次回輝きそうなフラグを立てた女性がいますので、11巻の内容をアレコレ予想していただけたらなと思います。

さて、ご存知の方も多いかと思われますが——

長らくお世話になった、ラノベ王子☆庄司さんが新天地に旅立ってしまわれました。

本シリーズは今巻から、超新星☆池本さんのお世話になっております！

いやー、今回の改稿作業は面白かった。そして、楽しかった！ 改稿は苦しいというのが定説ですが（減量もありますし）、今回はもの凄（すこ）い充足感。アレな初稿をご覧になって、池本さんは相当ドッキリしたと思いますけどっ。

あと今回、池本さんが僕との距離感をはかりかねているのをいいことに、前々からやりたかった【キヤラ紹介&あらすじ】を入れたり、分量増しをねじ込んだりして、やりたい放題でしたのようおほほー あっ、痛いっ、石を投げないで！

おかげさまで、今回の本文はかなり気合が入っております（作者ほどグダグダじゃないよ！）。池本さんには本当お世話になりました。次回も頼りにしております！

ろろおさんの美麗イラストは今回もキレイです。池本さんも「神表紙キター」と思いました」とメールに書いてしまうかっこよさ。いつもありがとうございます！

高城計たかねがはかるさんのコミックは原作二巻のクライマックス。ロキ&雷真らいしんの燃えるところが盛りだくさんで、毎号熱さに圧倒されてました。いつもありがとうございます！

編集部さま、全国の書店さま、印刷、取次、流通にたずさわる皆さま、デザイナーさまに校正さま、いつも大変お世話になっております。ほかにもたくさんの方のお力添えで、今回も無事、出版にこぎつけることができました。

マシンドールプロジェクトで本シリーズを盛り立てくださった、あっちんPこと新田さん——プロジェクトがこまできたのは、貴方あなたと庄司さとうさん、お二人のおかげです。お二



Chapter 1

姉妹が見る夢



1

四回生のマグナスは、歴代最高の成績を修めている。

学院は徹底した実力主義で、成績優秀な者は厚遇される。ゆえに、マグナスには専用の研究室が用意され、そのとりなりには二つの寝室、書庫まであてがわれていた。

深夜。四つのベッドが並ぶ部屋で、マグナスの（戦隊）が眠っている。

その一体、火垂の腕がもがくように空をかいた。

何度も宙を裂き、乱れた魔力を漏出させながら、汗だくになって飛び起きる。

「火垂？」

褐色の肌の乙女がのぞき込んできた。顔を覆うヴェールには（蜻）の文字がある。

「……蜻蛉か。すまない、交代の時間だな」

「火垂、顔が悪い」

「おまえよりはい」

蜻蛉はじっと見つめてくる。姉妹は感覚の奥深いところでつながっている。火垂の動揺

【著者】



海冬レイジ
かいとう・れいじ

トイとかプラモとか大好き！

エキスパートに導かれ、皆さまに背中を支えられて…
「ついここまできた」と言えるところまでできました。

早くお礼を言いたかったのですが、黙っているのは大変でした。
去年は必死に仏頂面をキープ。もう隠さなくていいよね！！

ここまで本当にありがとうございました。
そして「これから」もよろしくお願いします！

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

【イラストレーター】

月刊コミックジーンにて、スピンオフ作品
「Machine-Doll【Re:Acta】^{リアクテ}」^{がたー}（仮）
連載決定！

2013年春始動！ 続報を待て！



人とも、ありがとうございます。

そして最後に、本書を手を取ってくださいました——

今日まで一緒に走ってくださいました貴方に、最大の感謝を。

ついに、ここまでできました。僕たちは。

真の『動く夜々』——へっぽこポリゴンではなく——をお見せできるところまで！

先日スタッフさまとお会いしたとき、僕は日本で一番幸せな男でした。これまでの人生が走馬灯のように駆け抜けましたよマジ。

それもこれも、貴方のおかげ。

ここまでずっと支えてくださった貴方と、この先も一緒にできれば幸いです。

ではまた次回、機巧少女日でお会いできますように！

2012年12月 海冬レイジ

追伸。このあとがきを書いているあいだに、新田さんが逝去されました。いただいたものを何一つお返しできず、今はただ……己の不甲斐なさを憎みます。

今日まで本当にありがとうございます。ご冥福をお祈りいたします。



こんにちは、絵の人です。
10巻、そしてアニメ化です。
うっひゃー。
今回は火垂嬢も沢山かけて
幸せ最高潮で御座います。

最近、良いことばかりなので
反動が怖い今日この頃ですよ？



マシンドール 機巧少女は傷つかない10 Facing "Target Gold"

発行	2013年1月31日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
発行人	三坂泰二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 3-3-5
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2013 Reiji Kaito
Printed in Japan ISBN 978-4-0401-6959-4 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※乱丁本・通丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話:0570-002-001

受付時間:10:00~18:00(土日、祝日除く)

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト
株式会社メディアファクトリーMF文庫 J 編集部気付
「海冬レイジ先生」係 「るろお先生」係

- ★スマートフォンにも対応しております(一部対応していない機種もございます)。
- ★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用する画像の無料権利を受けをプレゼント!
- ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。
- ★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。

「海冬レイジ先生」係
「るろお先生」係
より本誌に送るファンレター
は、このQRコードから



<http://mfe.jp/nqpf>

MF 738



や痛み、肉体の不調は筒抜けだ。

火垂は観念して、声を潜めて訊いた。

「蜻蛉、おまえは夢を見る？」

「よく羊の夢を見る。白い毛玉にもみくちやにされて、私はどこかへ運ばれていく」

「……愉快な夢だ」

「ただの羊じゃない。機械仕掛けの虚勢雄。電気羊」

「つまらない洒落を言うな」

「火垂はどんな夢を見るの？」

「私は……焼かれる夢」

人間の感覚では、間違いなく悪夢に分類されるだろう。

紅蓮の炎に嘗め尽くされ、灰にされる。熱い。だが、苦しくはない。なぜなら、自分はどうに解体されて、肺が存在しないから。がらんとした骸を焼かれるだけだ。

火垂は炎に焼かれながら、奪われたものの重みを噛みしめている。筋肉や骨格。臓物に神経、眼球——いや、もっと大切な、失くしてはいけないものを奪われた。

思い出すだけで、震えがくる。その様子を見て、蜻蛉は冷静な声で言った。

「火垂、やはりおかしい。マスターに——」

「異常はない。マスターのお手を煩わせるな」

一方的に言い置いて、火垂は素早く身支度を済ませた。出掛けに振り向くと、ドレスを

脱いだ蜻蛉が、火垂のベッドに潜り込むところだった。

——否、火垂のベッドではない。強いて言えば姉妹のベッドだ。

戦隊六体が同時に休むことはなく、常に二体が稼働中——ゆえに、四つで十分なのだ。それはマグナスの合理性とも言えるが、もうひとつ決定的な意味合いがあった。

我ら戦隊は、人間扱いされていない、ということだ。

苦いものが胸に広がる。火垂はそれを振り払い、夜道を駆けてトータス寮に向かった。林を突っ切り、大樹を駆け上がって、樹上の姉妹に声をかける。

「交代だ、蜜蜂」

顔を包帯で覆った、髪の短い乙女がうなずく。蜜蜂は一瞬で木を降り、夜の闇に溶けて行った。もちろん、次の姉妹を呼びに行ったのだ。

火垂は枝に立ち、雷真の部屋を観察する。先日破壊された壁はベニヤで適当に補修され、割れたガラスも交換されている。雷真はベッドで芋虫のように丸まり、もうひとつの寝床では、黒髪の乙女型自動人形が眠っていた。

夜々には専用の寝床があるが、戦隊には共用のベッドが四つしかない。

雷真はあくまでも、夜々を人間として扱っている。

ここ数週間の監視で、雷真の暮らしぶりは把握していた。見れば見るほどわからない。彼らはなぜ、あんなふうに存在できるのだろう。人形がまるで人間のように——

（なぜ、こんなことが気になる！）

火垂は自分自身に腹を立てた。このあいだから、私は少しおかしい。

火垂を悩ませる悪夢は、日を追うごとに鮮明に、生々しくなっていく。

（ひよっとして、私は壊れてしまったのだろうか？）

ぞっとした。もし壊れたのなら。マスターの役に立たないのなら。

私には存在する価値も、意義も、必要もない。

鼓動が速くなる。作り物にすぎない、偽りの心臓が暴れている。

「火垂。どうかしたの？」

背後に鎌切が出現する。長いポニーテールが夜風になびき、火垂の肩をくすぐった。

「……何もない。監視を続ける」

姉妹は特に会話もなく、一晩中、雷真の寝室をのぞき続けた。

明け方、交代のため研究室に戻った火垂は、壁際の機巧骨格に目を奪われた。

普段なら気にも留めない、自動人形の金属フレームだ。

姉妹のボディに使われているものと、ほぼ同じと聞いている。マグナスは花柳斎とは別

のやり方で、人工細胞（精瑠）と同等の有機パーツを用意できる。従って、この骨格さえ

あれば、姉妹の代わりを用意するのは簡単……だと思われた。

もし火垂が故障していて、不具合が決定的なものなら、マスターはおそらく――

一瞬、火垂の胸を灼熱の炎が満たした。

火垂が我に返ったのは、金属フレームがひしゃげる甲高い音が響いてからだった。再起動した姉妹たちがずらりと並び、奥の寝室からもマグナスが顔をのぞかせる。火垂は狼狽し、手の中の破片を放り捨てた。

銀の仮面越しに、マグナスの紅い瞳が火垂をとらえる。

「も、申し訳ありません、マスター。これは、不注意で……すぐに後始末を！」

「いい。玉虫にやらせる。おまえは休め」

「ですが！」

「火垂。マスターの御心のままに」

玉虫に諭され、火垂は引き下がった。

「……イエス、マスター。御心のままに」

足を引きずるようにして寝室に戻る。

自分のボディを鉛のように感じる。泣きたくないのはどうしてだ？

火垂はひどく冴えない気分で、空いたベッドに潜り込んだ。

2

夜々の代わりに、雷真の妻になりたい――

いろいろの爆弾発言を受け、夜々と日輪は嫉妬の炎を燃え上がらせた。

「姉さま、ついに……つ・い・に！」

「断固、聞き捨てなりませんっ！」

となりの夜々が怯むくらい、日輪は怒った。目に一杯涙を溜め、訴える。

「夜々さんの代わりではなく、日輪の代わりではありませんか!?」

「そこか? そこ突っ込むのか?」

「何をおっしゃるのです雷真さま! そこが一番重要です!」

華族の姫の憤激を受け、いろりは大層恐縮した。

「すすみません日輪さま。妻というのは言葉のあや、単なる願望にすぎず——」

「姉さま……ついに願望って認めて……!?」

「ちち違う! 雷真殿、かような些事は横に置きまして!」

涙目の二人に背を向け、いろりはひざまずくような勢いで願ひ出た。

「どうか夜々の代わりに、私を側仕えとして置いてください」

「ダメです。姉さまはおとといきやがってください」

「こら夜々、姉ちゃんにそんな言い方するな」

突っかかっていく夜々の頭を抱え込む。夜々は幸せそうに文句を引っ詰め、他方、日輪は石化した。二人が大人しくなったので、雷真はこれ幸いと話を進める。

「夜々の代わりって言ったな。それは硝子さんの意志なのか?」

「硝子は……雷真殿が許せば、それでもよいと」

いろりは丁寧ていねいに腰を折り、必死な声で頼んだ。

「誠心誠意、尽くします。もちろん夜伽よこも、夜々から研修を受けまして――」

「それはやめてくれ！」

「では硝子に」

「それも――って待てよ？ 硝子さんの研修か……」ごくり。

「どうして迷ってゐるんですか雷真？」

夜々と日輪が大変怖い。雷真は邪念を追い払い、いろりの顔を見た。

いろりは真剣な表情だ。かつて夜々がドイツの学生に奪われそうになったとき、夜々をあきらめて自分を使えと言った――あのときと同じ目をしている。

色恋が言わせた台詞せりふではない。のっぴきならない事情がありそうだ。

その理由を先に言わないところを見ると、言いたくないか……言えないか。

「わかった。とりあえず、寮で一緒に暮らせ」

「あ――ありがとうございます！」

「ひどいです雷真……女狐めぎつねを愛の巣に入れるなんて……」めそり。

「いつから愛の巣になった。あと、姉ちゃんに女狐なんて言うな」

しくしくと泣き出す夜々。仕方なく、雷真は夜々の頭を撫なででて、ご機嫌を取る。夜々の機嫌がよくなるのと比例して、日輪の目尻に涙の玉が盛り上がった。

「住むのはいいが、いろりの寝床を考えないとな」

「もちろん夜々が姉さまと一緒に寝ます。姉さまが変な気を起こさないか、見張っている必要がありますので……ふふふ」

「そ、そうか？　いろいろもそれでいいのか？」

「はい。それは願ったり叶ったり——もとい、お気遣いなくっ」

「で、では、日輪は雷真さまと一緒に！」

日輪が懸命に存在をアピールする。

ひんやりと気温が下がる。雷真は爪で頬をかき、遠回しに注意した。

「あのな、日輪。トータス寮は男子寮だ」

「もちろん存じておりますが……？」

「ならルールを守れ！　おまえの寢床は女子寮だ！」

「そんなつ、殺生です……雷真さまが三人組み手をされるというのに……っ」

「何もしねえ！　おまえが考えてるようなことは何もない」

だが、日輪の気持ちもわからなくはない。夜々だけならまだしも、新たに乙女がひとり加わるというのだ。納得がいかない気持ちもあるのだろう。

雷真は少し考え、妥協案をひねり出した。

「じゃあ、何か一匹、式神を置いてけ。それで俺の様子を視てれば安心だろ」

「らら雷真殿！　ふふ夫婦の営みを日輪さまに見せつけるのですかっ？」

「何もしねえって言ったよな！」

「ふふふ……姉さまったら本当に國々しい……ふふふ！」
姉妹のあいだに危険な火花が散る。日輪も着物の袖を咄んでゐる。雷真にとってはまたひとつ頭痛のタネが増えた形だが――
夜々と一緒にいるいろりは、やはり嬉しそうだったので。
まあいいかという気になった。

3

翌日。久々に出た講義はまったくついていけず、雷真はサボりを決め込み、グリゼルダの虐待――もとい指導を受けることにした。

場所は野戦演習場。すっかりなじみとなった修行場で、グリゼルダに教練を迫る。

「さあ、お師匠さま！ 昨日の『続き』とやらを教えてください！ さあ！」

グリゼルダは頬を染め、恥じらいの色を見せた。

「がつつきおつて……。そんなに私を求めるな♡」

「嫌な表現すんなー。また誤解されるだろ！」

思わず夜々を探してしまう。幸い、付近に姿は見当たらない。

「どうだ？ 月の乙女は近くにいるか？」

「……あ、いや、感じねえ。殺気も、気配もない」

グリゼルダは真面目な顔になり、すつと雷真を指差した。

「そう、それだ。貴様は優れた第六感を持っている。殺気を読むこともできる。それは大きな強みだが、同時に成長を妨げる要因でもあった」

「——ということだ？」

「普段、どうやって殺気を読んでいる？」

「どうやって……何となく……感じる？」

「そう、貴様はやり方も知らず、ただ受動的にやっているのだ。スキルではなく、ただの直感でな。それでは容易に騙されるし、鈍れば機能しない」

「なら、どうすりゃいいんだよ？」

「技術でやるのさ。こんなふうにな」

と言われても、グリゼルダが何をしたのか、雷真にはわからなかった。

グリゼルダは悠然と立ったまま、背後の樹木を親指で示した。

「その樹に枯れ葉は七枚——おっと、今一枚落ちたな」

雷真は身を乗り出した。今まさに落ちた葉を入れて、確かに七枚の葉が見える。

「どうやった？ グリゼルダは〈糸〉も使っていない！」

「このスキルを用いれば、姿を隠している程度の相手は位置が知れる」

雷真の脳裏に、夏休みの情景が甦った。初めて手合わせしたとき、グリゼルダは八重霞をいともたやすく看破して、隠形中の小紫を投げ飛ばしたのだ。

あれは魔力の〈糸〉を使ったのだと思っていたが……違う。そんな大掛かりな魔力運用をせずとも、グリゼルダには周囲の様子が感知できるのだ。

これが純粋なスキルなら、それはたぶん、かつて小紫が言っていた――

「能動的知覚？」

「左様、〈サードアイ〉または天眼てんがんと言う。念動、霊視、剛体、魔防より上位に位置する魔術師の第六階梯かいでいだ。学生レベルの技ではないが、貴様なら身につける価値はある」

「学生レベルじゃない……のか？」

「授業で習ってないだろう？ 通常は十年やそこらで到達できる境地ではない。ざっと見たところ、学生でこの域に達しているのは、マグナスと〈剣帝〉けんてい、ほか数名だな」

雷真の肩に力が入る。やはり、ロキにはできるのだ。

複数の標的を同時に射貫いぬいたり、死角の相手に反応できるのも、これが理由か。

最初に戦ったときから、ロキは八本の短剣を同時にコントロールしていた。

雷真には到底、真似できない。飛ばすだけならまだしも、連携させようと思えば、相互の位置関係や敵との距離を把握しなければならぬ。

この天眼とやらを会得すれば――ロキと同じことができる？

「これは必須のスキルではない。シャルロットやイザナギの姫は魔法生物の知覚を使えばいい。フレイはガルの嗅覚や聴覚、〈音圧操作〉ソニック操で同種の感覚を得ているようだ。だが、自力でこれができるようになれば、戦闘で優位に立てる」

【著者】



海冬レイジ
かいとう・れいじ

トイとかプラモとか大好き！

エキスパートに導かれ、皆さまに背中を支えられて…
「ついにここまで来た」と言えるところまでできました。

早くお礼を言いたかったので、黙っているのは大変でした。
去年は必死に仏頂面をキープ。もう隠さなくていいよね！！

ここまで本当にありがとうございました。
そして「これから」もよろしくお願いします！

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

【イラストレーター】

るろお

祝！ アニメ化！ いやっほう。

10

Facing
"Target
Gold"

機巧少女は
傷つかない

マシンドール
機巧少女は傷つかない

海冬レイジ
Illustration
るろお

MF文庫
J

か-08-10



機巧少女は傷つかない10

海冬レイジ



9784840149594



1920193005806

ISBN978-4-8401-4959-4
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)

メディアファクトリー

MEDIA
VI
FACTORY

機巧少女は傷つかない10

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。
「夜々の代わりに、私を妻にしてください！」「姉さま、ついに……つ・い・に！」
いろいろの爆弾発言に雷真と夜々は驚愕。折しも〈流星群〉騒動の責任を問われ、ラザ
フォードが失脚、〈焼却の魔王〉ライコネンの学院長就任が発表された。自治権を巡
る混乱の中、〈結社〉が学院を襲撃——未曾有の危機が学生たちを襲う！ この機に
乗じ日本軍は〈愚者の聖堂〉への侵入を決定。だが、聖堂を目指す雷真の前に、仇敵
マグナスと戦隊が立ちはだかる……。シンフォニック学園バトルアクション第10弾！

MF文庫

J 海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1 Facing "Cannibal Candy"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない3 Facing "Elf Speeder"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"

CD(Side-A)付き特装版

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない5 Facing "King's Singer"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない6 Facing "Crimson Red"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない7 Facing "Genuine Legend"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない8 Facing "Lady Justice"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない9 Facing "Star Gazer"

【イラスト：るろお】

機巧少女は傷つかない10 Facing "Target Gold"

【イラスト：るろお】

MEDIA
VI
FACTORY

580

「優位っつーかさ、あいつらがやってることなら、現状は不利ってことだ」

「そうなるな」

「教えてくれ」

「これは周囲に気を散らす技だ。つけ焼刃^{やきば}はかえって危険だぞ？」

「なら、練達すればいい」

「その通りだ。仕方ない、たっぶり体で教えてやろう♡」

「何で嬉しそうなんだよー」

「では早速——始める」

グリゼルダの魔力が燃える。途端に、茂みから多数の木偶^{でく}が飛び出してきた。

既に伏せてあったようだ。木偶は人間と違い、呼吸もしなければ、体温もない。存在を察知するのは難しい。

「一切の反撃を禁じる。かわして見せろ」

木偶が一斉に襲いかかってくる。

ほぼ念動のみで制御された木偶は、駆動音もなく、静粛だ。人形や人間に囲まれる場合と違い、気配で位置を探るのが難しい。

最初こそ対応できていたが、蹴られ、転がされ、いいようにもてあそばれてしまう。

「何をやっている！ 戦場ならとくに死んでいるぞー」

不甲斐ない弟子を見て、グリゼルダが怒り出した。

「これは殴り合いの訓練か？ 普段の悪知恵はどうした！」

襲いかかる木偶をかわしながら、雷真は記憶を掘り返した。

（コウモリの超音波視覚と同じ理屈だ。魔力の反射を感じ取ればいい——んだよね？）
その理屈を最初に教えてくれたのは、今は亡きガルド犬ヨミだ。

コウモリになったつもりで、魔力を発散し、叩きつけてみる。

……何も感じない。そもそも、魔力が跳ね返ってこない。

木偶に後頭部を強打され、痛みに悶えながら、雷真はさらに考える。

（違う。こんな強い魔力を投げたら、こっちの居場所を教えるようなもんだ）
グリゼルダも、ヨミも、わからないくらい静かにやっていた。ならば――

魔力をしほり、細く、鋭く、ピアノ線のようなイメージで飛ばして見る。

すると、弦が共鳴するような、繊細な感覚が肌に伝わった。

（感じた！ これか！）

だが、周囲の様子などまったくつかめない。葉の枚数なんて数えられるはずがない。
気を取られた瞬間、わっと木偶が殺到し、雷真を袋叩きにした。

ポコポコにされながら、雷真は半笑いになる。

どうやら……先は長そうだ。

へとへとになるまで屋外で修練を積み、冷え切った体で寮に戻ると――

「お帰りなさいませ雷真殿。夕餉のしたくができております」

あたたかい湯気と、煮炊きの香りと、エプロン姿のいろりが迎えてくれた。

普段の着物の上から、フリルたっぷりのエプロンを身に着けている。

(和装にエプロンってのも、妙にしっくりくるな)

「何を見とれてるんですか雷真……!?」

魔力の漏出で不穏な地震を起こしながら、相棒の夜々が迫ってくる。

その格好を見て、雷真は思わず目を覆った。

「何か着ろーっ」

「着てます！ エプロンを！」

「それは服じゃないよな？ マフラーと同じカテゴリーだよな？」

「雷真が望むなら、エプロンはやめてマフラーにします♡」

何一つ解決していない。雷真が閉口していると、夜々はわざとらしく泣き出した。

「うっうっ、ひどいです雷真……姉さまのエプロン姿には見とれたくせに……」

「おまえのは正直、目を背けたくなる感じだったな」

「雷真は変です！ 料理上手な奥さんより、えっちな奥さんの方が需要があります！」

「客のニーズは正確につかめ！俺をそっちのカスタマーにするな！」

「そそそうだぞ夜々。まったくおまえは、懲りもせず破廉恥なふるまいをつ」

「とか言いながら、何をいそいそ脱いでんだ！二人とも服を着ろ！」

疲れて帰ってきたのに、余計に体力を奪われる。たまらず、雷真は音上げた。

「いいから飯を食わせてくれ！腹と背中がくっつきそうだ！」

姉妹はくすつと微笑んで、雷真の手を引き、小上がりに案内した。

ちゃぶ台の上で鍋が湯気を立てている。櫃には蒸らした白米が光っていた。

「おい、それ……鍋か？どうしたんだ？」

「私が作りました。寮の厨を借りまして」

「そりゃありがたい！寮の晩飯は正直飽きたからな……」

鍋の具は、いろりが朝方獲ったという白身の魚、自家製豆腐、土地の茸や野菜など。旬の味覚を白味噌で煮込んだ汁は、ひと口すすただけで、恍惚となる味わいだった。

具材の旨みが臓腑に染み、冷え切った体がばかばかと温まる。雷真はほとんど無言で、かきこむように茶碗を空にした。

「美味え！日本人はやっぱ和食だな！」

いろりは口元に手をやり、可笑しそうに微笑んだ。

「まあ、お行儀の悪い……。おかわりはいかがですか？」

「くれ！」

米をよそつてくれる白い手を眺めながら、雷真はしみじみとつぶやいた。

「思い出すな……。硝子さんの屋敷に住まわせてもらってたこと」

懐かない夜々に苦勞させられながら、鍛錬に明け暮れた日々――

あの頃、食事の面倒をみてくれたのはいろりだった。

今となっては、母親の味噌汁よりも、いろりの味噌汁の方になじみがある。

「何かもう、ずいぶん昔のことに感じるぜ」

「それだけ雷真殿が大きくなられたのだと思います」

「……そうかな？」

「そうですとも。はい、どうぞ」

ほっそりとした腕が茶碗を差し出す。湯気越しに笑顔を眺めながら、熱々の鍋物で腹を満たす――それはえもいわれぬ、甘い幸福だった。

（何かいいな。何て言うんだっけ、この感じ……あ、嫁？）

などという考えは、もちろん相棒に筒抜けだった。

夜々が真つ暗な眼を雷真に向ける。震え上がる雷真を、いろりの声が救った。

「どうした夜々、箸が進んでいないな？ 具合が悪いのか？」

心配そうに妹の顔を見る。夜々は毒気を抜かれ、あわてて食べ始めた。

夜々の椀に、いろりが菜箸で実を入れてやる。姉妹のそんな様子を見てみると、あるいは鍋以上に、雷真の胸は温まるのだった。

「あー、喰った喰ったー」

食後、満たされた気分ですぐベッドに転がると、いきなり全身に痛みが走った。木偶に叩きのめされた際、予期せぬ衝撃にさらされて、無意識に体を強張らせていたようだ。

洗い物をしていたいろりが、目ざとく気付いて寄ってきた。

「ほぐしましょう。楽にしてください」

肩を抱くようにして、そつと雷真を引き起こす。

指先で筋肉をかきわけ、歪んだ背骨を直し、緊張をゆるめてくれる。

「お……上手いな、いろり」

「按摩は慣れております。主が凝りがちなもので」

「そっか……硝子さん、重たそうだな」

「雷真……どこのことを言ってるんですか……？」

にゅつと夜々が顔を突き出す。例によって、古井戸のように暗い眼だった。

「べ、別にどことかじゃねえ。俺はあくまでも、責任の重さを言ったのであって」

「夜々の目を見て言ってくださいーっ」

「こら、夜々。せつかくほぐしているのに、強張らせてどうする」

叱りながら、いろりは雷真の肩に肘を当て、くりくりとこね回した。ほどよい刺激、頬をくすぐる銀髪に、雷真はぞくぞくするような快感を覚えた。

「ああ、いい……マジで生き返る……」

「どっ、どいてください姉さま！ 続きは夜々がやります！ 全力で！」

「殺す気か！ やめろ！ 喰った物がハミ出る！」

夜々にはっこりと、不気味なくらい可愛らしく微笑んだ。

「姉さまにはやらせて、夜々にはやらせてくれないなんてこと……ありませんよね？」
雷真は必死に逃げ道を探したが、あいにく、上手い言い訳は思いつかなかった。

——結局、バッキバキに硬まった体を、自分でほぐすハメになる。

それでも今の雷真には、この状況を笑って済ます余裕があった。

硝子の屋敷にいた頃は、何もかもが暗闇の中にあった。

だが今は、頼りになる相棒がいてくれる。

信じられる仲間もでき、何だかんだで今日まで生き延び、少しずつだが力もついた。

何もかもが、いい方向に転がっている。そう、何もかもが……。

それが今、なぜだか無性に——怖い。

「雷真？ どうかしましたか？」

洗濯物を畳む手を止め、夜々が顔を上げる。雷真はほつりと、

「……なあ、夜々。強くなるには、精進が必要だよな？」

「え？ あ、はい、そう思いますけど」

「メシを喰うには、金を稼がなくちゃならない」

「そうですけど——急にどうしたんですか？」

悲惨な体験をしたせい、雷真は理由のない幸福を信じられないタチだ。今の自分が得ている力、享受しているこの幸福。

それはひよっとしたら、何か大切なものを代償にしているんじゃないか。そんな不安がまとわりついて、ずっと消えなかった。

5

月明かりを浴びて、夜々の肌が真珠のように光る。

自分のすぐ目の前で眠る夜々を、いろりは飽きもせず眺めていた。

初めて夜々が起動した日を、いろりは鮮明に覚えている。

『これが（月）の夜々。おまえの妹よ』

硝子が引き合わせてくれたとき、いろりはまだ童女だった。その自分よりさらに小さな、黒い髪の幼な子を、いろりはとても可愛らしいと思った。

夜々の世話と教育は、ほぼいろりに任せられた。いろりは手取り足取り、主に対する態度や、魔術に関すること、屋敷でのふるまいなど、こと細やかに教授した。

（可愛かったな。姉さま、姉さまとついて歩いて）

もともと、夜々がいろりに懐いていたのは最初だけで、次第に反抗的になっていくのだ。口答える夜々をたしなめながら、そんなところも可愛いと想っていた。

（せめて半分なりと、おまえの荷を背負ってやれたらよいのにな）

わかち合いたい。夜々が背負う（御役目）を。その苦難と、運命を。

だが、いろりにできることは、夜々の代わりに戦ってやることだけだ。

夜々の頬に触れようとした途端、月光が翳った。

雷真は眠っているし、枕元の黒いねずみ——日輪の式神も動かない。相手に殺気はない

らしい。だが、確かに、何者かが部屋の様子をうかがっている。

敵は巧妙に気配を消している。並みの魔術師、そこらの自動人形ではまず感知できない

だろう。だが、いろりは熱に關してのみ、極めて鋭敏な感覚を持つ。まして凍てつく夜風

の中、呼気の熱を見逃しはしない。

周辺に魔術師の気配はない。禁忌人形のようだ。とすれば……。

（やはり、戦隊か。天全殿の傀儡だ）

——今なら、殺れる。

操者なしの一对一ならば、勝てる。その自信がある！

それはめまいがするほどの誘惑だった。しかし、雷真がそれを望むだろうか？ 他人の

自動人形を破壊したとなれば、学内での立場も悪くなる。それに——

（……あの者たちは、主の命で動いているだけだ）

この寒空の下、白い息を吐きながら、忠実に務めを果たそうとしている。

酷な務めだ。まして寝室の監視など、さして意味のある行為とも思えない。雷真や硝子

なら、そんな命令はきつとしない。

交代のため一体が遠ざかるのを待ち、いろりは布団を抜け出した。

少し迷った末、雷真を起こさずに部屋を出る。

懐炉に火種を入れ、寮の外へ。相手の位置と視線方向がわかっているの、隠密行動も楽だ。木陰を選んで走り抜け、風にまぎれて背後を取る。

長時間ベッドを空けては警戒される。いろりは素早く樹上に飛び上がった。

戦隊の感覚器も優秀だ。こちらの登場に即座に気付く。

だが、明らかに狼狽している。どうやら、いろりの方が実戦経験は豊富らしい。

「寒い中、ご苦勞なことだな」

余裕たっぷり声をかける。(火)と書かれたヴェール越しに、相手の緊張が伝わってきた。いろりは表情をやわらげ、努めて優しく言った。

「そう構えるな。主のいないところで戦うわけにも行くまい。——お互いにな」

刺激しないようゆつくりと、抱えていた懐炉を差し出す。

「使え。この季節だ、体も冷えるだろう」

「……余計な気遣いは無用です。私の魔術回路は余熱を生みます」

「だが、使えまい？」

この距離で魔術を使えば、近頃の雷真は容易に気付く。

懐炉を放る。無視して落とすこともできたはずだが、相手はそうせず、とつさに懐炉を

「機巧少女は傷つかない10」

イラスト:るろお

©海冬レイジ/メディアファクトリー



手でつかみ、予想外のぬくもりに目を丸くした。

初めて触れたのか。いろりは可笑しく思いながら、自らの名を告げた。

「私はいろりという。おまえは？」

「……火垂」

「うん。ではな、火垂」

枝を蹴って飛び降りる。粉雪のように軽やかに、いろりは地面に舞い降りた。

立ち去りながら背後をうかがうと、火垂は興味深そうに、懐炉をためつすがめつ観察していた。やがて胸に抱き、ほう……と白い息を吐く。

それだけのことで、いろりの胸もまた、ほかほかと温まる気がした。

どこか晴れ晴れとした気分で寮へと戻る。

いろりも、夜々も、そして火垂も、人間に似せて造られた人形だ。

自動人形の歴史の中で、それは決して珍しいモチーフではない。あまたの人形師たちが、

自動人形を人間にしようと研究を重ねてきた。

だが、ここまで精緻な乙女型自動人形は、学院にもそうはいない。

姉妹たちをのぞけば、戦隊はいろりが初めて見る（同類）と言えた。

遠い異国の地で同郷の者と出くわしたような、そんな気持ちになっている。

——わかつている。これは一方的な、押しつけがましい共感だ。

だが、赤羽天全の目的は「神を造る」ことだという。



神とやらが神性機巧マシンドールの比喩ならば、雪月花せつげつかも戦隊も、主あるじが求める究極形——神性機巧マシンドールに至る階梯かいていの一段、試作品として生を受けた身だ。

(……私たちはよく似ている。そう、まるで姉妹のように)

自嘲じちやうを浮かべて察に入ると、エントランスで意外な人物が待ち構えていた。

「悪いな。そんなことまでやらせちゃって」

「雷真殿！」

勝手なことをした自覚がある。いろりは畏おそまった。

「も、申し訳ありません。不意を打てば、戦隊の数を減らせたものを……。ですが、十分な警告になったはずです。この先、相手も迂闊うかつな行動は取れないと——」

「いいんだ。ありがとよ」

たった二言だったが、それは百万言にも感じる言葉だった。

廊下の寒さがふつとやわらぐ。微笑ほほえみむ二人の背後から、すすり泣きが聞こえた。

「ひどいです雷真……夜々ややを置いて、姉さまと逢あ引きなんて……」

「そんなわけあるか。ほら、冷えるから戻ろうぜ」

雷真はそつと夜々の背中を押し、抱えるように部屋へと戻る。

夜々に対する雷真の態度は、以前よりも少しだけ優しい。

そのことを嬉うれしく思いながら、いろりも二人の背中を追った。

——学院を未曾有の危機が襲ったのは、それから一週間後のことだった。

6

正午少し前、雷真はやはり天眼を得るための修行をしていた。

枯れた木立ちで座禅を組み、八方に魔力の波紋を広げる。

それは音よりも数段速く、一瞬で戻ってくる。目を開けるまでもなく視界が開け、木や石ころの輪郭が認識できた。

全身が目になったような——あるいは天から自分を見下ろした感覚か。

まだまだ解像度が低い。それでも、不完全な感覚が相棒のシルエットをとらえた。

（夜々——と、いろいろ？）

この演習場へと続く歩道で、姉妹が何やら話し込んでいる。……様子がおかしい。二人ともあわてた様子で、何やら緊迫したやり取りをかわしていた。

何かあったようだ。修行を中断するか迷っている、いきなり剣が飛んできた。

機械天使ダイガンマが変形した姿だ。雷真は身をそらして後方転回、危なげなくかわす。その頭上高く、もうグリゼルダが跳躍していた。

空中で剣をつかみ、太陽を背負う。視覚を奪われても雷真の天眼は生きている。だが、背後にもう一体の機械天使——ステイグマの姿を感じし、判断に迷った。

その遼^{しやう}遼^{りやう}が命取り。喉元にディガンマの切っ先を突きつけられ、身動きできなくなる。叱られるかと思つたが、グリゼルダは笑つて言つた。

「貴様には本当に驚かされる。もう輪郭^{かたち}がわかるところまでできているのか」

「……何せ、師匠が凄腕^{さいぶく}だからな」

「戯れるな。心底あきれた奴だよ。ろくすっぽ魔防も使えぬくせに」

魔防はその名の通りの魔術防壁、キンバリーや学院長が好んで使う念動の盾だ。上級者はその表面に念動で魔法円を刻み、防護効果を飛躍的に向上させる。霊視^{へいし}が下手な者にはこれが難しく、上手く刻めない。通常、天眼^{てんがん}にはそれ以上の技術がいる。

「平時であれば、もうかなりの精度だ。しかし、実用レベルではない。この程度の連携、普段の貴様なら軽くしのげそうなものだが、かえって隙^{ひま}が生じた」

「くそっ……一週間もやってこれかよ！」

「まだ一週間だ。だが、のんびり鍛えている余裕もなくなった」

「そうだ！ 実は今、夜々^{やや}が——」

言葉の途中で、けたたましいサイレンの音が響き渡る。

『ヴァルブルギス王立機巧学院の学生諸君、ならびに全職員に通告する』

近くの校舎で伝声器^{スピーカー}がなり立て、音割れのひどい音声^{おんせい}を響かせた。

「我は大英帝国軍、第三機巧師団長ライコネン中将である。是^{こゝ}より本学院に関する重大な決定事項を申し渡す。伝声器周辺、もしくは〈学部間広場〉へ集合せよ」

グリゼルダは険しい表情で天を仰いだ。

「くそっ、もう始めたか。実はな、学院長の更迭が決まった」

「へえ、そうか……って、あの狸がクビ!? 夜会はどうなる!?」

「聞いた通り、旧交戦フィールドでお達しがある。おまえもくるか?」

「行く!」

先ほどの夜々のあわてぶり、あれと関係があるのかも知れない。雷真はグリゼルダの後について、医学部と法学部のあいだ、前期の夜会会場へ向かった。

そこはもう、不安げな学生たちでごった返している。入ってすぐのところにキンバリーが待っていて、グリゼルダと視線をかわし、意味ありげにうなずき合った。

「どうなんだ、キンバリー先生。あの狸が簡単に退場するわけねえよな?」

「当然だ。だが、ここはあくまで王立機巧学院——王室の意向を無視することはできない。学院長の任命権も国王陛下にある」

キンバリーは声量を落とす、雷真の耳元でささやいた。

「教授会、理事会、学生会はこの人事に反対を決めた。だが、決定が覆ることはないだろう。どうやら、自治権闘争の様相になるぞ」

「『この人事』ってのは何だよ?」

「ラザフォードに代わり、ライコネンが学院長となる」

「なっ——バカげてる! あいつはバカ王子の仲間だぞ!」

「もちろん知っているさ。だが、同時に中将だ。国王陛下の信頼も厚い」

「だからって……そもそも、何であいつが監査官なんだよ！」

「ケチのつけようもない人選だろう。学院OB、情報部の重鎮で、その上〈焼却〉の魔王であらせられる」

「——女史よ、あっちの集団は何だ？」

グリゼルダが広場の中央を示す。壇のすぐ前、最前列となる場所に、機巧都市の名士とおぼしき紳士たちが数十人、たむろって氣勢を上げていた。

「ラザフォードを糾弾せよ！」「徹底的に追及だ！」「責任の所在を明らかにしろ！」

キンバリーはそちらを一瞥して、興味もなさそうに言った。

「議員主導の市民団体だな。先週からラザフォードの退任を求めている」

「うん？ 流星から市街を防衛したのは学院だぞ。難癖のつけようがないだろう」

「そもその原因はラザフォードの極秘研究にある——と言ってね。間違っではないし、腹を立てるのも道理だ。その上、私たちの給金は彼らの血税から出ている」

「……連中の好きそうな台詞だな。それで私は一人あたり何ペンスもらってる？ そんな金額で言いたい放題が許されるなら、奴らの顔に百ポンド紙幣を投げつけてやる」

「そう言うな。多くは新聞の請け売り、彼らは義憤に駆られているだけだ」

キンバリーはむしろ同情的に笑った。

「書きたてる新聞も新聞だが、煽られる市民も市民——などと両者を冷笑する知識人は、

皮肉を言つて憐ぶるだけだ。民主主義とは難しいものさ」

それこそ、痛烈な皮肉だ。雷真は洪面になった。

「笑い事じゃねえぞ。民主主義が駄目なら、人類はどうすりゃいいんだ」

「三者それぞれに正義がある。問題は三者ともに自分の正義を疑わないということだね。かく言う私や協会も、知識人ぶった連中さ」

耳に痛い言葉だった。雷真自身、己の正義を振りかざしてきた自覚がある。

「ふん……世界大戦を引き起こすのはああいう人種だろうよ」

グリゼルダは急に不機嫌になって、唾棄するような調子で一息に言った。

「己の正義を疑わず、それを声高に叫び、相容れぬ者を非難する——いや、ああして行動する者はマシだ。賢しらぶった連中は口先だけで行動しない。対岸の火事を笑って見物し、あれが不手際、これが間抜けと罵るくせに、いざ我が身に危険が及べば、助けてくれと泣き叫ぶ。助けられておきながら、手際が悪いと悪態をつく！ そんな連中、消えてくれた方が人類のためだ」

かつて彼女が孤立無援の（戦争）を生きていた頃、最大の敵は人々の無関心だった。憎む気持ちもわからなくはないが……。

「……俺は、そこまで割り切れねえ」

そんな資格はないと思ひながら、雷真は師の言葉に反論した。

「俺は……見てるだけってのがどんなにつらいか、知ってる」

ほんの数年前まで、雷真は兄や妹を見ていることしかできなかった。それがつらくて、傀儡から逃げた。逃げて、「傀儡なんて」と見下ろした——フリをした。

あのとき感じた痛み、鬱屈を雷真は知っている。

「誰もがあんたみたいに戦えるわけじゃない。何とかしたいのに、何の力もなくて……口しか出せねえってのが、どんな気分か……俺はわかるから」

キンバリーが興味深そうに師弟のやり取りを見つめている。何か思うところがあつたのか、グリゼルダはそれきり罵倒を引つ込め、大人しくなった。

やがて、市民たちのざわめきがやんだ。

長身、金髪的青年将校が壇上に立ち、朗々たる声で名乗りをあげる。

「ライコネン中将である。国王陛下の勅命により、ラザフォード氏の職責放棄、職務規定違反について監査の任を受けていた」

一応の自己紹介。もともと、ここにいる者は全員が知っていることだ。

「先日の大規模流星攻撃に際し、ラザフォード氏は夜会観戦者の避難誘導を怠ったばかりか、今日に至るまで説明責任を果たしていない。ゆえに……」

間を取る。息詰まる沈黙が聴衆を包み込んだ。

「現時刻をもって学院長を解任する」

おおっ、とわき上がる歓声を、厳かな声がさえぎった。

「その決定、待ってもらおう」

市民たちを割り、杖をついた老人が進み出る。医学部長パーシヴァル教授だ。

「有罪が確定したならともかく、疑惑『濃厚』で更迭はないだろう？」

「夜会は確実に遂行されねばならない。学院院长が証人喚問で不在では困る」

「ならば、代理を立てればよい——」

「悠長なことを言うな」「引つ込め、老いぼれ！」「誰も聞いてないぞ！」

罵声が飛ぶ。紳士の国にあるまじき悪罵だが、日本で聞く野次よりは上品だった。

「ラザフォード氏の後任には我ライコネンが就く。これは陛下の決定である」

ライコネンの堂々たる宣言に、聴衆から拍手が飛んだ。

（本気かよ！ あのバカ王子、学院を乗っ取るつもりか……!?）

国王陛下の命と言ったが、ライコネンは間違いなくエドマンドの一味だ。つまり、この人事は（叛逆の王子）の思惑通りと考えられる。

思わず飛び出しそうになる雷真の肩を、キンバリーがつかんで止めた。

「私はバカが嫌いだ。行動を起こす前に、奴の足もとをよく視ろ」

言われるままに霊視を試み、その存在に気付く。

ライコネンの影に、強大な自動人形が潜んでいる。

以前、ほかならぬキンバリーから説明を聞いた。伝説級自動人形フリスヴェルグ。その圧倒的な性能は、夏休みにグリゼルダの故郷で体感している。

相手は魔王陛下。ここで雷真が挑みかかっても、殺されるのは明白だ。

POST CARD



NOT FOR SALE

『機巧少女は傷つかない10』

イラスト・るお

©海冬レイジ / メディアファクトリー

WonderGOO

あちらでは、パーシヴァルがなおも食い下がっていた。

「貴公がそのつもりなら、我ら教授会、学院理事会、夜会執行部は、貴公の学院長就任を不服として、帝国議会に異議を申し立てる」

「それは英国民の権利、ご自由に行使されよ。だが、貴方がたにはラザフォード氏と共謀した嫌疑がかけられている。ゆえに、本日これより俺の管轄下で聴取を行う。それまでは貴方がたの自由を制限させていたどころ——」

政治や議論には疎い雷真だが、代わりに野生のカンが備わっている。話の雲行きが怪しくなったのを、すぐに感じ取った。

キンバリーも察したらしく、雷真とグリゼルダの肩を引いた。

「ここを離れよう。我々まで監査の対象になるかも知れない」

ひどい胸騒ぎがする。魔術師の予感や直感を軽視してはいけない。雷真は素直に従い、メインストリートに戻った。

「君はなるべく仲間たちと一緒にいろ。ゼルダ、ちょっと顔を貸せ」

今後の対応を協議するらしい。あの二人なら何とかしてくれそうな気がするが……。

頼もしいような、先行きが不安なような、複雑な気持ちで教授二人を見送る。

やがて二人が見えなくなると、それを待っていたように、下駄の音が響いた。

からんころんと軽やかに、虚空から妖艶な美女が姿を見せる。

着物の胸元が大きくあいていて、豊かなふくらみが今日も雷真を魅了する。夜々、小紫、

いろいろと、珍しく三姉妹を引き連れて、花柳斎硝子かりやうさいしょうこがそこにいた。

「今日はずいぶんと賑々しいわね。一体、何のお祭りかしら？」

「……新学院長の就任祝い、つてとこかな」

「あら、楽しそう。日本軍も飛び入り参加したいのだけど——いいかしら？」

その言葉に込められた意味を、雷真はただちに理解した。

ラザフォードの支配が揺らいだ今こそ、日本軍にとっては千載一遇の好機。

密偵の本分を果たすときが、ついにきたのだ。

7

硝子はすぐに場所を移し、中央食堂前の庭園に雷真を導いた。

その背中から、普段とは違う、独特の香りが漂ってくる。

普段彼女がまとう香り——クチナシの香でも、煙草たばこの匂いでもない。

「無粋よ、坊や。そんな露骨に、女の匂いをかぐなんて」

硝子にとがめられ、雷真は赤面した。

とっさに三姉妹の顔を見たが、皆、目を合わせようとしない。普段なら真っ先に食いついてきそうな夜々でさえ、素知らぬふうを装っている。

「なあ……それ硝煙しょうえんの臭いだろ。硝子さん、拳銃でも撃ったのか？ それとも……」

「坊やが気にすることじゃないわ」

「だが――」

硝子は勢いよく振り返り、雷真の手を握って、艶っぽく微笑んだ。

「坊やの気持ちは嬉しいけれど、この花柳斎を心配するなんて十年早いわよ？　それとも、そんなに私の面倒が見たいのかしら？」

「あつ、いやつ、その……硝子さんがそう言うなら、別にいいんだが！」

「雷真……っ！　今日も懲りずに硝子、硝子って~~~~~っ」

夜々が怨念のこもった眼差しを向けてくる。雷真はあわてて硝子から離れた。

（……でも、水くせえじゃねえかよ）

初めて硝子の屋敷を訪れたあの夜、座敷に踏み込んだ雷真を、いろいろの氷が阻んだ。

あのときと同じ壁を、今もときどき感じてしまう。

夜々も、いろいろも、小紫も、もちろん硝子も、肝心なことを雷真に言わない。

雷真は硝子も三姉妹も信頼している。だが、彼女たちは、そうではないのかもしれない。彼女たちにとって、雷真は所詮、居候の厄介者なのかもしれない。

一抹の寂しさを覚えてしまつて、そんな自分に腹が立った。

（信頼されるようなことをしてきたか、俺は!?）

むしろ逆だ。信頼を裏切るようなことばかりしてきたのだ。

ベンチに腰を落ち着けると、硝子は煙管に火をともし、一服してから言った。

「軍の意向を伝えましょう。この機に乗じて《愚者の聖堂》に侵入する」

雷真も何度か近付いたことがある。地下大空洞の中心にある、謎めいた建造物だ。

「おそらく他国も動くでしょう。指をくわえて見ているわけにはいかない」

「俺は何をすればいい？」

「聖堂のこと、どこまで知っているかしら？」

「アリスが前に言ってたな……。靈魂を人工的に合成するとか何とか。どのみちチンブンカンブンだ。あの建物に入り込めたとして、俺に何ができる？」

「坊やの任務は二つ。他国の侵入者を排除すること。もう一つは、聖堂の最深部に入り、価値のありそうなものを持ち帰ること」

「盗掘みてえだな」

「その通りよ。そして坊やは軍の走狗——できるわね？」

「ここ掘れワンワンってな。気は進まねえが、わかった」

会話が途切れたのを見計らい、いろりが真剣な表情で進み出た。

「雷真殿。こたびの任務、夜々の代わりに、どうか私をお連れください」

「姉さま……本気で雷真を寝取ろうと……！」「ごっこ」

「ばば馬鹿を申すな。てて敵を排除しながらの作戦なら、私が適任と思ったまでだ！」

いろりの攻撃能力は三姉妹随一だ。その発言には一理ある。が、使い勝手のわからない氷面鏡を任されるより、夜々と一緒の方が雷真は安心だ。

ちらりと硝子を見る。硝子はただひとこと、

「坊やの好きになさい」

「——夜々、おまえと行く」

「は、はい——夜々はきつと、いいお嫁さんになります……！」

「そういう選択じゃないからな？　教会にも新婚旅行にも行かないからな？」

いろりは恨みがましい目をした。普段は元氣一杯の小紫も、表情がひどく暗い。

何かあるのか。問いただしいと思ったが、やはり壁を感じてしまつて、切り出すことができない。仕方なく、雷真は黙って出発しようとしたのだが——

校舎のひとつが、出し抜けに爆発した。

爆発音が轟き、鳥が一斉に飛び立つ。少し遅れて、爆風が姉妹の髪をおおった。

「な……んだ？」

轟音はやまない。戦闘が起きている。パーシヴァルが仕掛けたのか。あるいは、学生か。

それとも、別の誰かが戦っているのか。まさか……ロキや、シャルが？

反射的に駆け出す。その眼前に、いきなり氷の格子が生じた。

——もちろん、いろりの仕業だ。硝子の魔力を受け、バリケードを築いたらしい。

硝子の赤い唇から、いつにも増して厳しい声が出る。

「おいたは駄目よ、坊や。おつかいを放り出して、どこへ行くつもり？」

「そ……んな場合じゃねえだろ！　見ろよ、明らかに戦闘が——」

「また、飼い主を忘れたの？」

冷たい眼が雷真をとらえた。硝子にこんな視線を向けられるのは久しぶりだ。夜々も、小紫も、いろりでさえも、顔を青くして畏縮する。

「坊やは一体、何のために英国まできたの？」

「……それは」

「夜会は大詰め。もう少しの辛抱で、仇の首に手が届くわ」

「けどよ……」

「日本軍が欲しがっているものが何か、もうわかってるんでしょう？」

「……神性機巧」

「その秘密はどこにあるの？」

「愚者の……聖堂に」

「だったら」

煙管を返し、灰を捨てる。吸殻が触れた途端、氷の格子が砕け散った。

「どうすればいいか、わかるわね？」

雷真は無意識にこぶしを握り、煩悶した。

ラザフォードの地位が揺らいだこのときに、何者かが戦闘を始めた。

学内は混乱するだろう。日本軍にとって、これ以上の好機はない。二度と、ない。

かつて、野良犬同然の雷真をすくい上げてくれたのは硝子だ。

住むところを、食べるものを、戦う手段を、相棒を与えてくれたのは。

雷真が軍の信頼を裏切れば、硝子の立場がない。恩を仇で返すことになる。

身を焼かれるような葛藤の末、雷真は早口でつぶやいた。

「聖堂の秘密さえ手に入りゃ、後のことはどうでもいいよな？」

わずかな間。隠した意図を咀嚼して、硝子はそつとうなずいた。

「ええ。おつかいを済ませたら、後は好きにしていいいわ」

「わかった！ 夜々、韋駄天さまになったつもりで行くぞー」

「雷真……硝子を好きにしたいからって……っ！」

「どこを聞き間違えた!? とにかく急げ！」

相棒の手を引く。夜々は大人しく従い、一緒に走り出した。

何度か入っているだけに、侵入ルートはわかっている。近いのは水路の方だ。迷宮同然の複雑な構造が不安材料だが、今はとにかくスピードを優先したい。

本立ちを駆け抜け、入り口を探す。葉の落ちた林は見通しもよく、すぐに目的の場所を見つけることができた。

しかし、すんなり突入成功——とはいかなかった。

入り口に近付いたところで、何かが樹から落ちてくる。

ずどんっ、と大きな地響きを立てて着地したのは、薄桃色の髪の乙女だった。

ひるがえるのは黒いスカート。揺れるヴェールには〈火〉の一字。

「みたび、問いましょう。おまえはマスターの敵ですか？」

撫子いもづこそっくりの顔を持つ禁忌人形バンディール、火垂ほたるだ。

無論、彼女が一人で現れるはずもない。

「……学院一の天才さんが、こんな裏道で警備任務かよ？」

火垂の向こうに、銀の仮面の男子学生が立っていた。

マグナスだ。いつも通りの静かな口調で、さして興味もなさそうに告げる。

「この先は学院理事会の管轄区域だ。一般学生の侵入は許可されていない」

「例によって学院長のご命令か？ ねずみを入れるなっさ」

「そうだ」

「じゃあ訊くが、ねずみがヤンチャをしたら——どうなる？」

す、す、と衣擦きんすれの音がして、乙女が二体、次々に転移してきた。

冷や汗を垂らしながら、雷真は紅翼陣こうよくじんを展開した。

「上等。こっちも急いでるんでね……押し通る！」

全力の魔力を夜々に飛ばす。

かくして、夜会首位と第百位、三度目の戦いが始まった。





Chapter 2 胎動

1



壮麗で知られた工学部の校舎が、一瞬で瓦礫の山となった。

赤熱した建材が飛んできて、ガラス窓を粉砕し、さらには背後のドアを吹き飛ばす。飛び散る破片など気にも留めず、ライコネンは紅茶のカップを口に運ぶ。

そこは学院長の執務室。ライコネンは窓際に立ち、立ちのぼる黒煙を眺めていた。

「優雅なもんだ。この惨事にティータイムですか？」

忌まわしい声が後ろからかかる。部屋の外に秘書官アヴリルが立っていた。

「ノックもせず悪いね。叩くドアがなくなつたんだ。新学院長殿にお電話ですよ！」

ずるずるとコードを引きずってきて、叩きつけるように電話機を置く。敵意むき出し。賢い女ではない。ライコネンは歯牙にもかけず、受話器を耳に当てた。

「よう。首尾はどうだい、魔王くん？」

思わずため息が出る。予想はしていたが……。

「控えろ。この回線は確実に盗聴されている。少しは自覚を持て」

マシンドール

機巧少女は傷つかない10

Facing "Target Gold"

海冬レイジ

MF文庫



「持つてるつもりさ、大馬鹿野郎の自覚をね。婆さまは始めなすったかい？」

「ああ。たった今、工学部が消滅した」

「何てこった！ 国家の損失だよ！ 最高のショーだろうに、こっちは辛気臭い執務室で書類仕事ときた。——で、新学院長殿はどうされるおつもりかな？」

「愚問だ。賊を血祭りにあげ、学院を救う」

「ご立派！」

「だが、誤射や誤認逮捕があつてはならない。じつくり状況を見極めなくては」
受話器の向こうで、エドマンドが含み笑いを漏らした。

「それでこそ俺の見込んだ男だ。ときに、例のお人形は手に入りそうかな？」

「努力はしよう。どの機体をご所望だ？」

「どれでもいいが、強いて言うなら、ピンク髪の娘だな。顔が一番好みだ」
資料の写真を思い返す。顔の薄絹に「火」とある、あの機体か。

「わかった。貴方は大人しくしている。できれば半世紀ほど」

「努力はしよう。それじゃ朗報を待つてゐるぜ、魔王くん——」

通話が切れる。ライコネンは受話器を戻し、軽く手を上げた。

床の一部が盛り上がり、ほんの数秒で人間の姿になる。アヴリルが機敏に反応し、腰のサーベルに手をかけた——が、もちろん抜刀は思いとどまる。

床から現れたのは若い軍人だ。きびきびとした動作で、格式ばった敬礼をした。

「ディラック大尉であります。お呼びでしょうか、閣下？」

「状況報告」

「イエス、サー。魔術師を六隊、確認しました。隊は五人編成。魔術師一人が一体ないし二体の自動人形オートマトンを連れていきます」

「《五芒編成》か。連中と見て間違いないな？」

「《茨》の外がい套ぼうを身につけております」

慎重な言い回しをする。賢い男だ、とライコネンは思った。

「敵三隊は既到大講堂を占拠しました。残る三隊は周辺で邀撃ようげきの構えです」

「ロッカーでも公邸でもなく大講堂を占拠した——これをどう見る？」

「侵入が容易であった、というのが一点。もう一点は、既に十分な《人質》を確保したのではないかと。じきに声明を出すものと思われます」

「いい読みだ」

「恐縮であります」

「であれば、学院の最重要人物——ラザフォード氏が心配だ。不運なことに、査問は大講堂で行われていた。是より安否を確認しに行く」

「了解しました。——二人、こい。閣下を護衛する」

部屋の外に声をかけ、魔術師二人を呼び寄せる。流麗な装飾が施されたゴーレム、精緻な彫刻の女性型機械人形が随伴していた。どちらも規格量産品ではない。

ディラック自身は、床から漆黒の機械馬を引っ張り出した。

物質変形か、空間操作か。いずれにしても高度な魔術回路だ。ライコネンは部下の武装、そして技量に満足し、アヴリルを置いて執務室を後にした。

その先にあるのは、もはや平和な学院ではなく——戦場だ。

学院のあちこちで爆発が起き、焼け焦げた空気が鼻につく。学生たちは逃げ惑い、警備隊は次々に突破されていた。

公邸のある最重要区画を抜け、メインストリートに出る。図書館裏の林に差し掛かったところで、五体の乙女を引き連れた、銀の仮面の男子学生が待っていた。

「おまえが〈偉大なる者〉……だな？」

「学院ではそう呼ばれております」

慇懃に礼をする。ライコネンは無表情のまま、わずかに語調をやわらげて言った。
「では、未来の話をしよう。〈夢〉と〈希望〉の話を」

2

そのわずか十数分前、雷真はマグナスと戦っていた。

かたわらには相棒の夜々。対して向こうは、かつて重要機巧保管施設〈ロッカー〉地下で戦ったときと同じ、火垂、鎌切、玉虫の三体を侍らせている。

（このクソ忙しいときに、よりにもよって天全かよ……！）

学院に何かが起きている。破滅的な予感を覚えさせる、何かが。一刻も早く仲間たちと合流したいのに、日本軍は面倒な命令をくだし、マグナスがそれを阻んでいる。

だが、ここでマグナスを倒してしまえば——雷真の目的は果たされる！

「行くぞ夜々。光燭四八衝！」

「はい！」

夜々は撃針で打たれたように、一直線に火垂へ駆けた。

泡のように火垂の姿が消え、一瞬後、雷真の背後から飛びかかってくる。

鎌切の転移魔術を使った奇襲——お得意の攻撃パターンだ。

いつの間にも得たのか、火垂は両手にナイフを携え、雷真の首を刈りにきた。

金剛力で受け止めることもできたが、雷真は無理せず回避した。夜々がすぐさま戻ってきて、雷真と入れ替わりで火垂と格闘戦にもつれ込む。

一進一退の激しい攻防。二人の筋力はほぼ互角だ。夜々の振り袖と火垂のスカートが弧を描き、二つの花が咲いたように見えた。

夜々に魔力を送り込みつつ、雷真は天眼で周囲を探った。

（——いつの間にか、鎌切がいねえ！）

隠れた？ それとも、移動したのか？

そちらに気を散らした一瞬に、玉虫が火垂に加勢し、二対一で夜々を狙った。

（玉虫の魔術回路は確か……魔力奪取！）

接触したが最後、夜々は魔力を奪われてしまう。触れさせるわけにはいかない。雷真は紅翼陣を展開し、五本の糸で夜々を引き戻した。

その雷真の首に、鎌切の大鎌がかかった。

もう完全に刃の弧にとらえられている。さすがはマグナス、見事な奇襲だ。今さら回避は不可能だったが、雷真はあわてず、左手で刃を止めた。

柄をつかみ、鎌ごと鎌切をぶん回す。玉虫にぶち当て、空中に打ち上げる。

「吹鳴絶衝——（ひさぎ太刀影）！」

雷真の命令を受け、夜々が力を解放する。夜々はまさしく閃光のごとき速度で、空中の玉虫めがけて跳んだ。

これならドレインもクソもない。玉虫は貫通されて即死——

していない！ 褐色の肌の乙女が玉虫をかばい、夜々を空中で受け止めていた。

四体目の戦隊か。顔を隠すヴェールには（蜻蛉）の文字がある。

（蜻蛉……ってやつか？ 浮いてやがる！）

驚いたことに、敵は夜々の跳躍を押しとどめていた。空中では踏ん張りがきかないはずなのに、びくともしない。

「見事だ。俺に四ツ目を出させるか」

マグナスの皮肉げな声が耳に届く。その声はもう、勝利の確信に満ちていた。

「——天嶮！耐えろ、夜々！」

ありったけの魔力を相棒に渡す。直後、不可視の力場が夜々を襲った。

衝撃が夜々に降りかかり、小さな体を大地に叩きつける。土が裂け、岩が割れ、地盤が沈む。それでも衝撃は止まらず、夜々はつぶされ、たまらず血を吐いた。

敵に加えた衝撃が、そっくり戻ってきたような光景だった。

「夜々！ 無事か!?」

「だ……大丈夫……です……っ」

夜々は気丈に応えた。だが、立ち上がれない。全身の骨を砕かれている。

——戦闘続行は不可能だ。雷真は思考を切り替え、天眼で退路を探した。

結論から言えば、それが幸運を呼び込んだ。マグナスの魔力が鎌切に流れ、空間転移の魔術が起動する瞬間を、知覚することができたのだ。

時間が静止したような感覚。一〇秒にも感じるその刹那に、雷真は敵の動きと、魔術の質と、自分が取るべき行動を把握した。

鎌切は火垂を移動させようとしている。火垂で夜々とどめを刺すつもりなのだ。転移させてはいけない。とっさに、右手の指を鎌切に突きつける。

指先から収束した魔力の糸が伸び、鎌切の体内に流れ込んだ。

雷真とマグナス、二人ぶんの魔力を注がれて、鎌切の魔術回路が制御を失う。

落ち葉が、土砂が、樹木が、欠け落ちたように消える。

転移魔術が暴走したのだ——と理解したときにはもう、すべてが手遅れ。

雷真も空間の欠落に巻き込まれ、いずことも知れぬ場所へ放り出されていた。

3

雷真の体が欠け落ち、消えていくのを、夜々は見ていることしかできなかった。

「雷真……雷真——っ！」

血を吐きながら叫ぶ。動かない手足が恨めしい。

鎌切が前のめりに倒れ込む。それを支えたのは玉虫と蜻蛉で、火垂の姿はどこにも見当たらない。雷真と同じく、火垂も転移魔術に巻き込まれたらしい。

もともと対象だった者と、介入しようとした者、両方が消えたことになる。

一体、どこへ消えたのだろうか。そもそも雷真は無事なのか。手足がバラバラになったり、岩の中に放り込まれたりしていないか。心配で気が狂いそうだ！

すぐに探しに行きたいが、夜々は起き上がることもできない。

鎌切もぐったりとして、途切れがちの声で主につぶやいた。

「申し訳ありません……マスター。回路が焼け……制御を失った……ようです」

「おまえの責任ではない。(縛縄血鎖)を受けたのだ」

「マスター。火垂の反応を探知できません」

蜻蛉が耳に手を当て、周囲を見回す。あちらも仲間を見失ったようだ。

「提案があります、マスター。先にこいつを始末するのはいかがでしょうか？」

玉虫が剣を構え、切っ先を夜々に向ける。その途端、夜々の体内で何かが目覚めそうになった。尽きたはずの魔力が湧き上がり、どんどん眉間に集まっていく。

（いけない……戒めが……！）

折れた腕でひたいを押さえ、力を抑圧しようとする。

だが、同時に誘惑も感じた。この力を使えば勝てる——いや！
使わなければ、ここで倒されて、すべてが終わりだ。

（だめ！ また雷真が……雷真の命が……っ）

悶え苦しむ夜々を見て、マグナスは思案するような間を取った。

「マスター」「っ」決断を、マスター」

戦隊の乙女たちが迫る。マグナスが決断をくだそうとした、そのとき——

ひゆう、と冷たい風が吹き込み、彼らの足もとが隆起した。

霜柱だ。日本刀の刃のような、鋭利な氷が土を割る。

峻烈な冷気をまとい、銀髪の乙女が夜々の前に舞い降りた。

「忌まわしき肉の人形よ。その霜を一寸でも踏んでみろ」

絶対零度に凍る声。夜々がすくんでしまうほどの声音で、いろりは言った。

「私の氷筈はおまえたちを必ず穿つ。たとえ、その身が銅であろうとも」

――能力を言っているのではない。いろりは意志を告げている。

夜々にこれ以上の危害を加えるなら、我が身に代えても殲滅すると。

乾いた大地に真つ白な霜が広がっていく。姉の凄まじい攻撃力を見て、夜々は安心してしまったらしい。意識が遠のき、あっけなく視界が閉じた。

気がつくと、いろりの顔がすぐ側にきていた。

抱きしめられている。自分が血まみれなのを思い出し、夜々は離れようとした。

「だめです、姉さま……着物が汚れます……」

「くだらぬことを申すな！ たわけめ！」

雪原のようないろりの頬に、大粒の涙がすべり落ちる。

きらめく真珠の輝きを見て、夜々は初めて姉の心を知った気がした。

姉は小紫を可愛がっていた。心配して、面倒を見て、笑いかけていた。

夜々には小言ばかりだった。ああしろこうしろ、これをするなあれをするな。たるんでるだの自覚が足りないだの、意地悪ばかり言う。

「おまえのことも大事にしてるよ、いろりは」

いつだったか、雷真がそう言っていた。そうなのかな……とも思ったが、今の今まで、

確証が持てなかった。

姉さまはきつと、夜々のことが気に入らないんだと。





10

Facing
"Target
Gold"

海冬レイジ

Illustration
るろお

機巧少女は
マシンドール

傷つかない
Repairable Machine-Doll

いつからか、そう思っていたのに——
だが今、いろりは夜々を抱き、嗚咽を噛み殺している。

姉の気持ち伝わってきて、夜々の眼にも涙がにじんだ。

「ごめんなさい……姉さま……心配かけて……っ」

いろりはもう何も言わず、夜々を抱きしめただけだった。

頬を寄せ合う姉妹の上から、小紫が遠慮がちにのぞき込んでくる。

「具合はどうお、夜々姉さま？ 怪我は一応、硝子が治してくれたけど……」

いろりに抱かれたまま、夜々は体を点検する。既に手足は修復されている。だが、内部は相当に怪しい。内臓は機能低下、筋肉は今にも断裂しそうだ。

本調子にはほど遠い。早く雷真と合流して、回復に専念したいところ——

「そうです雷真！ それにまだ、戦闘中で……」

「安心なさい。坊やのお兄ちゃんなら、もう帰ったわ」

目の前の岩に、紫煙をくゆらせる硝子がいた。

「うちのきかん坊は、これから探しましょう」

「わ……かりました。夜々も……」

「愚か者！ おまえは主の側にいろ！ 雷真殿は私と小紫で探す！」

いつもの調子に戻って、いろりが厳しく叱る。夜々ははっとして、

「まさか姉さま……この機に乗じて雷真と既成事実を……っ!?」

「ばば馬鹿^{ばか}を申すな。そそそのような場合ではない」

「喃んでます姉さま！ 喃み喃みですーっ！」

「主ー」

いろりはさすがのように硝子を見た。硝子はふっと微笑^{ほほえ}み、優しく言った。

「命令よ、夜々」

「……はい」

しょんぼりとうなだれる。いろりは表情を引き締め、小紫を振り返った。

「ではゆこう、小紫。おまえの目と耳、当てにしている」

「任せて！ ジャーね、夜々姉さまは養生^{ようじやう}してて！」

姉妹が駆けて行く。硝子が既に位置を割り出したのか、雷真の居場所には目星がついているらしい。ほんの少しだけ、夜々の不安も軽くなった。

だが、状況は何一つ好転していない。その上、絶え間なく戦闘音が響いてくる。

硝子は立ち上がり、億劫^{おくせう}そうに言った。

「巻き添えはごめんだわ。どこか静かなところへ行きましょう」

「あいにく、学内にはもうそんな場所はないよ」

いきなり声がかかる。身構えた拍子に、夜々のわき腹に激痛が走った。

いつからそこにいたのか、キンバリーが樹^きにもたれて立っている。

銀フレームの眼鏡^{めがね}越しに、鋭い視線が硝子に刺さった。

「大した覚悟だな、花柳斎殿（からやうさい）。あいつらを死地に追いやっておいて、自分だけ安全な場所に行こうというのか」

侮蔑的な口調だ。夜々（やや）はあわてて硝子（しょうじ）をかばった。

「違うんです先生！ 硝子（しょうじ）が雷真（らいしん）を地下に行かせたのは、戦いから遠ざけるため——」

「夜々！」

鋭くさえぎられ、夜々はびくつとして言葉を引つ込めた。

硝子（しょうじ）は立ち去ろうとしたが、キンバリーは声を高くして、さらに言った。

「ならばなおさら、遠足には不向きな場所だ。とっくにご存知（ごぞんじ）なんだろう？ スプリガン（デュープ）の研究は最終段階、〈ギユネス〉はもう十分に育っている。要撃衛士隊（カッパバールズ）を学院防衛に回したせいで、今現在、地下の亡霊どもを抑える者はいない」

「坊やは私のものよ。どう扱おうと私の勝手だわ」

「あいつが死ぬぞ！」

「死んだら、それまでの子どもだったということよ。私が造った子たちもね」

二人はしばしにらみ合っていたが、やがてキンバリーがそれに気付いた。

硝子（しょうじ）の指先からは血の気が失せ、膝はかすかに笑っている。

視線に気付き、硝子（しょうじ）は指を袖（そで）に隠した。キンバリーはにやりとして、

「貴女（あなた）も相当、不器用な性質と見える」

「あら、私は器用に立ち回ってきたつもりよ。利用できるものは何でも利用するわ。一族

を皆殺しにされた、可哀相な坊やでもね。私は自分が一番可愛いのに」

「ではなぜ、戦えない夜々を手元に残し、雪と花の人形を行かせたんだ？ 私の記憶が確かなら、貴女は先ほど、何者かに命を狙われたはずだが？」

「……坊やは軍の密命を帯びている。任務を優先しただけよ」

「先ほどマグナスの前に立ちはだかったのも、任務のためかね？」

「……ええ、そうよ」

「立っているのがつらいほど、夜々に魔力をつぎ込んだのも？」

「……………」

硝子は忌ま忌ましげに視線をそらした。

夜々は目を疑った。あの硝子がいかに負かされるなんて！

「坊やがさんざんお世話になっておいて何だけど、私、貴女が嫌いだわ」

「それは残念だ。私はだんだん貴女が好きになってきたのだが」

今度こそ立ち去ろうとする硝子に、キンバリーはさらに呼びかけた。

「学院は賊の襲撃を受けている。灰十字の戦士と同じ訓練を受けた——という触れ込みの連中さ。私と一緒にいた方が安全だと思うが？」

「魔術師協会に手を貸すつもりはないわ。ご心配なさらずとも、私の護衛はじきにくる。

今日にでもね」

「——夏の終わりに、日本を帰った彼かね？」

誰のことだろう？ 夜々は疑問に思ったが、訊いていいものか、判断できない。

「夜々、ライシンの様子が知りたくないか？ 私といれば、すぐにわかるぞ？」

夜々は思わず足を止めた。硝子の袖をつまんで、弱々しく引く張る。

「硝子……」

硝子のため息について、やけくそのように言った。

「先生について行きたければ行ってもいいわ。おまえはしばらく役に立たないから。ただし、一切の戦闘行為を許さない——約束できる？」

「は……はい」

「ずいぶん嫌われたものだ。私情を抜いて、協会を利用してはどうだね？」

「おあいにくね。私情を抜きにすると、近付くわけにはいかないの」

何か察したのか、びくり、とキンバリーの眉が動いた。

「……あいつを戦いから遠ざけるために、地下へやっただった。貴女は知っていたのか？ 今日、学院に起こることを？ なぜだ？」

「そのご質問には」

硝子が袖口から手を抜いて、びんっと何かを指で弾いた。

「答える舌を持っていないわ」

空中でぐるぐる回る、金色の指輪。

薔薇を模したレリーフが刻まれている。あれは——

結社のリング！夜々も、キンバリーも、思わず目をむいた。

硝子は指輪を手で隠し、悪戯いたづらっぽく微笑はなんだ。

「これで私が嫌いになった？」

「……私は学者の端くれだ。真相がわかるまで、判断は留保する」

硝子は挑発的な笑みを残し、下駄を鳴らして立ち去った。

夜々の心臓がどきどきと暴れる。夜々も知らない、主の秘密を垣間見た気がした。

しかし、意地悪な運命は、落ち着く暇も与えてはくれない。

学院の中央、メインストリートの中ほどに、突如として巨大な火柱が生じた。

圧倒的な火力――誰かが馬鹿げた出力で火炎の魔術を使っている！

誰の仕業か、夜々には判別できない。だが、キンバリーは推察したようだ。

「……やられているのはゼルダだな。私は救援に向かう」

迷宮の魔王が押されている――!?

「夜々も行きます！」

「花柳殿の言いつけを忘れたのか？ おまえは急いで理学部に行け。同胞がシエルター

に案内してくれる。後で落ち合おう！」

言い終わる間もなく、キンバリーはもう駆け出していた。

ひとり残された夜々は、どうしていいかわからず、しばし立ち尽くした。

何か大変なことが起こっている。何か、とても怖いことが。

夜々は雷真の無事を折りつつ、キンバリーの言いつけ通り、理学部へと走った。

4

意識を取り戻したとき、雷真は暗闇の中にいた。

俺は一体、どうなった？ 確か、夜々の大技を止められて——夜々!?

「夜々！ どこだ！」

目をつぶされたのか、何も見えない。一瞬、恐慌をきたしかけたが、グリゼルダの指導は無駄ではなかった。今の雷真には、霊視や天眼のスキルがある。

「ここは……地下……か？」

把握した地形は、光源のない巨大な空洞だった。この静けさ、広さ、漂う湿気に覚えがある。確証はないが、状況から見て……学院の地下空洞か。

「夜々——返事しろ、夜々——」

叫んでも、かすかなこだまが返ってくるだけだ。

雷真は歯噛みした。また夜々に重傷を負わせてしまった。

「見事だ。俺に四ツ目を出させるか」

マグナスの台詞が耳の奥に甦り、たまらず地面を殴りつける。

「まだ四体……！ 俺って奴はまるで進歩がねえ！」

気が遠くなる。夜会はもう終盤、アスラやソーネチカ、ロキを倒せばマグナスとの最終決戦だ。猶予時間はほとんどない。それなのに、戦隊はまだ二体も控えている。

先刻、敵は夜々渾身の一撃を受け止め、そっくり返した——ように見えた。

（衝撃を吸収して……反射した？ そんな魔術があるのか？）

震えがくる。そんな魔術が存在するのなら、もう希望がない。この先、雷真がさらに力をつけ、必殺の一撃を体得しても、反射されたものでは意味がない！

苦悩する雷真の眉間に、針で突いたような殺気が当たった。

直後、いきなり鉄拳が飛んでくる。

雷真は反射的に身をかまし、相手の腕をつかんで跳ね上げた。

見事な一本背負い。だが、相手は空中で立て直し、足から綺麗に着地した。

お互いに距離を取る。暗闇の中でも、今の雷真には相手の輪郭が見て取れた。

「……やつば火垂か。おまえもここに飛ばされたんだな？」

返事の代わりに、火垂は魔術回路を起動した。肌が熱を帯び、空気が灼熱する。

一瞬で間合いを詰められ、首をつかまれて、地面に叩きつけられた。

そのまま頸骨を砕かれる——かと思ったが。

「……姑息な真似を」

とどめを刺す寸前で、火垂は動きを止めていた。雷真の指から魔力の（糸）が流れ込んでいるのだ。直に魔力循環系を乱され、身動きが取れない。

魔力の発光でお互いの顔が浮かび上がる。しばし、二人はにらみ合った。

「……なあ、提案なんだがよ」

「命乞いですか？」

「話が早くて助かる。一時、休戦といかないか？」

「戯れ言を！」

「本気だ。俺はめっちゃくちや焦ってる。急いでるんだよ。さっさと任務を果たして、相棒の無事を確かめたい。それにおまえは禁忌人形、じきに魔力が切れるぜ？」

「……その前に、私の姉妹が間に合うかもしれませんよ？」

その可能性はある。雷真は感覚を研ぎ澄まし、はるか遠くへ魔力を投げた。

「……って、おい！ 本当にこんなことやってる場合じゃねえ！」

「は？ 何を言っているのです？」

「感じねえのか！ ここには誰か——何かがいる！」

いきなり気配が強くなる。それはあまりに唐突に、火垂るの背後に出現した。

「何だ……こいつは……!?」

ひと言で言えば、怪物だった。

腕があり、足がある。体つきは人間に似ているが、大きさは二倍ほど。ボディはいびつで、太った男のようにも、妊婦のようにも見える。体表は黒く、燃え盛る炎のように流動的で、びっしりと目玉がついていた。

無数の目玉が一齐にまばたきをして、雷真と火垂に視線を注ぐ。

目玉の周辺に「くばっ」と多数の亀裂が走り、真つ白な齒列がのぞいた。

脳髓が焼けるほどの生物的嫌悪。とっさに武器を探したが、近頃はすっかり魔術をアテにしているので、スタングレネードも爆薬も携行していない。四徳ナイフが一本に、カンテラ、マツチ、めくらましの煙幕……そんなもので倒せる相手ではない。

怪物が腕を振り下ろす。雷真はとっさに火垂を離し、転がって逃げた。

転がりざま、足を払おうと蹴りを叩き込む。それが痛恨の判断ミスだ。

（――抜けねえ!?）

脚がめりこみ、動かなくなった。切断しなければ、死ぬ！

足を捨てるか、命を捨てるか。死地に慣れた雷真でも、その判断は難しかった。

ぐずぐずしているうちに、火垂が怪物に掌を向け、魔力を練った。

「おい！ どうする気だ！」

「三下は黙って見ているがいい」

火垂の体がガラガラと輝き――

ずどんっ、と爆発音がして、怪物が弾け飛んだ。

前に雷真が食らった、あの技だ。触れてもいないのに、何かが威力を発揮する。黒い肉片が散乱し、タールのように溶け出して、砂に染みて消えた。

火垂は誇らしげに雷真を振り向き、ふふんと鼻で笑った。



「姉さま、
ついに……ついに！」

「どうですか？ マスターが創りたまいいし魔術回路の力がわかりましたか？」

「バカ、気を抜くなー まだいるぞー」

火垂はたるに黒い影がかかる。先ほどとは別の個体だ。

長い腕を振り回し、火垂を襲う。火垂は俊敏に身をかわし、掌てのひらを怪物に向けた。

すかっと怪い音がして、魔術が発する。

……魔力切れだ。火垂はあつけなくとらえられ、長い腕に抱き寄せられた。

怪物の胴体が大きく開き、歯がむき出しになる。歯が火垂の肌食い込んだ——瞬間、

例の「ずどんっ」が再び炸裂した。

怪物が蒸発し、ウェールが千切れ飛んで、驚いた顔の火垂が振り向く。

今の一瞬、雷真らいじんが魔力を放ち、火垂に分け与えたのだ。

「……愚かな男です」

お互いに緊張をはらんで向かい合う。

「私を利用して生き延びようとしたようですが、魔力を渡してしまいましたね？」

「……まあ待てよ、さっきの続きだ。ひとまず手を組まないか？」

「浅ましい男です。まだそんな世迷言よめいごんを」

「待てって。俺おれを殺しちまって、おまえ、どうやって帰るつもりだ？」

ほんの一瞬、火垂の殺気がゆるんだ。迷いが生じたらしい。

「すぐにマスターが迎えにきてくれます」

「そうは思えねえけどな」

「おまえにマスターの何がわかる！」

「すぐ迎えにこれるなら、とつくに現れてそんなもんだ。思うにあいづら、俺たちの位置がわからないか——まだ動けないんじゃないか？」

鎌切の魔術は暴走したのだ。回路が損傷している可能性はある。

火垂は返事に詰まった。ここぞとばかり、雷真はたたみかける。

「あんな怪物がうろついてる中を、おまえ一人で帰る気か？」

「……私が命を惜しむと思うのですか？」

「いいや。だが、野垂れ死ぬわけにはいかない。そうだろ？」

彼女たちはマグナスのために存在する。勝手に犬死になんて結末を、簡単に受け入れるはずがない。図星を指されて悔しかったのか、火垂の眼に殺気が満ちた。

雷真は笑って、

「そう怖い顔すんな。仲良くやろうぜ」

「……ふん、命拾いましたね。ほんの数時間程度だと思いますが」

「おまえもな」

「さっさと出口を探してください。愚図も極まりますね。おまえは芋虫ですか？」

「人任せにするな！ あと、罵倒するな！」

雷真はカンテラを取り出し、マッチを擦って着火した。頼りない明かりが広がり、砂と

岩ばかりの地面を照らし出す。

「さて、どっちに行くか——の前に、おまえを何て呼べばいい？ 火垂ひたるでいいか？」

「……………」

「返事くらいしろよ」

無愛想な頬ほを指でつつく。火垂は過剰に反応し、雷真らいしんの顔面にこぶしを見舞った。

ただし、鼻骨を折る寸前で止まる。……紅翼神こうよくじんが間に合って、本当によかった。

「よほど死にたいようですね。この私に攻撃を仕掛けるとは」

「小突いただけで殺すなよ!? おまえの顔は起爆スイッチか何かか——」

とりあえず、爆発物なみに危険なのは間違いない。

「私のことなど、好きに呼べばいい。火垂さまでも火垂閣下でも火垂大明神でも」

「仰々しい敬称を要求するな。つか…………ぶっ」

思わず噴き出した途端、また鉄拳が飛んできて、頭蓋骨を砕かれそうになった。

「何が可笑おかしいのです？」

「沸点が低すぎる！ もっと小魚を食え！ 意外と人間的だなと思ったただだ。あいつと

一緒にいるとき、おまえら全員、機械みたいに見えたからよ」

「我らはマスターの大願のために存在します。機械で結構、個性など不要です」

すたすたと勝手に歩き出す。——それで、行く方向が決まった。

早足の火垂を追いかけながら、雷真は不思議な感慨に包まれた。

(こうしてると、まるで……)

両国の花火大会を思い出す。激しい人波の中を、妹と二人で歩いた夜を。
……胸がきしきしと痛む。

感傷を抱いて歩くうち、次第に地形が変わり、唐突に地面が消えた。

足場がそこで途切れ、底の見通せない、深い闇の中へと落ち込んでいる。
かなり遠くに、朧月のような、白いドームが浮かび上がっていた。

「(愚者の聖堂)……だな」

やはり、ここは学院地下の大空洞だ。

火垂は天を見上げ、横柄な口調で催促した。

「学院の地下なら話が早いです。天井をブチ抜きますので、魔力を渡しなさい」

「だめだ。天井を破ったら、おまえ、そのまま俺を置いて行くだろ」

ここには謎の怪物が徘徊している。取り残されるのはぞっとしない。

今、雷真にできることは――

「ちよいと野暮用でよ、俺はあの建物に行かなくちゃならないんだが」

「奇遇ですね。私もあそこに近づく者を排除しなければなりません」

「なら、あの近くまでは一緒にに行けるってことだよな？」

「なっ――どうしてそうなる――」

「考えてみろよ。今ここで俺を殺せば、おまえは魔力の供給源を失って、怪物にも侵入者

にも対応できなくなる。もちろん、俺を一人で行かせても同じことだ」

「む……」

「ここは学院の地下。辛抱していれば、お仲間がやってくる。そのとき、おまえも目立つところにいた方がいいだろ。一番目立つのはあそこだぜ？」

火垂はむすつとした。反論できなかったらしい。

「……いいでしょう。ですが、聖堂に侵入しようとするれば、殺します」

「その前に、怪物に殺されなければな。見ろよ、下にうじゃうじゃいるぞ」

「愚かなことを。あの程度の魔法生物に、マスターの戦隊が負けるとでも？」

二人は不敵な視線を交わし、同時に崖を蹴って、斜面をすべり降りた。

5

その日の正午――

シャルはシグムントを帽子にのせて、メインストリートを歩いていた。

雷真と日輪をランチに誘いたくて、風の精霊に探させる。新たに得た力はとても便利だ。雷真が野戦演習場で訓練していることを、すぐに把握した。

そちらに歩き出そうとしたとき、目の前に自分自身が立ち上がった。

「貴女あなたって本当に、あきれるくらい勘が鈍いのね」

——いや、それはシャルではない。鏡映しの自分、ロツテだ。

しばらく顔を見せなかったが、一応はシャルの守護精霊ガーディアン。シャルの精霊感応力エコーズセンスが具現化したもので、シャルとは不可分の存在だ。

「感じないの？ 風が騒いでいるわ……すごく嫌な感じよ」

言われてあたりを見回すと、確かに精霊たちが騒がしい。のみならず、学生がやたらとストリートを駆けている。旧交戦フィールドに集まっているようだ。

「あわただしいわね。変な放送があったみたいだけど、事件かしら？」

首をひねるシャルの背中に、誰かがぶつかってきた。

「うおっ、ごめんなさ——って、プリューさん!」

ぶつかった男子学生が目をむく。（暴走）さまとの接近遭遇、まして体をぶつけたのだ。

恐怖で腰を抜かす……かと思いきや。

「こないだの試合、すごかったよ。金色のオルガに勝ちちゃうんだもん!」

男子は笑顔でそう言い、何事もなかったかのように走り去った。

以前とは、はっきり違う反応だ。恐怖されるどころか、誉められた!

シャルは落ち着かない気分で、頭上のシグメントを見上げた。

「ど、どうしたのかしら、急に?」

「どうやら一目置かれたようだな」

「今までだって置かれてたはずよ。私は（ラウレンズ）なんだから」

「バカねえ、シャル。今までののは「距離を置かれてた」って言うのよ」
 「うぐっ……何よ二人してー」

しかし、言い返せない。シャルにも自覚があるのだ。

シグムントは目を細め、穏やかな声で言った。

「知っているか、シャル。君の（暴竜）——タイラントレックスというあだ名だが、近頃はヴァリアントレックスと言うのが流行りらしい」

「勇ましい？」

レックスが〈王〉の意なので、さしずめ〈英雄王〉と言ったところか。

それは恥ずかしくなるくらい、輝かしいあだ名だった。

「とても誇らしいわ。全部、貴方のおかげね。ありがとう、シグムント」

「素直すぎて不気味だわ。ライシンじゃなくても引くわ」

「横から無礼よー 人が素直にお礼言ってるのにー」

「信頼は一朝一夕には得られん。日頃の行いがものを言うのだ。時間をかけて築き上げた悪評は、時間をかけて崩すしかあるまい」

「築き上げたとか言わないで！ でも、そうね、これから頑張るわ」

「うむ……確かに気味が悪い」

「もうっ！ 意地悪言っていると、お昼のチキンがスイートコーンに化けるわよー」

「そうそう、それでこそ君だ」

楽しんで笑うシグムント。眺めているうちに、シャルも可笑しくなった。

だが、もちろん——そんな場合ではなかったのだ。

不意に腐臭をかいたような気がして、シャルとロッテはそろって口元を覆った。

「何、この空気……!? 風の精が怯えて……敵意を抱いてる……!」

「だから言ったじゃない! ただごとじゃないのよ!」

木立の奥から、眼に見えるほどの瘴気が押し寄せてくる。

濃密な魔力と妖気の集合体だ。はつきり、まがまがしい。

その瘴気の感じに、シャルは覚えがあった。

「この感じ……知ってるわ。以前かけられた呪いと、同じ気配がする……!」

「呪いだ? では、この瘴気の主は——セトの魔女か!」

シグムントがシャルの帽子に爪を立てる。ロッテが危険を予感したのか、シャルを抱きすくめるように覆いかぶさってきた。

「強敵よ! 私の特性を使いなさい!」

言われるまま加護を受け入れる。もしもの場合に備え、特別な魔術を仕込んだ瞬間、林の鳥が一斉に飛び立ち、通りに金髪の少女が現れた。

左右で結った髪が風をはらみ、あたかも獅子のたてがみのよう。顔立ちは若く。シャルと大差ないか、少し下に見える。金色の眼には強烈な輝き。随分と異色な衣装を着ていた。ふともも、胸元、ヘソがあらわになった、露出の激しい衣装を着ていた。

療氣をまき散らしながら、悠然と歩いてくる。そのすぐ後ろに、獅子の姿の自動人形が
つき従っていた。体軀は熊ほどもあり、各所を装甲板で覆われている。

ガラム犬にコンセプトに近い。だが、中身はまるっきりの別物だ。圧倒的な魔力、魔性
を秘めている。一目で禁忌人形とわかるほどに……。

「音に聞こえしヴァルブルギスの学び舎——この目で見るのは初めてじゃ」

少女が透明なソプラノでつぶやく。声を聞いただけで、シャルの脚がすくんだ。
格の違いを感じる。この少女、間違いない怪物だ！

「ほちほち始めようかの。——やれ」

気安い調子で少女が告げると、林から次々に魔術師が飛び出した。

そろいの黒コートを羽織っている。魔術師協会（灰十字）の装束に似ているが、こちら
は茨を模した刺繍が施され、漆黒の布地に大輪の薔薇が咲いていた。

魔術師の数は十人……二十人以上いる。全員が黒豹型の自動人形を連れていて、行動は
機械のように統制されていた。ストリートを駆け、学院のすみずみに散る。

手近な黒豹が大口を開け、紫色のプラズマを放った。

プラズマはゴシック調の壮麗な建造物、工學部の校舎にぶち当たった。壁面にスパーク
が走り、石が赤熱、パンが焼けるように膨らんで——弾け飛ぶ！

融合爆裂の魔術だ。ファイアボールやヒートッドパイルよりも数段レベルが高い。百年
の歴史を誇る機巧魔術の殿堂が、一撃で廃墟となった。

半壊した校舎から学生たちが飛び出してきて、逃げ惑う。

「さあさあ、ライコネンを仕留めた者には、空いた薔薇の席をくれてやるわえ！」

魔術師たちが目の色を変え、さらなる破壊にのめり込む。

炎上する庭園の通路を、シャルとシグムントは呆然と眺めた。

何が起きているのか、まるで理解できない。

だが、するべきことはわかっていた。

「と……と……止まりなさい！」

決死の言葉を叩きつける。少女はゆったりと振り返り、シグムントに目を留めた。

「ほう、魔剣の竜——ブリュウの娘かえ。何とも因果じゃの」

黒コートの一人が気付き、少女のかたわらに控えて立つ。

「アストリッドさま……いかがされるおつもりで？」

「魔剣」が欲しい」

「ですが、学生を殺せば、あとあと……」

「一人二人なら問題なかる？ この者は——」

言葉の続きは、すぐ真後ろから聞こえた。

「わしが屠るわえ」

「——!?」

シャルの薄い胸を背中から突き破り、白い手首が飛び出した。

「夜々の代わりに、
私を妻にしてください！」

雷真を見上げるいろりの頬が、
今さらながらに赤く染まる。

